

# 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅰ

## 寺 地 遺 跡

2 0 0 2

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅰ

## 寺<sup>てら</sup>地<sup>じ</sup>遺跡

2002

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 序

北陸新幹線は、東京都を起点とし、上越新幹線高崎駅から分岐して、長野市・糸魚川市・富山市付近・小浜市付近を経て、大阪市に至る総延長600kmの新幹線です。また、それは北陸地方と首都圏・関西圏を短時間で結び、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

新潟県教育委員会では日本鉄道建設公団と協議を行い、北陸新幹線の建設にともなう、発掘調査を実施しました。本書は日本鉄道建設公団から新潟県教育委員会が委託を受けて実施した「寺地遺跡」の発掘調査の報告書です。

この付近にはすでに1979（昭和54）年12月5日に一部が国史跡に指定された寺地遺跡があり、今回の調査の結果、縄文時代のほか室町時代や江戸時代の遺物が出土し、寺地遺跡の範囲が200mほど南まで広がっていることが明らかになりました。また、独立丘側からは松尾神社に関連した施設と考えられる遺構が見つかり、松尾神社の沿革と遺跡周辺の中・近世集落の動向などを考える上で貴重な資料を提供しています。

今回の調査結果が、地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、併せて埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機になれば幸いです。

最後に、この調査に参加されました地元住民の方々並びに青海町教育委員会には、多大な御協力と御援助を頂きました。また、日本鉄道建設公団北陸新幹線第二建設局には、本調査に際して格別の御配慮を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成14年 5月

新潟県教育委員会

教育長 板屋越 麟一

## 例 言

- 1 本報告書は、新潟県西頸城郡青海町大字寺地字大門1021-1ほかに所在する寺地遺跡の発掘調査記録である。
- 2 本調査は、北陸新幹線の建設に伴い日本鉄道建設公団から新潟県が受託したもので、発掘調査は調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に調査を依頼し、平成13年度に実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成に係わる作業は、平成13年度に埋文事業団が県教委から受託しこれにあたった。
- 4 出土遺物および調査に係わる各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は「01テラ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。
- 5 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文および挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 6 本文中の注は脚注とした。また、引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載したが、「第IV章 自然科学分析」のみ引用文献を各節の文末に掲載した。
- 7 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合はそれぞれにその出典を記した。
- 8 自然科学分析は、花粉分析、<sup>14</sup>C年代測定（AMS法）、樹種同定について行い、委託機関はいずれも株式会社パレオ・ラボである。
- 9 遺構図のトレースから各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してDTPソフトにより実施し、デジタルデータから直接印刷した。
- 10 各種実測図の縮尺は、遺構分割平面図は1/100～1/300を、遺構エレベーション図並びにセクション図は1/40をそれぞれ基本とした。
- 11 本書の記述は、佐藤敦史（埋文事業団主任調査員）、江端高行（同主任調査員）、相羽重徳（同調査課嘱託員）があたり、木簡関係の記述は田中一穂（同調査課嘱託員）の協力を得た。なお、編集は佐藤が担当した。執筆は以下のとおり分担して行った。  
第I章 序 説（佐藤）  
第II章 遺跡の位置と環境（江端）  
第III章 調査の概要（佐藤）  
第IV章 遺 構 1 1区（江端）、 2 2区A遺構概観（相羽）、1）水場関連施設（相羽）、2）土器集中区（佐藤）  
3）その他の遺構（相羽）、C埋没林（佐藤）、D自然流路（相羽）  
第V章 遺 物 木簡以外（相羽）、木簡（田中）  
第VI章 自然科学分析  
第VII章 まとめ 1縄文時代（佐藤）、A陶磁器について（相羽）、B木簡について（田中）、C旧寺地村について（江端）、3埋没林（佐藤）  
要 約 （佐藤）
- 12 発掘調査から本書に至るまで、下記の方々および機関から多くの御教示・御協力を得た。厚く御礼申し上げる。（敬称略 五十音順）  
秋山 俊隆 安藤 正美 伊藤 啓雄 木島 勉 霜越 幸夫 高浜 信行 滝川 邦彦  
土山 正夫 長谷川 正 宮崎 和夫 山岸 ミツ 小野 茂信 坂井 秀弥 土田 孝雄  
金子 拓男 本井 晴信 宮田 進一 山田 昌久 渡辺 裕之 渡辺 誠 渡辺ますみ  
日本鉄道建設公団 青海町教育委員会 糸魚川市教育委員会

# 目 次

第 I 章 序 説 .....	1
1 調査に至る経緯 .....	1
2 寺地遺跡の概要 .....	2
3 調査と整理作業 .....	3
A 一 次 調 査 .....	3
B 二 次 調 査 .....	3
4 調 査 体 制 .....	4
5 整理・報告の体制 .....	5
第 II 章 遺跡の位置と環境 .....	6
1 地理的環境 .....	6
2 歴史的環境 .....	7
第 III 章 調査の概要 .....	9
1 グリッドの設定 .....	9
2 層 序 .....	9
第 IV 章 遺 構 .....	12
1 1 区 .....	12
A 遺 構 概 観 .....	12
B 遺構周辺の層位 .....	12
C 遺 構 各 説 .....	12
2 2 区 .....	14
A 遺 構 概 観 .....	14
B 遺 構 各 説 .....	14
C 埋 没 林 .....	15
D 自 然 流 路 .....	16
第 V 章 遺 物 .....	17
1 土器・陶磁器 .....	17
A 1 区 .....	17
B 2 区 .....	18
2 石器・石製品 .....	21
3 木 製 品 .....	22
4 金属製品 .....	24

第Ⅵ章 自然化学分析 .....	25
1 花粉分析 .....	25
2 木製品および埋没林の樹種同定 .....	35
3 放射性炭素年代測定 .....	44
第Ⅶ章 ま と め .....	46
1 縄文時代 .....	46
2 中世・近世 .....	46
A 陶磁器について .....	46
B 木簡について .....	47
C 旧寺地村について .....	48
3 埋没林 .....	49
《要約》 .....	50
《引用文献》 .....	51
《観察表》 .....	52

## 挿 図 目 次

第 1 図 北陸新幹線の法線と遺跡の位置 .....	1	第 8 図 主要花粉化石分布図 .....	27～31
第 2 図 寺地遺跡の立地 .....	2	第 9 図 寺地遺跡出土木製品・埋没林樹種 (1) .....	39
第 3 図 調査範囲と一次調査トレンチ位置図 .....	3	第 10 図 寺地遺跡出土木製品・埋没林樹種 (2) .....	40
第 4 図 青海地域の地形分類 .....	6	第 11 図 寺地遺跡出土木製品・埋没林樹種 (3) .....	41
第 5 図 寺地遺跡と周辺の遺跡 .....	8	第 12 図 寺地遺跡出土木製品・埋没林樹種 (4) .....	42
第 6 図 グリッド配置と基本層序 .....	10	第 13 図 寺地遺跡出土木製品・埋没林樹種 (5) .....	43
第 7 図 祭祀関連木製品出土分布図 .....	16		

## 表 目 次

第 1 表 錢種別数量集計表 .....	24	第 5 表 寺地遺跡出土埋没林の樹種同定結果 .....	38
第 2 表 花粉化石採取試料 .....	25	第 6 表 放射線炭素年代測定および暦年代較正の結果 .....	45
第 3 表 産出花粉化石一覧表 .....	32～34		
第 4 表 寺地遺跡出土木製品の樹種同定結果 .....	38	第 7 表 層位別陶磁器組成表 .....	47

## 図 版 目 次

### 〔 図 面 〕

図版 1 遺跡周辺の旧地形	図版 5 2区遺構全体図
図版 2 1区遺構全体図	図版 6 2区遺構実測図 (1)
図版 3 1区遺構実測図 (1)	図版 7 2区遺構実測図 (2)
図版 4 1区遺構実測図 (2)	図版 8 2区土器集中区縄文土器出土状況図

図版 9 1区土器・陶磁器  
図版10 2区縄文土器(1)  
図版11 2区縄文土器(2)  
図版12 2区土器・陶磁器(1)  
図版13 2区土器・陶磁器(2)  
図版14 2区土器・陶磁器(3)

【写真】

図版20 遺跡周辺の航空写真  
図版21 調査区遠景  
図版22 1区 基本層序1(独立丘中腹部) 基本層序  
2(斜面山裾西側) 基本層序3(斜面山裾南  
側) SB4完掘状況 SD3完掘状況(参道)  
SB4 斜面山裾の遺物出土状況 縄文土器出  
土状況  
図版23 2区 2区全景(東側から) 水場遺構 SK8  
自然木出土状況 SK7土層断面 自然流路  
埋没林(根) 切断痕のある埋没林 縄文土  
器集中区

図版15 2区土器・陶磁器(4) 金属製品  
図版16 石器・石製品(1)  
図版17 石器・石製品(2)  
図版18 木製品  
図版19 木筒

図版24 出土遺物(1)  
図版25 出土遺物(2)  
図版26 出土遺物(3)  
図版27 出土遺物(4)  
図版28 出土遺物(5)

# 第I章 序 説

## 1 調査に至る経緯

北陸新幹線は、「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道で、長野市付近・富山市付近・小浜市付近を經由して東京都と大阪市を結ぶ工事延長600kmの新幹線である。このうち高崎・長野間は、種々の新技術を駆使して建設され、平成9年10月に開業した。北陸新幹線はその高速性、輸送の信頼性、大量輸送能力及び快適性から、北陸地方と首都圏・関西圏を短時間で結び、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展にも多大な効果をもたらすものと期待されている。

日本鉄道建設公団北陸新幹線第二建設局（以下、鉄建公団と略す）は、糸魚川市から富山市までの5市4町、延長約82.5kmを担当しており、平成5年9月に糸魚川市と富山県魚津市間を新幹線鉄道規格新線として工事実施計画の認可を受けた。これを受けて、鉄建公団と新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）との間で、法線内の遺跡の分布調査・確認調査等に関する協議が本格化した。

県教委から分布調査の依頼を受けた新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）は、1996（平成8）年4月25・26日に青海町<sup>とうみ</sup>田海集落付近～青海川間の分布調査を実施した結果、遺物の散布は認められず、また新たな遺跡の発見もなかった。ただ、一部が国史跡に指定されている寺地遺跡周辺が法線にあたるため、その範囲内で確認調査が必要と結論づけた。

2000（平成12）年6月26日、県教委から埋文事業団に、北陸新幹線の田海川～名引トンネル坑口までの間の一次調査依頼があり、9月28日、県教委、埋文事業団、鉄建公団の三者で、確認調査地点の現地確認を行った。この地点は最大5mの産業廃棄物の埋土があり、当初から調査方法が問題とされていたが、鉄建公団が、調査に支障がないようにトレンチを設定する部分の埋土を撤去するという条件で調査を行うということで合意を見た。

10月11日、県庁において県教委と事業団とで、一次調査の打合せを行った。15か所のトレンチの内、4か所の埋土の除去は鉄建公団、それ以外の土砂の除去は埋文事業団という役割分担が正式に決まった。

一次調査は、調査対象面積6,200m<sup>2</sup>を2000（平成12）年11月13日～21日に実施した。調査の結果、3,100m<sup>2</sup>について寺地遺跡の範囲拡大部分として二次調査が必要である旨を報告した。二次調査は2001（平成13）年4月9日から開始した。



第1図 北陸新幹線の法線と遺跡の位置 [国土地理院 1:200,000 富山]

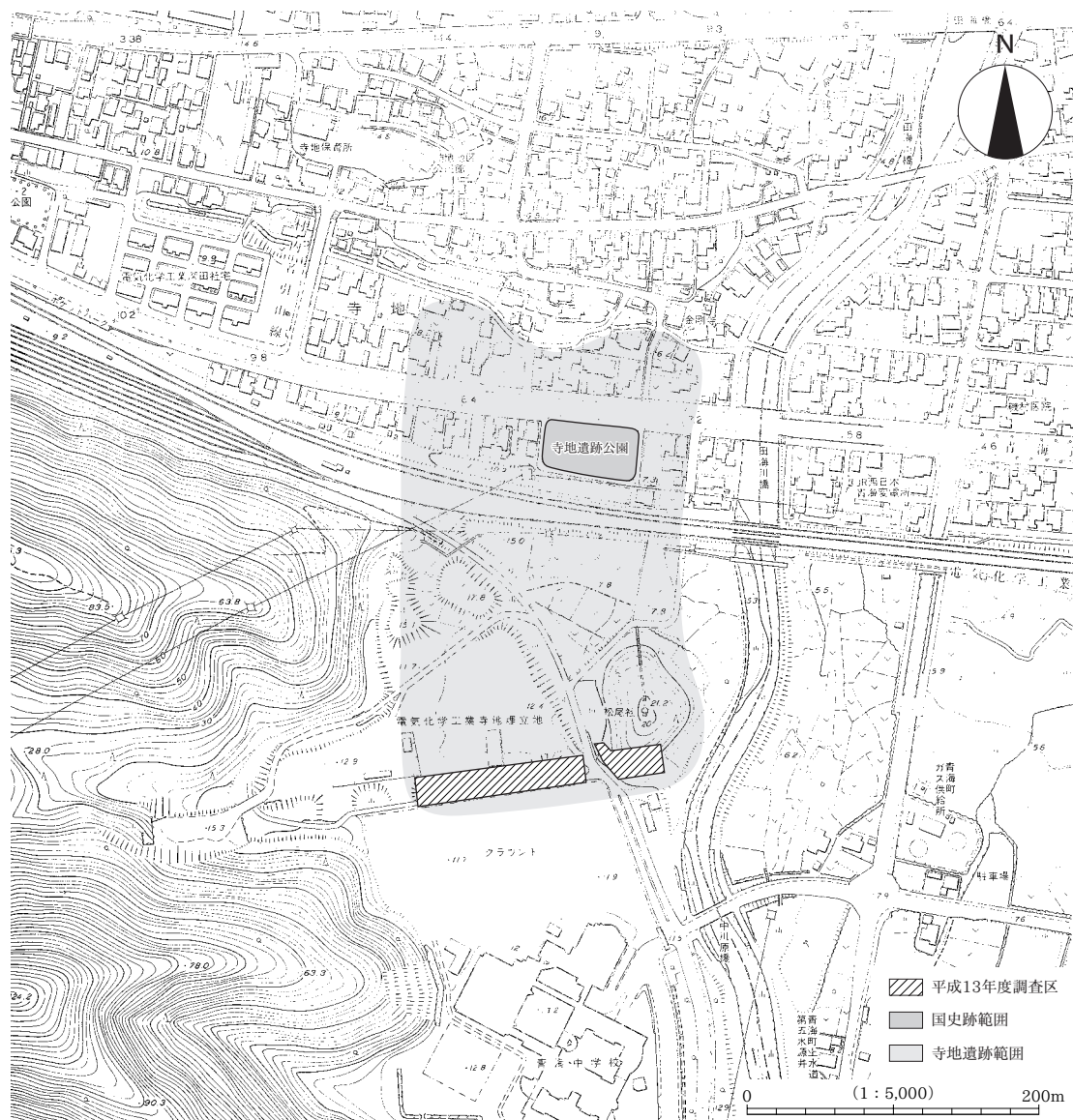


## 2 寺地遺跡の概要

寺地遺跡は、1972（昭和47）年3月22日に新潟県史跡の指定（面積2,073m<sup>2</sup>）を受けている。さらに1979（昭和54）年9月・1980（昭和55）年2月には文化庁の現地視察が行われ、木柱と立石が伴う配石遺構と硬玉工房跡と考えられる竪穴住居跡など他に類例のない貴重なものとして、1980（昭和55）年12月5日文部省告示第176号をもって約2,800m<sup>2</sup>が国史跡の指定を受けた。

2000（平成12）年には北陸新幹線建設に伴い、埋文事業団がその法線内についての一次調査を行った結果、縄文中期と後晩期の遺物が存在することがわかり、寺地遺跡が北陸新幹線の法線上にまで延びていることが判明した。

このことから、遺跡公園の範囲のみになっていた寺地遺跡の範囲を一次調査の結果と寺地遺跡の報告書を照らし合わせ、第2図のように拡大した。



第2図 寺地遺跡の立地

〔青海町役場作成の地図を転載・加筆〕

### 3 調査と整理作業

#### A 一 次 調 査

一次調査は、埋文事業団が2000（平成12）年11月13日～21日までの間に行った。調査は対象範囲内に合計15か所のトレンチを任意に設定し、重機を使用して表土から地山まで徐々に掘り下げ、人力で精査を行いながら遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を確認した。調査対象地には独立丘と平坦地とがあり、平坦地には最大5mの産業廃棄物の埋土があったため、4か所のトレンチ位置を指定し、調査が可能になるように鉄建公団が埋土を撤去した。

調査の結果、独立丘からは縄文中期の遺物を伴う土坑が検出された他、中・近世の土坑も確認された。平坦部からは、1・2トレンチから12トレンチにかけて縄文時代晩期の遺物包含層が存在することが確認できた。この事実は、寺地遺跡が調査対象地まで延びていることを示すものである。

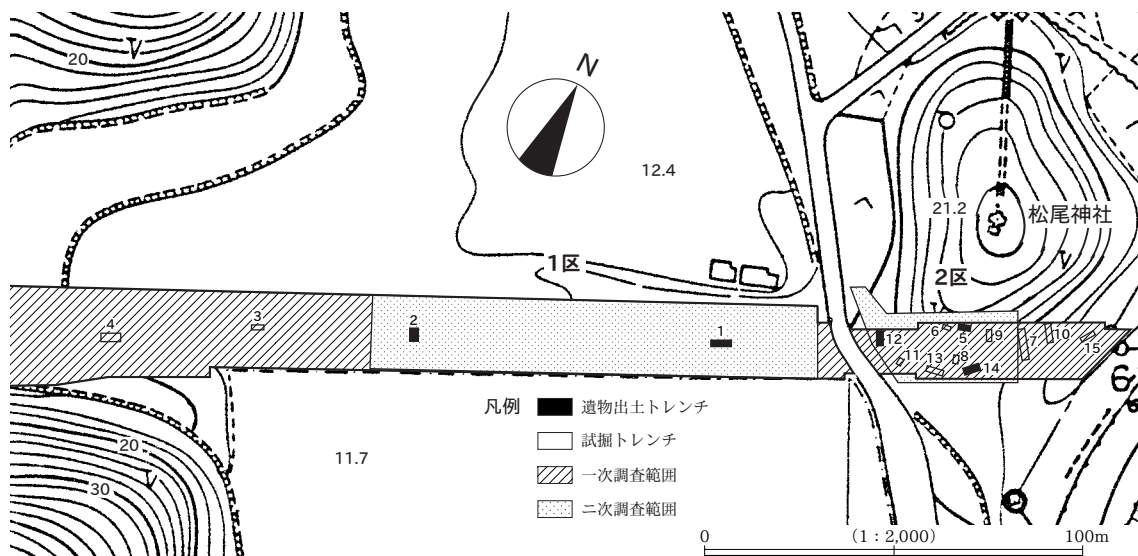
報告を受けて県教委は、これらのトレンチの位置する3,000m<sup>2</sup>の範囲について二次調査が必要であると2000（平成12）年12月11日付教文第366号で鉄建公団に通知した。

#### B 二 次 調 査

二次調査は、2001（平成13）年4月9日～11月2日までの間で実施した。調査は基本的に調査員3名、作業員25名体制で行った。独立丘側と町道を挟んだ平坦地側とは、土層の堆積状況や作業手順などが違っていたため、便宜上調査区について独立丘側を1区、平坦地側を2区とに分けた。

##### 1) 1 区

土層観察用のセクションベルトを設定しながら表土除去を重機で行い、4月23日からは作業員を投入し、調査員の指示のもと包含層発掘を開始した。調査区周囲には排水を兼ねたサブトレンチを巡らし、層序を確認しながら発掘を進めた。5月9日、法線幅を南へ1m、北へ2m拡幅するという変更が鉄建公団側から示され、調査面積が200m<sup>2</sup>追加となり、計800m<sup>2</sup>となった。



第3図 調査範囲と一次調査トレンチ位置図

#### 4 調査体制

5月下旬には1区の包含層発掘をほぼ終了し、独立丘中段からは中世の土坑と一間×二間以上の近世の建物跡を検出した。遺物としては、12トレンチ付近を中心に縄文晩期土器が出土し、山裾付近からは磨製石斧や石皿が出土した。また、ほぼ全体にわたって中・近世の陶磁器類が出土した。6月8日、1区全体の航空写真を撮影し、同日県教委による一部終了確認が行われた。一部に未調査の部分が存在したので、追加調査を行い、7月3日に独立丘中段を中心にした完掘写真を撮影した。7月9日までには遺構の図化作業をほぼ終了した。

#### 2) 2 区

2区は2,400m<sup>2</sup>あり、周囲との安全距離を確保して矢板を打設したため、実質1,925m<sup>2</sup>の範囲について調査を行った。調査区内には平均4mほどの産業廃棄物が埋め立てられており、鉄建公団が調査区外周の鋼鉄矢板打設と産業廃棄物除去を行い、埋文事業団は5月7日から暗渠埋設作業を開始した。

東西中央の大グリッドに沿って土層観察用のセクションベルトを設定し、5月28日から表土除去を開始した。引き続き6月12日から作業員を投入し、セクションベルトおよび南北方向に設定した5本の補助ベルト脇に排水を兼ねたトレンチを設定し、層序を確認しながら発掘を行った。6月19日、安全衛生委員会による調査現場巡視が行われ、6月26日、雨対策用のテント10張りを投入した。また同日から、東側から包含層掘削を開始し、遺物が出土する度に標高を測って取り上げ、層位を確認しながら掘り進めた。7月17日からは残りの包含層掘削と平行して東側から遺構精査を開始した。調査区全体には埋没林が広がり、切断痕が認められる根・幹なども所々に出土した。西側からは縄文晩期の土器が集中して出土したが、遺構とは認定できなかった。8月24日には遺構検出状況の航空写真撮影を行った。8月28日から、東西中央の大グリッドに沿ったトレンチをさらに1m掘り下げる作業と東側からの遺構発掘とを平行して行った。8月30日、県教委と鉄建公団と埋文事業団の三者で今後の発掘調査予定について協議を行った結果、発掘調査期間延長について大筋で合意を見た。また遺構発掘が終了した大グリッドごとに図化作業を行い、10月9日まで一部を除くすべての遺構調査を終了した。この間の9月3日には、文化庁坂井文化財調査官の現地指導を受けている。10月18日、県教委による2区の終了確認を受け、10月23日までには、すべての遺構調査、図化作業とも終了し、10月25日には、2区全体の空中写真撮影を行った。10月27日、主に地元を対象とした現地説明会を開催した。すべての作業は11月2日をもって終了し、鉄建公団に発掘調査区の引き渡しを行った。

## 4 調査体制

### 【一次調査】

調査期間 平成12年11月13日～21日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 野本 憲雄）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（事務局長 須田 益輝）

〈平成12年度〉

総括 須田 益輝（事務局長）

管理 長谷川司郎（総務課長）

庶務 椎谷 久雄（総務課主任）

調査総括 戸根与八郎（調査課長）  
 調査指導 寺崎 裕助（調査課公団担当課長代理）  
 調査担当 小田由美子（調査課主任調査員）  
 調査職員 後藤 孝（調査課主任調査員）

#### 【二次調査】

調査期間 平成13年4月9日～11月2日  
 調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）  
 調 査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（事務局長 須田 益輝）

#### 〈平成13年度〉

総 括 須田 益輝（事務局長）  
 管 理 長谷川司郎（総務課長）  
 庶 務 椎谷 久雄（総務課主任）  
 調査総括 岡本 郁栄（調査課長）  
 調査指導 寺崎 裕助（調査課公団担当課長代理）  
 調査担当 佐藤 敦史（調査課主任調査員）  
 調査職員 江端 高行（調査課主任調査員）  
 相羽 重徳（調査課嘱託員）

## 5 整理・報告の体制

出土遺物の水洗・注記作業は調査現場で発掘調査と平行して行った。未了の注記作業と接合・復元・実測作業、図版・原稿作成は、平成13年11月から平成14年3月にかけて新潟県埋蔵文化財センターにおいて実施した。整理体制は、以下に示すとおりである。

整理期間 平成13年11月12日～平成14年3月31日  
 整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）  
 整 理 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 総 括 須田 益輝（事務局長）  
 管 理 長谷川司郎（総務課長）  
 庶 務 椎谷 久雄（総務課主任）  
 整理総括 岡本 郁栄（調査課長）  
 整理指導 寺崎 裕助（調査課公団担当課長代理）  
 整理担当 佐藤 敦史（調査課主任調査員）  
 整理職員 江端 高行（調査課主任調査員）  
 相羽 重徳（調査課嘱託員）  
 作 業 間 栄子 鈴木 芳子 東條シゲ子（以上、嘱託員）

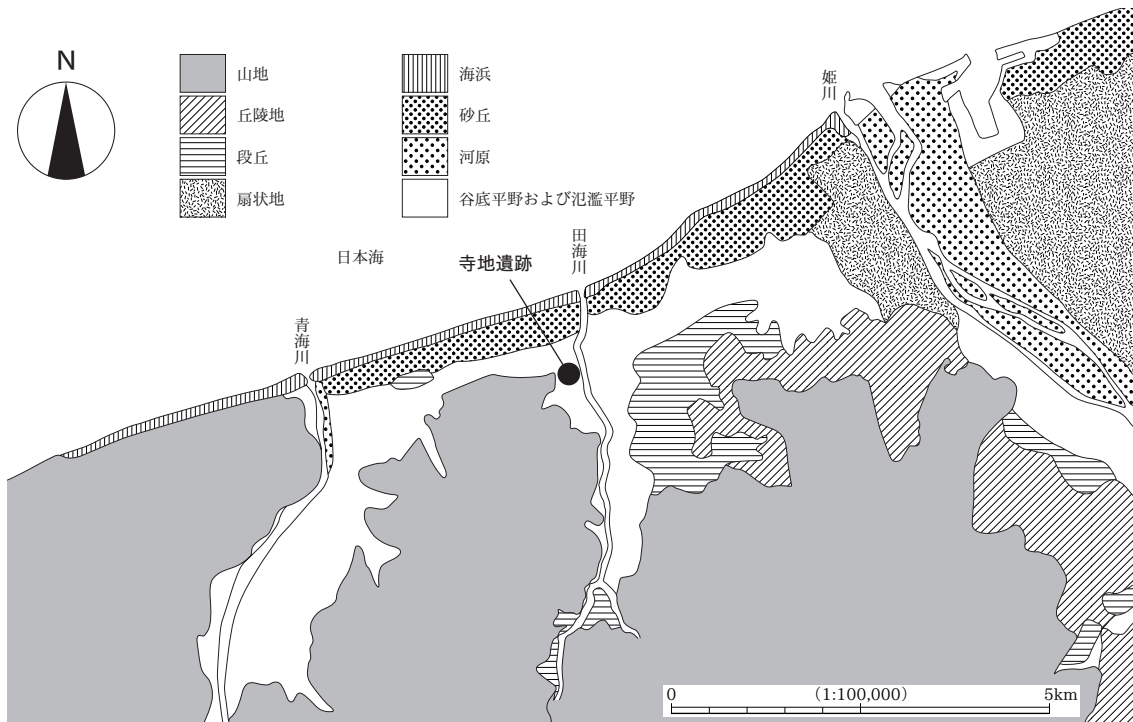
## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

寺地遺跡は、新潟県西頸城郡青海町寺地に所在する。青海町は、本県最西端に位置し、市振地区で富山県と県境を接する。その地勢は、東・西・南の三方を山に囲まれ、北は日本海に面している。姫川沿いにはいわゆる糸魚川～静岡地質構造線（フォッサマグナ）がほぼ南北方向に走っており、地質地形的には山地は東西に二分できる。東側は、主に新生代第三紀～第四紀にかけて堆積した砂岩・泥岩の層からなる。西側は、中・古生代の石灰岩や頁岩・砂岩及び変成岩の各層からなり、青海・蓮華変成岩が分布する地域からは硬玉が産出する〔菅野・天野1990〕。

姫川以西は黒姫山を主峰として、飛騨山脈の北端が日本海に崩れ落ちる山塊地であり、日本海に面しては古来より北陸道の難所として知られる親不知・子不知の回廊がある。また、町域の山塊地は鉱山資源が豊富で、橋立金山は中世から採掘されていた。その一方で町の90%以上が山岳地帯であり、平地は青海川、田海川、姫川の河川流域と海沿いに細長く続いているにすぎない。

遺跡は、海岸から約400m内陸に入った田海川下流の左岸に位置し、舌状の緩傾斜地先端に立地する。遺跡周辺の地形の特徴は、町の中心地である青海地区に位置する青海川河口から東側は寺地地区にかけて海岸砂丘となっていることである。そして、砂丘の内側は中小河川の氾濫原で沖積地が形成され、水田や畑地として利用されていた。しかし、近年では工場用地や住宅地として利用されているため、水田や畑はめっきり少なくなっている。今回の調査区内、1区に当たる松尾神社が鎮座する独立丘は、調査の結果から古砂丘であることがわかった。2区は、田海川の支流である小河川によって形成された扇状地と考えられる。



第4図 青海地域の地形分類

(『土地分類基本調査』糸魚川 [1982] 地形分類図糸魚川を転載・加筆)

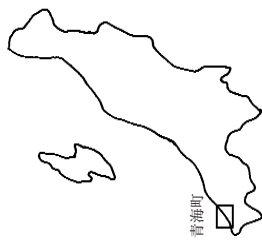
## 2 歴史的環境

糸魚川・西頸城地方においては、姫川支流の小滝川流域と青海川流域から硬玉が産出し、糸魚川市の長者ヶ原遺跡と青海町の当遺跡はともに縄文時代には硬玉製品の製作・加工の場であった〔藤田・清水 1964、寺村ほか 1987〕。青海町における縄文時代から中世にかけての遺跡は、青海川、田海川、姫川左岸の河口部に形成された沖積平地と、そこにのびる低い丘陵上に立地している。町内の著名な遺跡としては、勝山城跡・天神山経塚・大角地遺跡・須沢角地A遺跡があげられる。勝山城跡は落水地区に所在し、天正年間（1573～1582）頃、越中（富山県）への前進基地として築城されたと言われており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であった〔平野 1968〕。天神山経塚は石垣地区に所在し、1919（大正8）年に社宅建設に伴い、仁安二（1167）年の銘のある珠洲焼の経筒が発掘された〔金子 1975〕。大角地遺跡は、当遺跡と田海川を挟んだ対岸に位置する。縄文時代前期と古墳時代前～中期の玉作遺跡である。1970・73（昭和45・48）年に青海町教育委員会によって発掘調査が実施され、縄文時代前期の竪穴住居跡5棟が検出され、滑石を主体とする玉類およびその未成品が出土した。さらに古式土師器をともなう方形プランの竪穴住居跡3棟が検出され、そのうち第7号跡は工作用特殊ピットをもった玉作工房跡であった〔大角地遺跡発掘調査団 1979〕。須沢角地A遺跡は須沢地区に所在し、1987（昭和62）年に発掘調査が実施された。その結果、奈良・平安時代（7世紀末～8世紀前半、8世紀後半～9世紀前半）の集落跡が発見された他、中世（14世紀末～15世紀）の遺構・遺物も出土した〔須沢角地A遺跡発掘調査団 1988〕。

当遺跡は、縄文中期から晩期にかけての集落跡が主体であり、大正期から注目され、姫川・青海川上流の硬玉産地を背景に成立した玉作遺跡として有名である。昭和42年から43・45・46・48年の5ヶ年にわたって青海町教育委員会による発掘調査が行われ、縄文晩期の配石遺構や同中期の硬玉工房跡等が発見された。その結果、縄文時代の精神生活や硬玉製品等の加工技術を知る上で貴重な遺跡ということで1980（昭和55）年に一部が国史跡に指定された〔寺村ほか 1987〕。

当遺跡の中世に目を向けてみると、関係の深い遺跡として松山城跡がある。松山城跡は寺地地区の南方、松山の尾根上に南北500mにわたって築城された。標高170mの地点に本丸跡があり、空堀で仕切られたり、帯郭・裾郭で幾重にも固められている典型的な戦国時代の山城の形式を残している。松山城の麓は「堂の入り」（道の入り）の地名が残り、その谷口に金剛寺が、その「寺門前」に旧寺地村があったと言われている。北陸道を足下に見下ろし、西方は親不知の険を控え、東方は姫川を望み、信州口を押さえる要衝の地であった。しかし、天正6年上杉謙信の死後、御館の乱で山本寺景定が上杉景虎方についたため、松山城は上杉景勝に攻められ、金剛寺や旧寺地村の庄屋小野新兵衛家なども全焼したという。現在でも、「寺マンジョ」（寺跡）・「カネンドウ」（鐘堂）・「大門」・「源太屋敷」などの地名が残っている〔青木重孝 1966〕。

江戸時代になると当地は、幕府によって天和検地の行われたことが記録されている。代々寺地村の庄屋を務める小野新兵衛家に伝わる天和検地台帳には、「火打町 中田 二十二間・五間 三畝二十歩 七郎右工門」という記載がある。この記載にある「火打町」という地名は、今回の調査で出土した木簡に記されている「ひうち」と同一のものと考えられ、寺地村地内に火打町という地名があった可能性は高い。しかし、その場所が現在の寺地地区のどこに当たるかは不明である。



- 縄文時代
- ▲ 古墳～平安時代
- 中世
- △ 城跡跡
- 寺院跡

- 1 勝山城跡
- 2 大沢
- 3 上野
- 4 天神山経塚
- 5 桜ヶ丘
- 6 瀬訪前
- 7 松山塚跡
- 8 寺地 (国指定史跡)
- 9 金剛寺院跡
- 10 塚奈川
- 11 大角地
- 12 西角地古窯
- 13 須賀角地
- 14 須賀水神
- 15 岩木
- 16 道者ハバ
- 17 道者ハバII
- 18 片町
- 19 上列
- 20 原山I
- 21 原山II
- 22 鶴口下
- 23 美山
- 24 若竹原I
- 25 若竹原II
- 26 若竹原III
- 27 若竹原IV
- 28 長者ヶ原
- 29 大原
- 30 三ツ屋原
- 31 一の宮
- 32 清崎遺跡
- 33 天神
- 34 笹吹田
- 35 寺地



第5図 寺地遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院「糸魚川」1:50,000原図 平成8年発行)

第5図 寺地遺跡と周辺の遺跡

# 第Ⅲ章 調査の概要

## 1 グリッドの設定

発掘調査区は東西に細長く、また、全体的に北側へわずかに湾曲しているため、北陸新幹線の法線杭（南側）を利用して、グリッドを設置した。その基準ラインは、L5 (X=113398.819、Y=-61067.770) とL6 (X=113388.554、Y=-61084.956) を結ぶ直線である。大グリッドは10m×10mで、その名称は東西方向を東から算用数字1・2・3……、南北方向を南からアルファベットA・B・C……を付した。また大グリッドはさらに2m×2mの小グリッドに分割して、算用数字で表し、第6図小グリッドのように南東隅を1、北西隅を25とした。そして、「3B4」のように大グリッド表示の後につけて呼称した。

なお、1A杭の座標値は、X=113397.079、Y=-61055.083、8C杭の座標値は、X=113378.345、Y=-61125.450である。

## 2 層 序

調査区は田海川左岸の独立丘と沖積地に位置する。独立丘側の調査区（1区）は南北幅約19m、東西幅約40mの範囲で、その頂上には松尾神社が鎮座している。独立丘の削平部は標高14.5mを測り、そこから山裾に向かって傾斜している。山裾は開墾などにより、削られて旧地形と多少異なっている。一方、その西側にある沖積地側調査区（2区）は、南北幅約19m、東西幅約115mあり、1区から町道一本を隔てた場所に位置している。現地表は3～4mの産業廃棄物で覆われており、発掘地点は、標高約8m前後のところにある。

1区の土層の観察はグリッドラインに沿って数本の観察用ベルトを残し、任意の地点で行った。2区では8C～18Cの大グリッド杭に沿って東西に観察用ベルトを、南北には数本の補助ベルトをそれぞれ残した。しかし、1区と2区との間には町道が走っているため、その対応関係を明確にできなかった。両者とも、I層（表土・旧表土）、II層（近世遺物包含層又は近世攪乱層）、III層（中世遺物包含層）、IV層（縄文遺物包含層）、V層（地山）を基本に分層を行い、必要に応じて細分した。基本層序は1区と2区に分けて記述を行い、色調は観察地点の色調を記した。

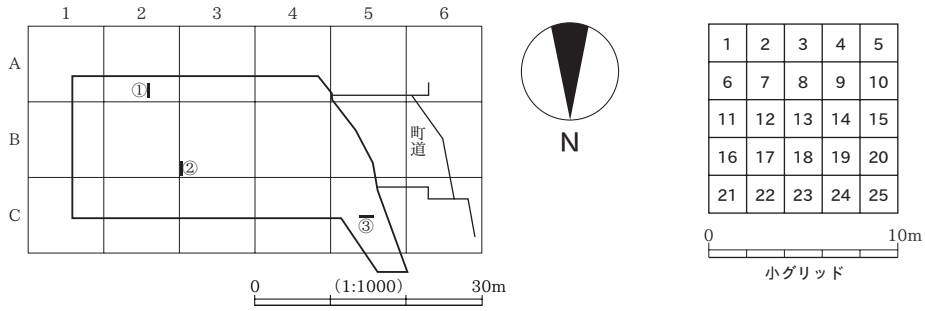
### [1区]

- I 層（表土）黒褐色シルト。2～10mmの炭化物が少量と10mmの黄色砂礫及び5cm程の小石が多く混じる。
- II 層（近世遺物包含層）オリーブ褐色シルト。灰オリーブ粘土ブロック・3cm以下の炭化物・黄色砂礫・0.1mm程の白色粒が少量混じる。
- III 層（中世遺物包含層）暗茶褐色土シルト。1cmほどの小石・黄色砂礫と2～5mmの炭化物が少量含混じる。
- IVa 層（縄文晩期遺物包含層）灰オリーブ粘質シルト。5～10の炭化物を少量含み、腐植物も広がる。粘性がかなりある。

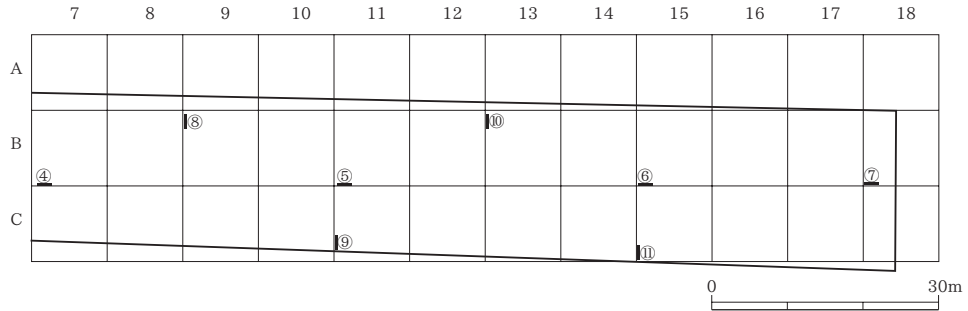


2 層 序

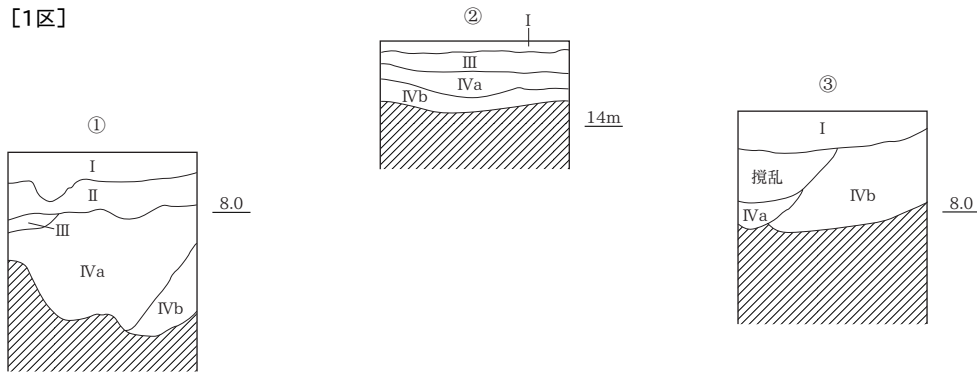
【1区】



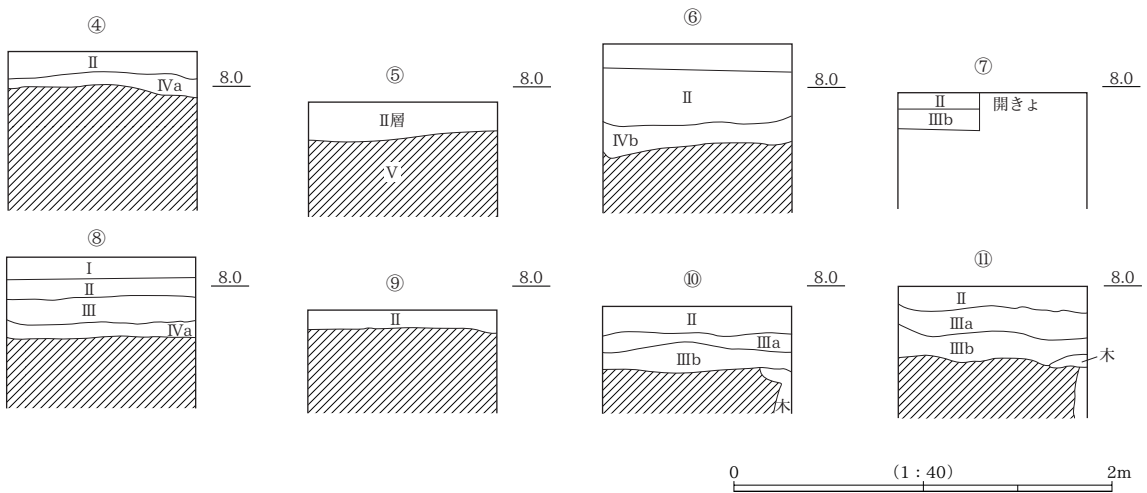
【2区】



【1区】



【2区】



第6図 グリッド配置と基本層序

IVb 層（縄文中期遺物包含層）オリーブ褐色土シルト。3～7mm程の炭化物と10mm程度の黄色砂礫を少量含む。

V 層（地山）黄褐色の礫層。黄色砂を所々に含む。

[2区]

Ia 層（埋土）産業廃棄物の埋土（3～4m）。

Ib 層（旧表土）産業廃棄物と暗オリーブ褐シルト。

II 層（近世攪乱層）暗オリーブ褐シルト。2mm程度の炭化物や礫をごく少量含む。また5mm程度の黄褐色の粘質シルトもごく少量含む。縄文～近世陶磁器を含む。

IIIa 層（中世遺物包含層）黒褐シルト。3mm程度の炭化物や5～10mm程度の黄褐色の粘質シルトをごく少量含む。

IIIb 層（中世遺物包含層）黒褐シルト。IIIaに比べ、粘性が強い。2mm程度の炭化物をごく少量含む。  
※a層とb層に分けられないものはIII層とした。

IV 層（縄文晩期遺物包含層）暗オリーブ褐シルト。2mm程度の炭化物をごく少量含む。II層やIII層に比べ層厚は薄い。

V 層（地山）河川等による堆積のため、場所によって砂・シルト・砂礫等と異なっている。

# 第Ⅳ章 遺 構

## 1 1 区

### A 遺 構 概 観

1区で検出された遺構は、長方形を呈する土坑（SK1）と建物跡（SB4）およびピットと溝（SD3）である。その内、土坑と建物跡は調査区外に伸びており、全体を把握することはできなかった。土坑からは北宋銭が6枚出土し、建物跡を構成する柱穴群からは寛永通宝や越中瀬戸焼などが出土した。この事から土坑は室町時代以降、建物跡は江戸時代と推定できる。

これらの遺構の付近からは、鱗口の破片やかかわらが出土した。それに加えて松尾神社が北側に隣接することから当該遺構は、旧松尾神社に関連した施設であった可能性が高い。この他、南側斜面では、溝状の掘り込み（SD3）、平坦面では段切り、整地痕跡が確認できた。今回の調査区から青海中学校周辺には、室町時代～江戸時代にかけて旧寺地集落が所在していたという伝承〔青木1966〕が残っており、この伝承が確かなものという前提に立てば、この溝状の掘り込みは旧松尾神社関連施設へ続く道（参道）だったのではないかと予想される。平坦面の整地痕跡は、松尾神社が鎮座する独立丘頂部から南方に伸びる尾根線を断ち切っていることから、旧松尾神社関連施設の建設に係るものと考えられる。

### B 遺構周辺の層序

遺構周辺の層序を見てみると、基本層序は表土に当たるⅠ層と地山であるⅤ層のみで、他はすべて基本層序とは異なっていた。このことは、遺構周辺では整地等の土木工事が行われていたことを示唆するものである。また、高位の地山層であるⅤ①層・Ⅴ②層（図版2）が低位で認められないという事実や主観的な観点ではあるが全般的に粘性やしまりが弱い点も、土木行為を裏付けているものと思われる。なお、地山のⅤ③層・Ⅴ④層（図版2）は、古砂丘である。

Ⅰ・Ⅴ層以外の各層序の性格は、遺構の切り合い関係や出土遺物から、1層は整地後の堆積土、2・3層はP5の覆土、4層は木の根等の攪乱、5層は整地土またはSK1の覆土、6層はSK1覆土、8層は整地土または整地後の堆積土、7層はP1の覆土、9・10層は盛土と考えられる。

### C 遺 構 各 説

#### 1) 土 坑

##### SK1（図版3）

3C7・8・11～13にあり、調査区外に伸びる。平面形は長方形で、上端長径364cm・上端短径240cm・深度48cmを測る。覆土は6層からなり、遺物は北宋銭（第1表）が6枚出土した。

##### SK2（図版3）

3C6・7グリッドにあり、平面形は楕円形である。上端長径206cm・上端短径94cm・深度36cmを測る。覆土は暗褐色の単層であるが、遺物は出土していない。

## 2) 建 物 跡

## SB4 (図版3・22)

調査区外に伸びる1間×2間(横3.6m×縦5.4m)以上の建物跡でP1～5はその柱穴と考えられる。ピットは上端長径100～120cmの楕円形や不整形で、深度は70～92cmである。ピットの覆土はいずれも単層で3層に類似する黒褐色土が主体を占める。以下は各ピットについての説明である。

## P1 (図版3)

2C15と3C11にあり、平面形は楕円形である。上端長径110cm・上端短径94cm・深度132cmを測る。覆土から越中瀬戸焼(1)が出土した。

## P2 (図版3)

2C15と3C6・11にあり、平面形は楕円形である。上端長径136cm・上端短径120cm・深度100cmを測る。底面は瓢箪形であることから、立替えの可能性も考えられる。覆土から越中瀬戸焼と京風唐津焼(11・12)が出土した。

## P3 (図版3)

3C6にあり、平面形は楕円形である。上端長径122cm・上端短径104cm・深度92cmを測る。覆土から越中瀬戸焼と寛永通宝(194)が1枚出土している。

## P4 (図版3)

3C13にあり、平面形は楕円形である。上端長径72cm・上端短径68cm・深度88cmを測る。覆土は炭化物を少量含むが、遺物は出土していない。

## P5 (図版3)

3C12・13にあり、平面形は楕円形である。上端長径40cm・上端短径30cm・深度94cmを測る。覆土から銭貨(196)が出土している。

## 3) 溝

## SD3 (図版4・22)

3Cと3Bグリッドにあり、平面形は不整形である。長さ950cm・幅250cm・深度28cmを測る。底面は踏み固められたことを物語るように凹凸している。

## 4) ピ ッ ト

## P6 (図版3)

3C8・13にあり、平面形は楕円形である。上端長径82cm・上端短径56cm・深度60cmを測る。

## P7 (図版3)

3C12・13にあり、平面形は楕円形である。上端長径48cm・上端短径28cm・深度18cmを測る

## P8 (図版4)

3C2にあり、平面形は楕円形である。上端長径74cm・上端短径62cm・深度36cmを測る。

## 5) 整 地 痕 跡

独立丘頂部から南方に伸びる尾根線上、2～4B・Cグリッドの範囲において約24m×約11mの規模

で確認出来た。その痕跡は、標高 14.5m のラインで平坦に整地され、その範囲内に土坑 (SK1)・建物跡 (SB4) と参道跡 (SD3) の一部が含まれる他、その中には長径約 11.5m・短径約 9m と推定できる楕円形の浅い落ち込みも認められる。層位も、表土 (I) 層と地山 (V) 層以外は基本層序を確認できず、独自の層位である。この事実も、尾根線上を整地して平坦面を作り出していることを示している。

## 2 2 区

### A 遺構概観

小河川 (SD4) がグリッド 8B・C を南から北に向かって貫流し、流路内に 7m 間隔で直径 3m ほどの土坑を 3 基検出した。縄文時代後期中葉の集落遺跡である長野県中野市栗林遺跡では湧水を貯水し、堅果類などの水さらしを行うための竪穴が小河川を横断するように設けられている [斎藤 1994]。本遺構では木組や石組などの人工構築物は確認されなかったが、遺構の立地に類似点がみられ、「水場」である可能性がうかがえる。その他、年代不明の井戸 1 基を確認した。

### B 遺構各説

#### 1) 水場関連施設

##### SD4 (図版 6)

調査区 8B・C を南北に貫流し、幅 170cm、深さ約 12cm を測る。覆土は基本的に単層からなり、一部、相似した 2 層の砂層からなる。自然流路の中からは遺物は出土していない。

##### SK7 (図版 6・23)

8B と 8C に位置する。確認面は V 層。平面形は、略楕円形を呈し、長軸約 480cm、短軸約 230cm、深さ約 32cm を測る。南端を現代の攪乱により破壊される。土坑の覆土は 2 層からなり、泥炭化した黒色粘性シルト層が大半を占める。覆土内からは加工の跡が認められない微細な枝が多量に出土した (図版 6)。出土状況は直立せず、ほぼ横位であった。覆土の直上位には SD4 の覆土 (黒褐色砂層) に覆われている。底に近い位置から石核 (223) が出土した。出土遺物はこの 1 点のみである。遺物の年代観、及び、覆土が IVa 層 (縄文晩期遺物包含層) より下位に位置することから、本土坑は縄文時代に帰属するものと考えられる。

##### SK8 (図版 6・23)

8C に位置する。確認面は V 層。プランの北端は調査区外に伸びる。平面形は隅丸方形を呈し、短軸約 330cm、深さ約 40cm を測る。土坑の覆土は単層からなる。覆土は SK8 の 1 層と近似する。SK8 と同様、覆土内から多量の枝が検出された (図版 23)。底に近い位置から剥片石器 (図版 16-224) が出土した。出土遺物はこの 1 点のみである。遺物の年代観、及び、覆土が IV 層 (縄文晩期遺物包含層) より下位に位置することから、本土坑は縄文時代に帰属するものと考えられる。

##### SK9 (図版 6・7)

8B に位置する。確認面は V 層。プランの南端は調査区外に伸びる。検出部の平面形は半長円を呈し、短軸約 250cm、深さ約 44cm を測る。土坑の覆土は 7 層からなる。内、1~4 層は SK8 の 1 層と近似する。SK161 と同様、覆土内から多量の枝が検出された。遺物は出土していない。

帰属年代は層位、及び、SK8 との類似点から縄文時代と考えられる。

## 2) 土器集中区 (図版8・23)

2区西側16Cと17Cにかけてほぼ7m×7mの範囲内で、晩期後葉の土器約600点が小礫と粘土が混合した土層(IVC層)から集中して出土した。ほとんどが小破片であるが、中には胴部から下部にかけて残存している深鉢形土器が二つ並んで正立して出土した。周囲には縄文の遺物包含層が存在しないが、なぜここにだけ遺物包含層が存在し、遺物が多数出土したのかについては不明である。

## 3) その他の遺構

### SE6 (図版6)

8Cに位置する。上面は現代の攪乱層(産業廃棄物)に覆われていたため、重機で除去した。確認面の平面形は円形を呈し、直径70cmを測る。底形は中央がやや窪む播鉢型の円形で、直径40cmを測る。確認面からの深さは約52cmを測る。覆土は10層に分かれ、1層と2層は産業廃棄物層である。遺物は出土しなかったが、5層と9層から木端が出土している。本遺構の底は礫層からなる湧水層で止っており、井戸の可能性が高い。しかしながら、井戸に伴う施設は確認されていない。また、遺構の上半は攪乱されているため上部形態は不明であり、従って、検出された遺構も湧水部(マナコ)であるのか、井壁であるのか判断しかねる。覆土上位を産業廃棄物層に覆われていたことから、最終的な埋没年代は現代であるものの、調査区全体を通じ出土している中近世の木端が中位で出土しており、使用の終了時期が中近世に遡る可能性がある。

## C 埋 没 林

### 1) 概 観

2区はほぼ全域にわたり埋没林が分布している。3～5m四方の広さをもつ埋没林の根が6箇所、根や幹などに人の手によって切断された痕跡が10カ所認められた。寺地のフカダにも埋没林があるが、その中にも2区で出土したような切断痕や工作痕があることから[青木1966]、同じような土地利用が2区にまで広がっていたと考えられる。

### 抜き取り跡 (図版6・23)

8B・Cに位置する。確認面はV層。約1.0～1.8m幅の溝状遺構。本遺構はIII層を掘り込んで形成されている。覆土からは縄文土器、須恵器、近世陶磁器が少量出土した。いずれも小片であるため図化していない。また、覆土内に木端が大量に含まれ、底に近い位置で樹皮を確認した。SD5の北端にあたるSK7中央部では、木株とそれに連なる幹の基部がSD5と軸を同じくして南西方向に横たわった状態で確認された。このことから、本遺構は近世期の倒木の除去に伴う痕跡と考えられる。

### 切断痕のある倒木 (図版5・23)

14Cに位置する。確認面はV層で、標高7.7mで確認ができた。伐採痕は、金鋸ではなく、鉄斧を用いたと考えられる。

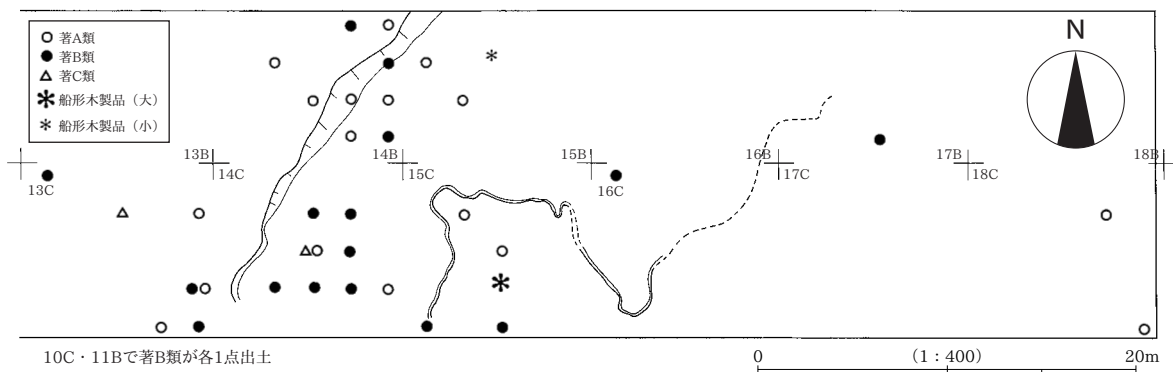
### 根 (図版5・23)

調査区内で最大の根が9Cに位置している。確認面はV層で、標高7.8mで確認できた。範囲は10m×5mで、上部はほとんど水平である。

## D 自然流路

14～16B・Cでは落ち込みが確認された。形状が不定形であり、覆土が水平に近いレンズ状の堆積をなすことから自然流路と判断した。覆土内からは珠洲焼甕類の胴部片と「政和通寶」(214)が出土した。覆土がⅢb層より下位に位置し、かつⅢb層に近似することから、室町時代頃の遺構と判断した。

自然流路内、及び周囲からは舟形木製品が2点と多量の箸・箸状木製品が出土した(図版18-252～255)。舟形は弥生時代から近世までみられるが、古代では「人形」を他界に送る役割と水神への捧物としての役割[金子1988]、「鬼や疫神を乗せ祓い流す」役割[水野1985]があるという。石川県ではこれらが墨書土器を定量有する官衙的要素を持つ遺跡の溝や井戸で出土することが殆どであることから、水辺の祭祀に使用されたものと指摘している。同じく石川県内の中世遺跡では人形に対し、舟形の出土量が圧倒的に多く、必ずしも人形とセットで用いられたとはいえないという[石川考古学研究会1997]。本調査区内でも人形の出土はなく、舟形単独での使用が考えられる。一方、本調査区の箸・箸状木製品の一部は、「N」字状に折り畳んだ状態や、地面に直交した状態で出土している。中世では、地面に突き立てられた箸は古代の斎串の役割を果たした[四柳1987]という。加えて、出土木製品の中に、荘厳具(図版18-261)や調度品の一部(図版18-263)<sup>1)</sup>が見られることから、調査区周辺に宗教的施設(建築物)の存在が想定される。以上のことから、自然流路とその周辺は祭祀的空間を形成していた可能性が指摘できるが決定的な証拠に乏しく、残念ながら推測の域を脱しない。



第7図 祭祀関連木製品出土分布図

1) 調度品や建築部材は故意に壊されていたり、一部を焼失しているものが多い。

# 第V章 遺 物

## 1 土器・陶磁器

### A 1 区

#### 1) 出土状況

遺物は定量出土したものの、細片が多く、散発的である。縄文土器は前期・中期・晩期の土器が出土した。中世では、平坦部東側の盛土中から京都系土師皿が出土した。近世陶磁器は碗・皿類などの供膳具の出土が極めて少量であるのに対し、越中瀬戸の小壺の出土量が多く、遺存率も高いのが特徴的である。

#### 2) 各 説

出土した遺物を出土地点毎に報告する。

#### 掘建柱建物 SB4 (1)

1は越中瀬戸系<sup>1)</sup>の小壺。近世陶器と考えられる。その他、越中瀬戸の小壺口縁部片、寛永通宝(図版7-194~196)が出土した。

#### 平 坦 部

#### 縄文土器 (2~4)

いずれも深鉢。2は前期、胴部片、胎土中に繊維を含む。表裏から穿たれた直径12mmの円孔を有する。補修孔であろう。3・4は中期。3は胴部片。4は口縁部で渦巻文描出。

#### 土 師 器 (5)

古代の長胴甕。口縁部は直口する。内外面をハケメ調整。調整方向は基本的に外面が縦位に、内面が横位となる。

#### 珠 洲 (6)

器種は壺、吉岡V期[吉岡1994]に比定される。

#### 土 師 皿 (7~10)

中世の土師皿で、製作技法の差異から2類に区分する。

1類(10) : ロクロ成形で、底部を糸切り調整する。

2類(7~9) : 手づくね成形。

#### 近世陶磁 (11~14)

11・12は肥前系陶器<sup>2)</sup>。いわゆる「京焼風唐津」の碗。大橋Ⅲ~Ⅳ期[大橋1993]に該当する。11は畳付を除き施釉される。高台内は外より深めに削り込む。貼り付け高台。13・14は越中瀬戸の小壺。

1) 製作技法が越中瀬戸焼に近似する。但し、胎土は灰褐色を呈し、比較的堅緻である。また、器表に長石の吹き出しが顕著にみられる。富山県立山町周辺に位置する越中瀬戸焼古窯址群の中で現在までに知られていない窯か、あるいは近在地に越中瀬戸の技法を用いた窯が存在する可能性がある。

2) 本報告では佐賀・長崎・福岡などの北九州一帯に産地を求められる、いわゆる「伊万里焼」と呼称される磁器の一群を「肥前系磁器」、「唐津焼」と呼称される陶器の一群を「肥前系陶器」とする。



## 裾 部

### 縄文土器 (15～19)

15は中期の深鉢の底部。16は晩期の胴部片で、赤彩されている。17は晩期の深鉢、口縁部内側に沈線が施されている。

18は晩期の深鉢。19は晩期の胴部片。沈線を2条横位に引き、下位は条痕文を施す。

### 古代以降の須恵器・陶磁器 (20～27)

22は須恵器の甕類胴部片。20は瀬戸美濃の碗底部。21、24、26は珠洲焼。21は甕。24・26は鉢。27は瓦器。23、25は肥前系陶器。23は皿。高台を削り出し、碁笥底風を呈す。表面の剥離および二次的損傷が激しく、目跡は確認出来なかった。16世紀末～17世紀前半の所産である。25は播鉢。口縁形態より17世紀中頃から後半の所産である。

## B 2 区

### 1) 出土状況

遺物包含層から縄文土器、石器、古代の土器、中・近世の遺物が出土した。多くは細片である。包含層はⅡ層・Ⅲ層・Ⅳ層が該当する。Ⅱ層は近世後半の遺物を、Ⅲ層は古代・中世・近世前半の遺物を、Ⅳ層は縄文時代晩期の遺物を包含する。但し、Ⅱ・Ⅲ層は一部攪乱されており、下層の包含遺物群が混入している。

### 2) 各 説

遺物包含層から出土した遺物を時代別・産地別に分類し、報告する。

### 縄文時代

2区から出土した縄文土器は殆どが細片である。加えて、粗製土器が大半を占めることから、個々の土器の時期決定が困難である。ここでは比較的まとまりがあり、土器の遺存率の高い、「土器集中区」を中心に報告する。土器集中区はⅣb層とⅣc層を境に2層のまとまりが見られる(図版8)ことから、上層・下層に分け報告する。出土した縄文晩期の土器は粗大な工字文が顕著にみられ、列点文が少量みられることなどから、大洞C2～A式段階に位置づけられよう。多くは胎土に石英を顕著に含む。器種は細片のため全容を捉えることが困難であるため、深鉢、浅鉢、壺に分類した。なお、鉢類で明確に器形を復元できなかったものについては深鉢に含めることとする。

国史跡地区では佐野Ⅱ式・下野式が縄文集落の下限[石川1987]である。本調査区では該期の土器の集中がみられたという点で一集落内の変遷、及び土地利用を考察するうえで貴重な資料となろう。

### 土器集中区下層 (28～47)

28～32、36は深鉢。28は口縁にLRの縄文を施し、その下位には横位に幅広の沈線を平行に引き、一部下位から上位に向かい抉りを入れ区画する。佐野Ⅱ式に比定される。34、35は壺。外面に平行沈線を持ち、赤彩されている。37、39は外面に条痕文を施す深鉢。37は小波状口縁を呈する。38、42～44は網目状燃糸文を施す。40、41、45、47は無文の深鉢。45にはケズリによる調整が、46にはミガキが施されている。

## 土器集中区上層（48～58）

48は肩部に逆「ノ」字状沈線と半単位ずらした粗大な眼鏡状隆帯をもつ深鉢。内面の口縁端部には連続刺突を、その下位に2状の沈線を持つ。49は網目状撚糸文をもつ深鉢の胴部片。50は口径が10cm前後になり、壺の可能性がある。外面に平行沈線が施される。51は深鉢。外面は無文となり、内面に沈線を1条巡らせる。52は口縁が外に開く深鉢。肩部に沈線を7条横位に施し、その一部は下から上への扶りにより区画される。長竹式前半に比定される。54、56、57は条痕文系深鉢。58は深鉢の底部と考えられるが、胎土が軟質で、風化が進んでいることから地文が確認できなかった。55はケズリ調整を行う深鉢の底部。

## 包含層（59～65）

59は中期。60～65は晩期。63は文様構成から上野原式に比定される。65は列点文を持つことから大洞C2式に併行すると考えられる。

## 古 代（66～76）

66～72は須恵器。66は有台坏で、9世紀前半。67は無台坏。68・69は坏蓋。69は宝珠つまみを有する。70・71は甕の胴部片。72は横瓶で、外面に縦位平行沈線を3条有し、肩部に自然釉がかかる。73・74は製塩土器。73は粘土の接合部に指押さえの痕が明瞭に残る。74は内面をハケメ調整する。75・76は土鍾。

## 中 世

## 白 磁（77～81）

77～80は黄白色を呈し、空隙が多くみられる粗雑な胎土を持つ一群。釉はやや白濁し、微細な貫入やピンホールが多くみられる。森田D類〔森田1982〕に属し、15世紀。81は内面に陽刻を有する端反の小坏。陽刻のモチーフは明確に確認できなかった。

## 青 磁（82～87）

82～84は連弁文碗。85は無文の端反碗。86は碗か鉢の底部。見込みを蛇ノ目状に釉剥ぎする。87は蓋置。そのほか、胴部に算木文を有する香炉片がある。

## 染 付（89～91）

89は蓮子碗、15世紀末～16世紀前半の所産である。90・91は皿、見込みに十字花文を描く。

## 瀬戸美濃（92～105）

92・93は古瀬戸後期様式IV期の平碗。94は灰釉丸碗。外面に連弁文を持つ。大窯1期の所産である。95～97は天目碗。97は大窯4期。98～101は緑釉小皿。99は口縁部を打ち欠き、灯明皿として使用。102は古瀬戸様式の蓋。下面を糸切り調整する。103～105は天目碗底部。縁辺を打ち欠き、平面形を円形あるいは菱形に成形する。

## 珠 洲（106～119）

106～108は甕。109～112は壺。113～119は播鉢<sup>3)</sup>。製作年代は、全体としては吉岡II期（13世紀前半）～VI期（1450～70年代）〔吉岡1994〕までみられるが、比較的耐用年数の短い播鉢は概ねIV期からVI期に収まり、本遺跡の存続年代を示していると考えられる。

3) 珠洲の製品は、胎土中に骨針を含む一群を指標とする。器種、年代観等は吉岡康暢氏の研究〔吉岡1994〕に依拠するが、吉岡氏が鉢に分類したもののうち、御目を有するものを「播鉢」、無いものを「捏鉢」とした。

## 1 土器・陶磁器

甕・壺に古手の一群が認められるが、耐用年数の差異と理解したい。

### 越 前 (120・121)

120は播鉢、16世紀後半の所産である。121は甕の胴部片外面に窯印がみられる。

### 土 師 皿 (122～134)

1区と同様に2類に分類する。

1類(122～126)：ロクロ成形で、底部を糸切り調整する。法量は大・中・小がある。

2類(128～134)：手づくね成形。法量は大・中・小がある。

122と123は製作技法が関東系(1類)であるものの、底部外底面の稜をヘラ削りにより面取りし、京都系の丸底風に仕上げるもので、京都系の大量流入直前の15世紀後半に位置づけられる〔品田1999〕。

### 瓦 器 (135・137・139)

135・139は風炉。肩部には花菱文(135)、あるいは雷文(137)を連続して押印し、下位に円形の火窓をもつ。137は浅鉢形を呈する火鉢。肩部に唐草文を連続して押印する。ともに、15世紀～16世紀の所産である。

### 羽 釜 (136)

136は最大径22.6cmを有する羽釜。内外面共に黒色を呈する。

### 産地不明陶器 (138)

138は壺又は甕類の頸部と推測される。素焼きで、比較的軟質である。

## 近 世

肥前系陶器と越中瀬戸は16世紀第4四半期に生産が始まるが、江戸時代を通じて存続することから、近世陶磁に含め報告する。

### 肥前系陶磁器 (140～165)

器種・年代観・産地は大橋康二氏の研究〔大橋 1993〕に従い述べる。大橋Ⅰ-1期(1580年代～1594年)に相当する藁灰を施す岸嶽系の製品は出土していない。続くⅠ-2期(1594年～1610年代)になると碗・皿などがみられるようになる。この時期の製品は焼成時に胎土目を用いており、製品の見込みや高台裏付近にその痕跡が認められる。140～147が該当する。140、141は碗である。内外面にオリーブ色を呈する灰釉を施す。いわゆる「青唐津」。外面胴部下半の釉際には釉垂れがみられる。釉薬はガラス質化し、細かな貫入が見られる。胴部下半、および高台部は露胎。高台は削り出され断面方形を呈す。高台内は兜巾状を呈する。141の胴部下半および高台内には黒漆状の付着物が認められる。142～147は皿である。143はひだ皿。口縁端部を指押し、輪花状につくる。145、146は見込みに鉄絵を施す、いわゆる「絵唐津」である。器形が類似するが接合しないことから、別個体であり、組物として使用されていたと考えられる。Ⅱ期(1610年代～1650年代)でも引き続き碗・皿類を中心に供給されている。この時期では胎土目から砂目にかわり、Ⅰ-2期同様、製品の見込みや高台裏付近にその痕跡が認められる。148～154が該当する。148～150は碗である。151～154は皿。154は溝縁皿。Ⅲ期(1650年代～1690年代)では京焼風唐津の碗(157、158)が出土している。Ⅳ期前半(17世紀末～18世紀前半)では内野山系の緑釉碗(159・161)・皿(160)、18世紀前半の木原系陶胎染付碗(164)が出土している。そのほか大橋Ⅲ～Ⅳ期の刷毛目碗(155)・鉢(156)、17世紀後半の播鉢(162、163)がみられる。肥前系磁器はⅢ・Ⅳ期前半に少量みられ、薄手で高台裏に「福」字をもつ染付皿(165)が

出土した。他に同規格の皿が1枚共伴しており、組物の可能性がある。図示していないが、IV期後半～V期にかけての波佐見窯くらわんか手を中心とした肥前系磁器が散見される。該期の全国的な流通量の激増を勘案するなら、本調査区での出土量は極めて少量であり、該期には積極的にこの地を利用しては考えにくい。

#### 越中瀬戸（166～183）

166・167は丸碗。168～175は皿。171は見込みに重ね焼きの痕跡と考えられる熔着物がみられる。173の見込みには軸止め段が設けられている。176～179は播鉢。180～182は陶鍾。指押さえの痕が明瞭であり、歪みが顕著である。赤褐色の錆釉を全面に掛ける。その他、図示していないが、1区の出土品（1・13・14）と類似する小壺が出土している。

#### 京・信楽系陶器（183～185）

183は平碗。高台内に墨書されるが判読不明（「□□」）である。184は碗の底部。高台内に墨書「六一」若しくは「立」を書き、その後、180度回転し「上」の異体字と、「又」若しくは「必」を書く。また、高台内側面には「十十」（三十）とある。185は小坏の底部。高台内に墨書されるが、判読不明。ともに、18世紀後半から19世紀前半の所産。本調査区からの出土遺物のうち、墨書を有するのはこの3点のみである。該期の製品の価値観や使い分けに差異が存在していた可能性を示唆する資料である。

#### 近世陶器（186・187）

186は関西系<sup>4)</sup>陶器の底部。輪状の貼り付け高台を持ち、全面に貫入が多い淡灰緑色の釉を施す。187は産地不明の小坏。

## 2 石器・石製品（224～247）

出土した石器・石製品は多くはなく、主要なものとしては剥片石器（224・234）・磨製石斧未成品（223）・打製石斧（225・226）・磨製石斧（227～232）・礫器（233）・筋砥石（235）・敲石（236）・スタンプ型石器（237）・磨石（238）・硯（239～241）・暖房具（242）・石鍋（243・244）・石臼（245）・砥石（246・247）がある。この他、触ると手に粉がつくというように風化が著しい流紋岩の剥片と石核が計6点出土している。なお、227～229・231・232・235・243・245・246は1区からの出土である。その他は2区からの出土である。

224はSK8からの出土したもの。不定形を呈し、刃部に摩滅が認められる。234は黒曜石製で、裏面の剥離面に若干の摩耗が認められる。223はSK7から出土している。225は分銅型、226は撥型を呈し、いずれも北陸地方の縄文時代晩期後半の特徴的な形態である。磨製石斧の石材はいずれも蛇紋岩製である。228は側面からの剥離が著しく認められ、刃部の付け替えの途中で廃棄されたものと考えられる。235は上面に作業面を持ち、左側面と下面に溝状の砥面が認められる。236は硬玉製で本地方特有の石材である。238は側面全周に擦痕が認められる。硯は粘板岩製で、石材の石核も出土していることから、産地と流通の関係が注目される。242は炬燵または手焙りの可能性が考えられるもの。石材は凝灰岩製で内外面が煤けている。243・244は滑石製。県内における既存の出土例は数点にとどまる。西日本との交易・流通を示す一材料となる資料である。246・247は四面とも使用している。

4) ここでいう「関西系」とは、関西に産地が求められる焼き物の他、関西に広く認められる製作技法を用いた他地域の窯の製品をも含めた広義の意。

## 3 木 製 品

### A 概 要

古砂丘及び独立丘からなる1区での出土はなく、低湿地からなる2区での出土のみである。出土層位は粘性が強く、保湿性の高い皿層からの出土が大半を占める。器種は漆器や箸などの什器、舟形木製品などの祭祀的特性が濃いもの、建築部材などがある。また、埋没林や倒木を除去する際の切断等によって生じた木端が調査区全体を通じ、大量に出土している。その多くは、両端が斜めに切り落とされ、断面が平行四辺形状を呈する板状の木端である。大きさは様々であり、規格性は認められない。

### B 各 説

#### 舟形木製品 (248・249)

248は左舷を破損。船底は平底。中央部に直径3mm程の円孔を有する。静岡県伊場遺跡では同様の円孔に棒片が遺存していることから、「細棒に差して立てられたもの」[斉藤 忠ほか1978]と指摘している。一方、巽淳一郎氏は「帆柱用」[巽1996]としている。2は小型の舟形。1と同様に平底となる。船尾は欠損。

#### 漆 器 (250・251)

250は椀。内外面の一部に黒漆が遺存する。さらに、内面には黒漆の上から赤漆を塗布している。251は胴部の傾斜度、底部の薄さなどから皿と判断した。畳付を除く内外面に黒漆を塗布。その後、内面には赤漆で草花文を描く。

#### 箸・箸状木製品 (252～255)

形態により3類に分類する。

A類 (252、253) : 周囲に面取りを施し、断面円形に近い形状を呈す。先端を尖らせる。

B類 (254) : 断面長方形で、薄い板状を呈す。先端を尖らせる。

C類 (255) : 断面正方形で、角材状を呈す。箸として機能したかは検討の余地がある。

A類とB類がほぼ同数みられ、C類は僅かであった。出土位置は自然流路周辺に集中し、箸の持つ祭祀的役割と祭祀空間の関連が注目される。

#### 底 板 (256・257)

ともに桶・樽の底板。256は側面に直径3mm程の隅丸正方形を呈す孔が2箇所に分れる。1つには断面正方形の木釘が遺存する。

#### 曲 物 側 板 (258)

扁平な細板の片面に刻線をいれる。現状は2片からなり、刻線の間隔が等しいことから、復元し、図化した。定規の可能性もあるが、刻線の間隔は1.2～1.6cmとばらつきがあり、平行にならないことから、その可能性は低く、曲物側板と判断するのが妥当であろう。

#### 刷 毛 (259)

板材から握りを細くし、幅広の柄元をつくり、割れ目をいれたもの。

#### 木 針 (260)

編み仕事に用いる針。丸棒の一端を尖らせ、上部中央には直径7mm程の円孔を有する。

### 荘厳具・調度品・建築部材 (261～269)

261は荘厳具。外面に意匠不明の文様を彫刻し、黒漆を塗布する。表面の一部に金箔が遺存している。飾り扉等の一部と考えられる。262は装飾品。菱形の平面形を呈する扁平な薄板で、中央やや上方に長軸6mm程の楕円形孔を有する。263は調度品の一部。図の下方は欠損。「L」字形を呈し、突出部に孔が貫通する。264は装飾品か。265は調度品の部材。図の下方は欠損。断面長方形の角材に長方形の孔を穿ち、他の部材と組み合わせて使用する。机等の支脚であろうか。266は柿板。屋根を葺くのに用いられる細長い扁平な板材。両側は欠損。267は垂木。屋根の部材の一部。この上に柿板(266)を葺く。図の上方に樹芯が2箇所あることから、分枝部分の芯持材を利用していると考えられる。268は内壁。図の左方は欠損。横位に断面三角形の突帯を連続して削り出す。右端には幅1.8cmほどの平坦面を設け、縦材と組み合わせる。側面には2箇所小孔が穿たれている。269は棧。図の左方は焼失する。右方は中央部に円孔を持つ、幅3cmほどの薄い面を設ける。縦材と組み合わせて使用すると考えられる。

### 鉤 (270)

Ⅱ層からの出土である。二股になった枝を利用し、一方にくびれ部を設け、一方の先端を尖らせる。

### 下 駄 (271)

Ⅱ層からの出土である。連齒下駄。上面形は長円を呈す。両齒は共に欠損。表面に擦痕が認められる。前壺は前齒の前方横緒孔は後齒の前方に位置する。小型であることから、小児用か。

### 木 簡 (272・273)

一号木簡(272)は、グリット一括遺物として取り上げ、遺物水洗中に墨痕を見出し木簡であることが判明したため詳細な出土状況は不明である。Ⅱ層共伴遺物として肥前系陶磁器片が見られ、この層は客土と思われるので、本木簡も近辺より流入し原位置を保っていない可能性がある。時期的にはⅡ層共伴の陶磁器から十八世紀後半以降と推定される。

### (釈文)

[ ] [白カ]

・× □□納七斗入 向山孫左衛門

・× □ ]

(280) × 41 × 4 059型式

木簡は上端部が折り取られ、さらに「七斗」の部分で屈折している。前者が無理に折ったと推測されるのに対して、後者の折線は直線的なので刃物によって折られた可能性がある。下端部は両側から切り込みが入り先端を尖らせている。他に中途まで縦に割れが入っており左右に二分できる状態である。文字は上端部付近にも数文字分の墨痕が確認できるが判読できない。「納七斗」から「孫」までは墨痕が明瞭に残っており肉眼でも判読可能である。「左衛門」以下になると再び墨痕は薄れ、赤外線カメラでようやく判読できる。裏面にも何カ所か点々と墨痕が認められるが判読は困難である。また、木簡の表面は何カ所か損傷を受けており、特に「孫」のヘンの部分はそのため墨痕がほとんど残っておらず、「源」の可能性も考えられる。しかし、近世農民名としては孫左衛門が多いことや青海町字向山(旧歌村)には現在でも「孫左衛門」の家号が残っているので「孫」と判読した。また、「向」についても字体からはこれが一般的であるが、明治期の資料では、本遺跡近くに「白山」姓が多いので、「白」の可能性もある。

二号木簡(273)の出土状況は、一号木簡と同様である。Ⅲa層からは肥前系陶磁器片の他に一号木簡

#### 4 金属製品

のⅡ層（木簡出土層）と比べ越中瀬戸や珠洲の破片も見られ、主に近世前期の遺物が相伴している。

（积文）

「ひうち」

154×21×10 021型式 封緘木簡状

木簡の上端は隅がやや丸まっているが調整された痕跡は明確でなく、下端も水平に切られたままである。木簡両側面も全く調整が加えられず、材を割り出したままの状態で使用されている。ただし文字の書かれている表面だけはきれいに調整が行われている。裏面は上端から30mmの部分の厚さ約4mmで切り取られ、それより下は何かを挟み込むように面と平行に割け目を入れている。表面の墨痕は比較的明瞭に残っており、「ひ」と「ち」は肉眼でも判読可能である。「ち」が長く伸ばされているのが特徴的だが「ち」の下にもう一文字を見ることはむづかしい。「う」も「ち」の横画部分まで筆が延びている。「ひうち」は近郊の火打山の可能性もあるが、『天和三年閏九月 越後国頸城郡寺地村御検地水帳』に見られる「火打町」と考えた方が適当と思われる。

#### 4 金属製品

##### 銭 貨（188～221）

寺地遺跡では北宋銭を中心に21種・総数67枚の銭貨が出土している。渡来銭が比較的多く、19種47枚が認められる。最古は北宋銭「咸平元寶」で最新は「寛永通寶」である。寛永通寶は19枚と最も多く出土している。なお、1区・2区と各遺構および遺構外出土の銭種と枚数は第1表に示したとおりである。

##### 鱧 口（222）

1区からの出土である。青銅製。片側しか遺存していないが、同型のものを二つ向かい合わせに張り合わせ、扁平円形になるものと考えられる。現況は顕著な歪みが認められるため、復元実測をおこなった。本製品は、縁を巡る圏線が3条と、銘帯の内圏線が3条みられる。後者は、中央の圏線が幅広となる。

##### そ の 他

図化していないが、1区のⅡ層から煙管・鉄蓋が、Ⅱb層から釘が出土した。また、2区のⅡ～Ⅲ層から、釘・煙管・鉄蓋等が出土した。

銭貨名	国・王朝	初鋳年	1 区				2 区			計	
			SK1	SK1	平坦部	裾野	自然流路	Ⅱ層	Ⅰ層		その他
咸平元寶	北宋	998								1	1
景德元寶	北宋	1004	2								2
祥符元寶	北宋	1009			2						3
祥符通寶	北宋	1009							1	2	2
天禧通寶	北宋	1017			1	1					2
天聖元寶	北宋	1023									1
皇宋通寶	北宋	1038			3			1	1		4
至和元寶	北宋	1054									1
嘉祐元寶	北宋	1056				1					1
嘉祐通寶	北宋	1056							1		1
熙寧元寶	北宋	1068	1		1	2		2	1		7
元豊元寶	北宋	1078	1		2			2	1		6
元祐通寶	北宋	1086	1		3				1		5
紹聖元寶	北宋	1094			1						1
聖宋元寶	北宋	1101			2			1			3
政和通寶	北宋	1111			1		1				2
嘉泰通寶	南宋	1201						1			1
開禧通寶	南宋	1205	1								1
永泰通寶	明	1408				1		1	1		3
寛永通寶（古寛永）	日本	1636		3	1	1		4			9
寛永通寶（文銭）	日本	1668			1			1		2	4
寛永通寶（新寛永）	日本	1697			1			2		2	5
寛永通寶（四文銭）	日本	1769				1					1
無文銭										1	1
計			6	3	19	7	1	15	8	8	67

第1表 種銭別数量集計

# 第VI章 自然科学分析

## 1 花粉分析

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

### A はじめに

寺地遺跡は西頸城郡青海町寺地に所在し田海川左岸に位置している。行われた発掘調査で江戸時代や室町時代、縄文時代の遺構や遺物が出土している。以下にはこの発掘調査の際採取された土壌試料について行った花粉分析の結果・考察を示し、それぞれの時代における遺跡周辺の古植生について検討した

### B 試料

試料は溝状遺構や土坑およびセクション断面より採取された71試料である(第2表)。各試料の土相はおおむね砂質の黒褐色粘土やシルトで、一部泥炭質となっている。なお図表においては通し番号を使用している。

### C 分析方法

花粉分析は上記71試料について以下のよう手順にしたがって行った。

試料(湿重約3~5g)を遠沈管にとり、10%の酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

番号	遺構またはセクションの種類	層位	位置	番号	遺構またはセクションの種類	層位	位置
1	SD4 E-W セクション	III	8C2	37	南北セクション3	II	12B
2	SD4 E-W セクション	IV	8C2	38	南北セクション3	III a	12B
3	SD4 E-W セクション	IV	8C2	39	南北セクション3	III b	12B
4	SD4 E-W セクション	3	8C2	40	南北セクション3	V	12B
5	SD4 E-W セクション	4	8C2	41	南北セクション4	II	14B
6	SD4 E-W セクション	5	8C2	42	南北セクション4	III a	14B
7	SK7	III	8B21	43	南北セクション4	III b	14B
8	SK7	II	8B21	44	南北セクション5	II	16C
9	SK7	IV	8B21	45	南北セクション5	III a	16C
10	SK9 E-W セクション	1	8B7	46	南北セクション5	I b	16B
11	SK9 E-W セクション	2	8B7	47	南北セクション5	II	16B
12	SK9 E-W セクション	2-2	8B7	48	南北セクション5	III a	16B
13	SK9 E-W セクション	3	8B7	49	南北セクション5	III b	16B
14	SK9 E-W セクション	4	8B7	50	メインセクション SPB-SPB'	II	9B
15	SK9 E-W セクション	7	8B7	51	メインセクション SPB-SPB'	III a	9B
16	SK9 E-W セクション	7	8B7	52	メインセクション SPB-SPB'	III b	9B
17	SK9 N-S セクション	1	8B7	53	メインセクション SPB-SPB'	V	9B
18	SK9 N-S セクション	2	8B7	54	メインセクション SPC-SPC'	II	11B
19	SK9 N-S セクション	3	8B7	55	メインセクション SPC-SPC'	III a	11B
20	SK9 N-S セクション	4	8B7	56	メインセクション SPC-SPC'	III b	11B
21	SK9 N-S セクション	6	8B7	57	メインセクション SPC-SPC'	IV	11B
22	SD5 E-W (N) セクション	1	8C4	58	メインセクション SPD-SPD'	II	12B
23	SD5 E-W (N) セクション	2	8C4	59	メインセクション SPD-SPD'	III a	12B
24	SD5 E-W (N) セクション	3	8C4	60	メインセクション SPD-SPD'	III b	12B
25	SD5 E-W (N) セクション	4	8C4	61	メインセクション SPD-SPD'	IV	12B
26	SD5 E-W (N) セクション	4	8C4	62	メインセクション SPE-SPE'	II	13B
27	SD5 E-W (N) セクション	5	8C4	63	メインセクション SPE-SPE'	III a	13B
28	SK8 N-S セクション (西壁)	IV	8C12	64	メインセクション SPF-SPF'	III b	13B
29	SK8 N-S セクション (西壁)	1	8C12	65	メインセクション SPF-SPF'	II	15B
30	南北セクション1	I b	8B	66	メインセクション SPG-SPG'	III b	15B
31	南北セクション1	IV	8B	67	メインセクション SPG-SPG'	II	16B
33	南北セクション2	II	10C	68	メインセクション SPG-SPG'	III a	16B
34	南北セクション2	V	10C	69	メインセクション SPG-SPG'	IV	16B
35	南北セクション3	V	12C	70	メインセクション SPG-SPG'	III b	16B
36	南北セクション3	III a	12C	71	メインセクション SPG-SPG'	IV	16B

第2表 花粉化石採取試料

### D 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉56、草本花粉47、形態分類を含めたシダ植物胞子4、藻類2の総計109である。これら花粉・胞子の一覧を第3-1~3表に、また主要な花粉・胞子の分布を第8-



## 1 寺地遺跡の花粉化石

1～17図に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物は全花粉孢子総数を基数として百分率で示してある。また、図および表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して示している。

SD4 スギの圧倒的な多産で特徴づけられ、試料1でハンノキ属がやや多く得られており、コナラ属アカガシ亜属やトチノキ属などが5%前後の出現率を示している。

SK7 本地点もスギの多産で特徴づけられ、他にマツ属複雑管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）、ハンノキ属、ブナ、コナラ属コナラ亜属などが10%を示している。また草本類のイネ科が試料7,8で多産しており、水生植物のオモダカ属やミズアオイ属もこの2試料から得られ、ソバ属も検出されている。

SK9 東西および南北セクションともスギの多産で特徴づけられ、一部ハンノキ属が10%近い出現率を示し、その他アカガシ亜属やトチノキ属などが5%前後得られている。

SD5 やはりスギの多産で特徴づけられるが、試料22では半減しており、代わってニヨウマツ類やハンノキ属、コナラ亜属などがやや多く、草本類のイネ科が多産している。

SK9 やはりスギの圧倒的な多産で特徴づけられ、試料29では80%近くに達している。

南北セクション1 スギの多産で特徴づけられるが、試料30ではニヨウマツ類も出現率が30%を越えている。草本類ではイネ科が多産しており、ソバ属や水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属なども検出されている。

南北セクション2 やはりスギの多産で特徴づけられ、その他ではニヨウマツ類やハンノキ属、コナラ亜属などが5～10%を示している。また草本類のイネ科も多産しており、やはりソバ属や水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属なども検出されている。

南北セクション3 やはりスギが多産しているが試料37ではやや少なく、同試料においてニヨウマツ類が突出した出現を示している。また同試料ではイネ科も多産している。

南北セクション4 スギの多産で特徴づけられ、ハンノキ属、ブナ、コナラ亜属などが5%前後を示している。草本類では試料41において50%近くに達しており、同試料からはソバ属や水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属なども検出されている。

南北セクション5 スギの多産で特徴づけられる。産出傾向は南北セクション3と非常によく似ている。また試料49では単条型孢子が高い出現率を示している。

メインセクションB-B' スギの多産で特徴づけられるが、試料番号の若い方に向かい減少しており、反対にニヨウマツ類が増加している。

メインセクションC-C' 検鏡の結果、スギの多産で特徴づけられるが、やはり試料番号の若い方に向かい減少しており、反対にニヨウマツ類が増加している。またイネ科も増加している。

メインセクションD-D' メインセクションC-C'と非常によく似た出現傾向を示しており、スギの他、ハンノキ属は減少する方向を示し、ニヨウマツ類はやや増加している。

メインセクションE-E'：本地点もメインセクションC-C'と非常によく似た産出傾向が認められる。

メインセクションF-F'：スギの多産で特徴づけられるが、試料66ではニヨウマツ類がやや多く検出されている。

メインセクションG-G' やはりスギの多産で特徴づけられるが、試料67ではニヨウマツ類が突出し

た出現を示している。草本類のイネ科は試料67,68,70で多産しており、同試料より水生植物のミズアオイも検出されている。

### E 遺跡周辺の古植生

縄文時代晩期 (1～29、31、57、61?、71?)

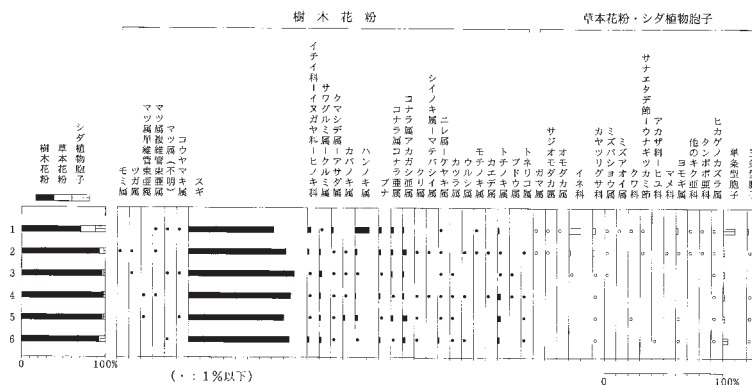
スギの圧倒的多産で特徴づけられ、遺跡周辺はスギ林が成立していた。またその林縁部にはコナラ亜属やトチノキ属などの落葉広葉樹類やアカガシ亜属などの常緑広葉樹類が一部に生育していた。

室町時代 (36、38、39、42～45、48、49、51、52、55、56、59?、60?、63、64、66、68、70)

依然としてスギが多く、遺跡周辺ではスギ林が広く成立していた。試料38,39,51,52などではハンノキ属がやや多くなっており、この時期スギ林の林縁部などでやや目立つ存在となったとみられる。またニヨウマツ類にも同様の傾向がみられ、コナラ亜属とともに二次林が一部に見られるようになったと推測される。同試料においてはイネ科も多産しており、水生植物のオモダカ属やミズアオイ属 (いずれも抽水植物) なども検出されている。このオモダカ属やミズアオイ属は水田雑草を含む分類群であり、遺跡周辺において水田稲作が営まれていた可能性がうかがわれる。

江戸時代 (37、44、47、50、54、58?、62、65、67)

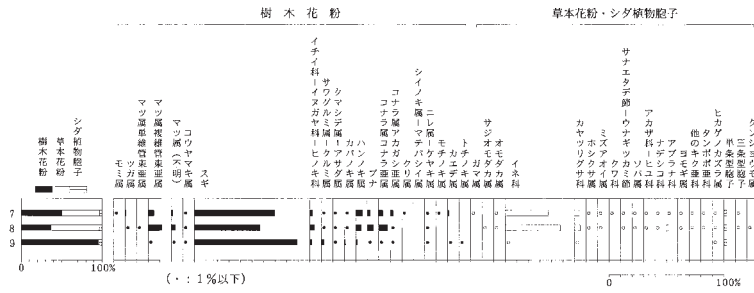
試料50,54,67などではニヨウマツ類が多産しており、遺跡周辺ではスギ林とともにニヨウマツ類の二次林もこの時期になってかなり目立つ存在となった。またコナラ亜属も二次林として普通にみられるようになった。上記試料においてはイネ科も多く、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属も検出されており、室町時代より引き続き遺跡周辺低地部では水田稲作が行われていた可能性が考えられる。またこれらの試料からはソバ属も得られており、ソバの栽培も行われていたのではないと思われる。なお、縄文時代晩期と考えられている試料7,8,22などからイネ科が多く検出されており、上記のオモダカ属やミズアオイ属に加えソバ属も検出されており、上記から考えるとこれらの栽培も予想される。しかしながらニヨウマツ類をみると他の縄文時代晩期試料に比べかなり多く得られている。よって寺地遺跡における稲作の開始時期にも関わることであり、これらの時代についてはいろいろな方面からの検討が必要ではないかと思われる。



第8-1図 SD4E-Wセクションの主要花粉化石分布図

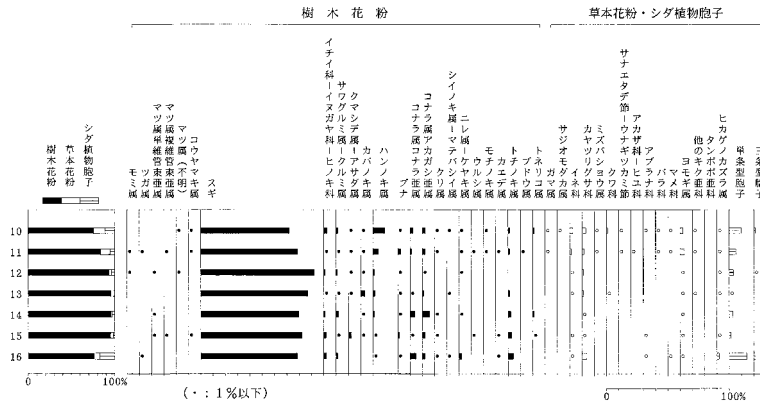
〔樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。〕

1 寺地遺跡の花粉化石



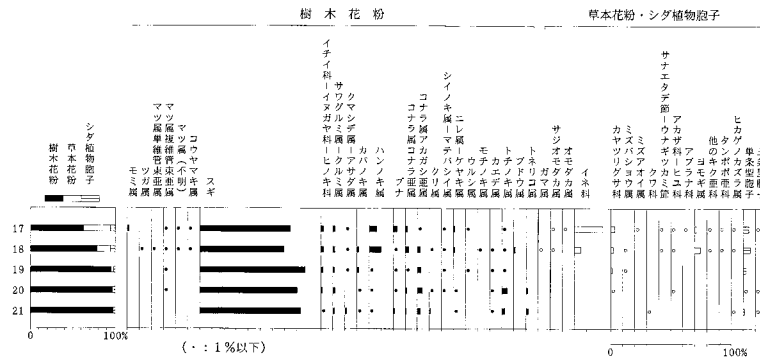
第8-2図 SK7セクションの主要花粉化石分布図

〔樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。〕



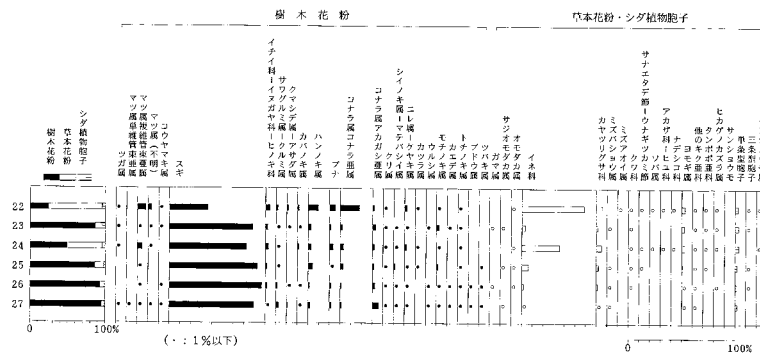
第8-3図 SK9E-Wセクションの主要花粉化石分布図

〔樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。〕



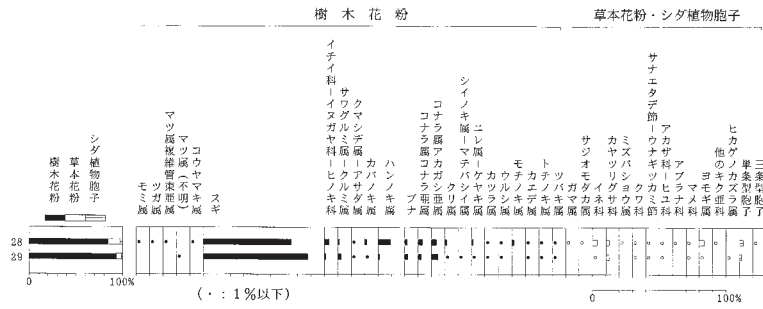
第8-4図 SK9N-Sセクションの主要花粉化石分布図

〔樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。〕



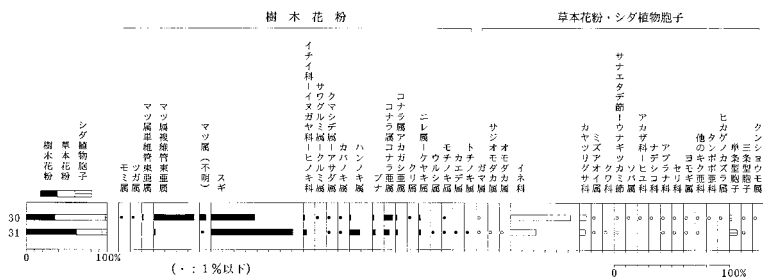
第8-5図 SD5E-Wセクションの主要花粉化石分布図

〔樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。〕



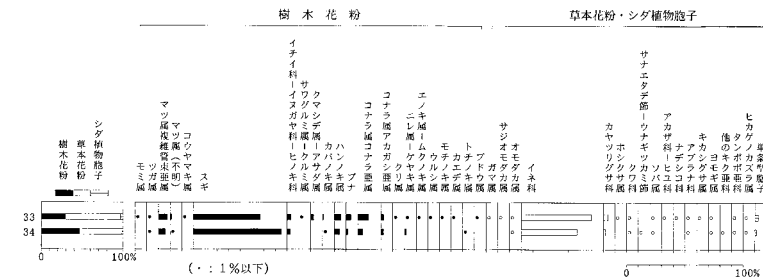
第8-6図 SK8N-Sセクションの主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。)



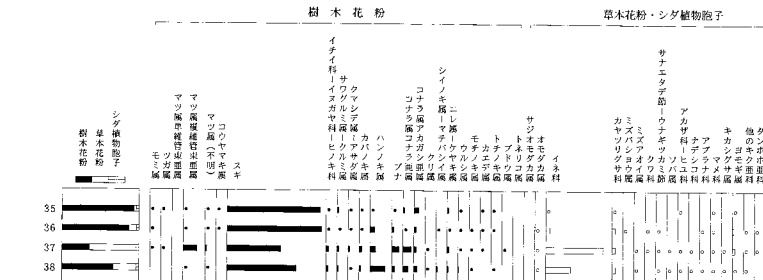
第8-7図 南北セクション1の主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。)



第8-8図 南北セクション2の主要花粉化石分布図

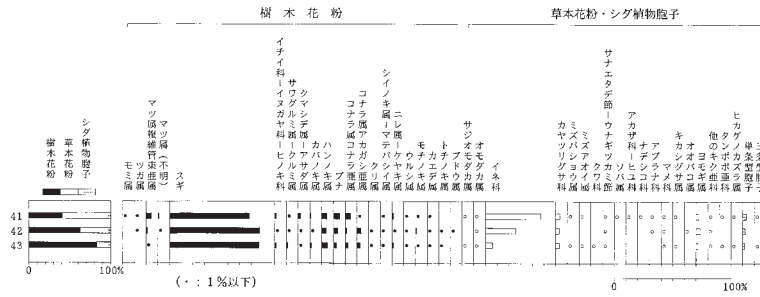
(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。)



第8-9図 南北セクション3の主要花粉化石分布図

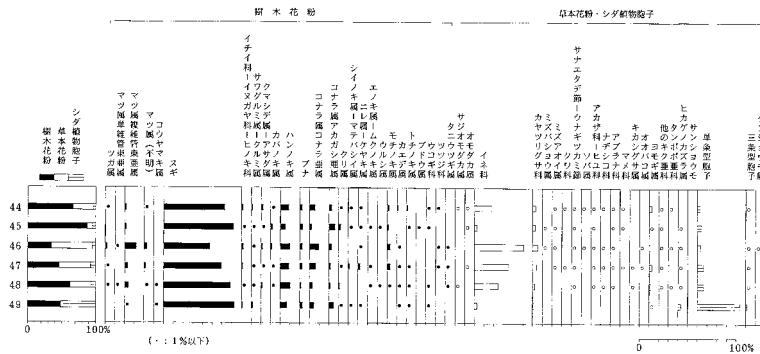
(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。)

1 寺地遺跡の花粉化石



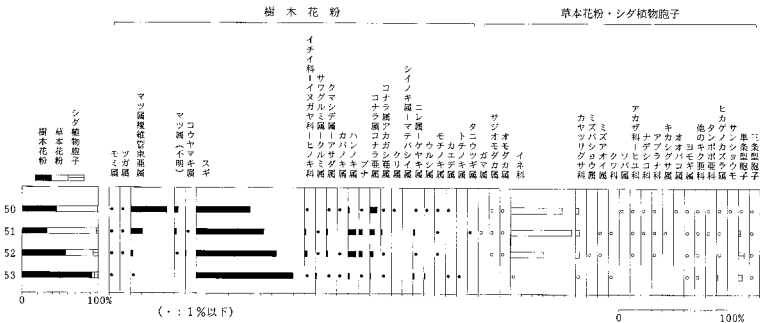
第8-10図 南北セクション4の主要花粉化石分布図

〔樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。〕



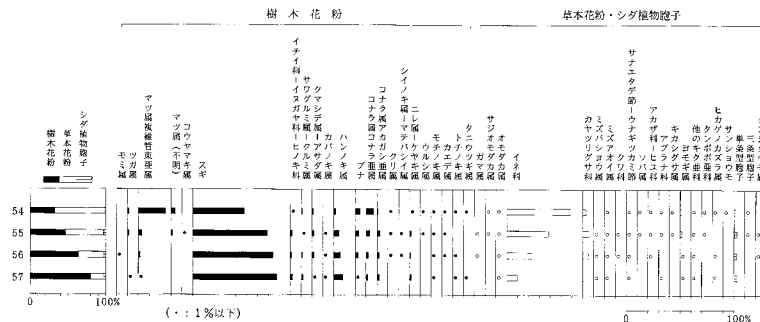
第8-11図 南北セクション5の主要花粉化石分布図

〔樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。〕



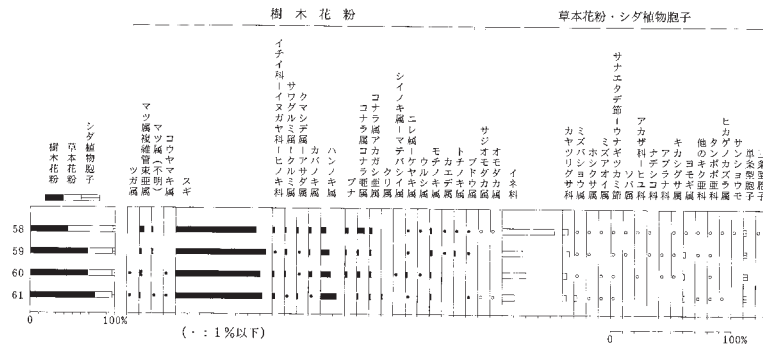
第8-12図 メインセクション (SPB-SPB') の主要花粉化石分布図

〔樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。〕

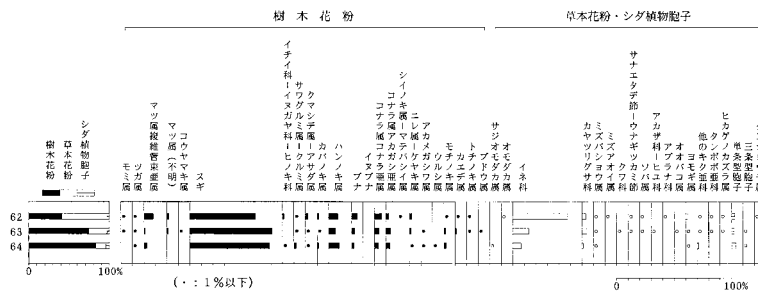


第8-13図 メインセクション (SPC-SPC') の主要花粉化石分布図

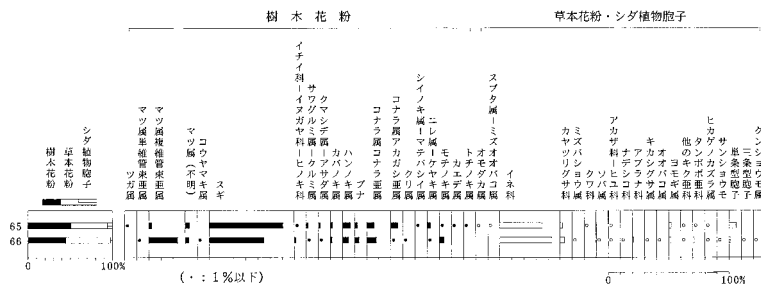
〔樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。〕



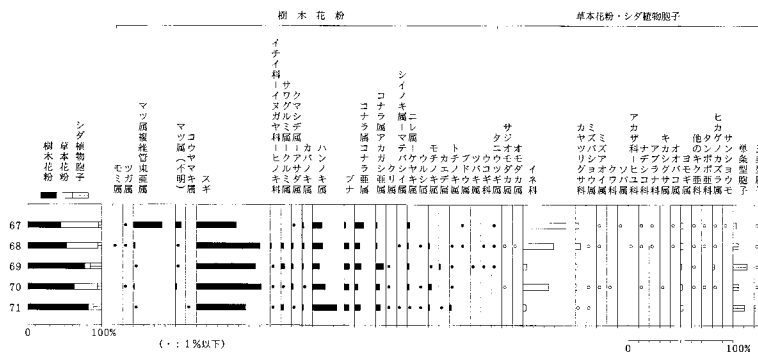
第8-14図 メインセクション (SPD-SPD') の主要花粉化石分布図  
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。)



第8-15図 メインセクション (SPE-SPE') の主要花粉化石分布図  
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。)



第8-16図 メインセクション (SPF-SPF') の主要花粉化石分布図  
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。)



第8-17図 メインセクション (SPG-SPG') の主要花粉化石分布図  
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。)









## 2 木製品および埋没林の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

### A はじめに

当遺跡は青海町に所在し、田海川左岸の独立丘陵と平坦地に広がる。今回の発掘では、丘陵地からは室町時代を中心とする遺物が多く検出された。また平坦地からは縄文晩期の土器集中区と、全面に広がる埋没林が出土した。この埋没林の生育時期は遺物を伴っていないため不明であり、放射性炭素年代測定が実施されている(別報参照)。埋没林は根・幹などに切断痕や半割痕があり、室町時代以降の開墾に際し付けられたと推定されている。ここでは、埋没林75点と主に室町時代以降の木製品26点の樹種同定結果を報告する。

### B 方法

木製品の材組織標本は、片刃の剃刀を用いて材の横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柾目)の3方向を薄く剥ぎ取りスライドガラスの上に並べ、ガムクロラールで封入し永久プレパラートを作成した。光学顕微鏡を用いてこれらの材組織を観察し同定を行った。

埋没林は、木理の通直な部位や年輪幅が広い部位を選び、滑走マイクロトームで3方向の薄片を作成した。また針葉樹材は、あて材、年輪幅の狭い材、若齢材などは同定が難しいので、中心部の髄が残っている試料については、髄の特徴も参考にした。

### C 結果

木製品の同定結果は第4表に、埋没林の結果は第5表に示した。

#### 木製品樹種

室町時代の木製品樹種は、舟形木製品2点はネズコとイヌガヤ、漆器椀2点はブナ属、垂木1点はイヌガヤ、鈎1点はアカマツ、木簡1点はモミ属で、そのほかの製品(箸・底板・建築関係など)にはスギやヒノキ科(ヒノキ属・サワラ)が多く特にスギの利用が目立った。江戸時代の2点はヒノキ属で、下駄がヒノキ、木簡がサワラであった。

#### 埋没林樹種

埋没林75点の樹種は、針葉樹のスギ47点・スギまたはヒノキ属2点・ヒノキ11点・ヒノキ属8点・サワラ1点・ヒノキ科1点・イヌガヤ1点、広葉樹のヤナギ属1点・クスノキ科2点・トネリコ属1点であった。スギが圧倒的に多い。

また、スギまたはヒノキ属である可能性も考えられ、明瞭な識別が出来なかった試料もあった。スギでも根・根張り・節部などでは、早材部でもヒノキ型やヒノキ型に近い分野壁孔がしばしば見られる。従って、ヒノキ属と同定した中にも、実際はスギである試料も含まれている可能性は否定できない。そしてNo. 40・42・48・55・71・73は、材組織からはヒノキ属に同定されるものであったが、髄が(図版25a・6a参照)保存され観察できたことから、ヒノキ科の髄とは明らかに異なりスギである事が判った。スギとヒノキ・ヒノキ属を比べて、特に出土区や出土層に偏りは見られなかった。従って、スギの優占する森林の中に、ヒノキ・ヒノキ属なども混在していたと考えられる。その他にも、針葉樹のイヌガヤ、落

## 2 木製品および埋没林の樹種同定

葉樹のヤナギ属・クスノキ科・トネリコ属も生育していたことが判った。

以下に同定根拠とした材組織の観察結果を、分類配列順に記載する

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.koch イヌガヤ科 図版 11a-1c (埋没林通し番号 66)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。仮道管にらせん肥厚があり、分野壁孔は小型のトウヒ型やヒノキ型、1分野に1~2個ある。

モミ属 *Abies* マツ科 図版 12a-2c (木製品樹種No. 25)

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。放射柔細胞の接線壁に数珠状肥厚があり、分野壁孔は小型のスギ型やヒノキ型、1分野に1~4個が雑然と配置している。放射組織の細胞高は比較的高い。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図版 13a-3c (木製品樹種No. 23)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端に放射仮道管がありその内壁は先の鋭く尖った鋸歯状肥厚が顕著である。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 図版 24a-4c (木製品樹種No. 5) 5a (埋没林通し番号 40) 6a-6b (埋没林通し番号 55) 7a-7c (埋没林通し番号 31)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は多くその仮道管壁は極めて厚い。分野壁孔はスギ型、1分野に2~3個が水平に配置する。細い枝材はヒノキやヒノキ科の材と類似性が高く識別が難しいが、中心部の髄が観察出来れば明瞭に区別できる。スギの髄は、円形で細胞の大きさは不均一で内容物を含むものと含まないものが混在している。ヒノキ科の髄は小さく、十字やY字やY字を2個繋げたような形で、細胞壁が厚く褐色の内容物を含む小さな細胞から構成されている。

根や根張りの材は、晩材部の量は少なく、樹脂細胞の分布が多いものがあり、分野壁孔は大きくて2~6個あり、放射組織は2細胞幅になるものがあり、仮道管や放射柔細胞はやや大きい。

ネズコ *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科 図版 3 8a-8c (木製品樹種No. 1)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔はやや小型のスギ型でヒノキ型も少し見られ、1分野に2~3個ある。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. 図版 39a-9c (木製品樹種No. 14)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔はヒノキ型、1分野に主に2個が水平に整然と配列する。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 図版 411a-11c (木製品樹種No. 12)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は急で、晩材部の仮道管壁は厚い。分野壁孔はヒノキ型であるが開孔は広く、1分野に主に2個が水平に整然と配列する。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版 310a-10c (埋没林通し番号 27) 図版 517 (埋没林通し番号 45) 18 (埋没林通し番号 75)

ヒノキまたはサワラであるが、分野壁孔が充分観察できないものや、典型的なヒノキ型と孔口が広く開いたヒノキ型の両方が同率にあり識別できないものである。大部分がヒノキ型であるが、一部でスギ型が観察された試料もある。根や根張りの材は、分野壁孔が大きく、放射柔細胞は2細胞幅になるものがある。

ヒノキ科 *Cupressaceae*

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなるり、樹脂道や仮道管のらせん肥厚は無い。分野壁孔は1分野に2~4個、壁孔の外形は丸い。細胞壁が不朽しており分類群を絞ることができなかった試料である。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科図版412a-12c (埋没林通し番号43)

小型の管孔が単独または2個が複合し晩材部に向いゆるやかに径を減じる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は単列異性、道管との壁孔は大きく交互状に密在にする。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版413a-13c (木製品樹種No.4)

小型の管孔が密在し、年輪界では極めて小型となる散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は階段数10~20本の階段穿孔と単穿孔がある。放射組織は異性、細胞幅が広く背の高い広放射組織があり、道管との壁孔は大きなレンズ状である。

クスノキ科 Lauraceae 図版514a-14c (埋没林通し番号47)

やや小型の管孔が単独または2個が放射方向に複合しやや疎らに分布する散孔材。道管の穿孔は、単一と階段数の少ない階段穿孔がある。放射組織は異性、2細胞幅、上下端に大きな方形細胞や直立細胞があり、道管との壁孔は交互状・階段状で孔口が大きく開いている。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版515a-15c (埋没林通し番号22)

大型で厚壁の管孔が2~3層配列し、その後は単独または2個が放射方向に複合した小型の管孔が分布する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、1~3細胞幅、道管との壁孔は交互状に密在する。

タケ亜科 Gramineae subfam. Bambusoideae イネ科 図版516a (木製品樹種No.9の木釘)

維管束は不整中心柱で、原生木部とその左右に後生木部の2個の管孔そして篩部があり、全体としては4~3個の穴の集合に見える。維管束の周りは厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘が非常によく発達している。

## D ま と め

木製品は、北陸一帯の特徴とされるスギの使用が当遺跡においても多い傾向が見られた。しかし、荘厳具(木製品樹種No.14)、舟形木製品(木製品樹種No.1・No.2)、柿板(木製品樹種No.19)、木筒(木製品樹種No.25・No.26)、刷毛(木製品樹種No.12)などは、スギ以外の樹種であった。外観の滑らかさを必要とする製品や、丸みを付ける加工を施す製品には、早材と晩材で硬さが異なるスギ材はあまり使われていない。全体的には、やはりスギが多いが、ヒノキ科(ネズコ・ヒノキ・サワラ)、イヌガヤ、アカマツ、モミ属といった複数の針葉樹材が使われていた。

埋没林は、スギが優占する中にヒノキ・ヒノキ属も混在しイヌガヤも検出され、そのほかにヤナギ属・クスノキ科・トネリコ属の広葉樹も含む、スギ林であった事が判った。埋没林の放射性炭素年代測定値は、古いものでは縄文時代晩期を示し、弥生時代後半~古墳時代中頃のものが多く、最も新しいものは奈良時代末~平安時代始め頃の値が示された。年代測定用試料は、材の外側より出来るだけ少ない年輪数を取り使用しているので、測定試料の木はその年代値より以前から生育していたと考えられる。従って、森林も盛衰はあったかもしれないが、遅くとも縄文時代晩期に生育していた樹木があり、弥生時代後半~古墳時代中頃には低地内に広く分布した可能性が考えられる。日本海側では縄文時代中期以降にスギ林が低地林として発達した時期があった事が、埋没林調査から知られている。例えば、富山県の魚津[藤井1965]、福井県の三方町[三方町教育委員会1991、植田・辻1995]や敦賀市[植田・辻1994]などである。これらの埋没林の放射性炭素年代値は、やはり縄文時代中期~後期や、弥生時代中期頃に集中している。低地林の成立と埋没林となった過程は、縄文時代後期・晩期から弥生時代にかけて起こった寒冷化による海退で低地に森林が成立し、その後の海進で埋没林となったと考えられている[藤井1965、藤1987]。当

2 木製品および埋没林の樹種同定

遺跡の埋没林も、日本海沿岸地に点在するスギ埋没林と同時性があることが確認された。この事は、これらのスギ林成立に関する要因や時期とその後の埋没化について、今後より詳細に究明するための、貴重な試料となると思われる。

木製品 樹種No.	出土位置	層位	分類	木取り	樹種	時期	備考
1	15C18	Ⅲ b	舟形木製品	板目	ネズコ	室町時代	底径6.8cm
2	15B13	Ⅲ	舟形木製品	割材1/2	イヌガヤ	室町時代	底径7.1cm、内面:黒漆に赤漆で施文
3	14B13	Ⅲ b	漆器 椀	横木取り	ブナ属	室町時代	
4	11B4	Ⅲ	漆器 椀	横木取り	ブナ属	室町時代	
5	15B11	Ⅲ	箸	板目	スギ	室町時代	
6	14C13	Ⅲ	箸	板目	スギ	室町時代	
7	SX251	1	箸	板目	ヒノキ属	室町時代	
8	14C13	Ⅲ	箸状木製品	板目	スギ	室町時代	板の破損か
9	13C17	Ⅲ	底板	板目	スギ	室町時代	直径23.8cm、側面に木釘
底板の木釘					タケ亜科	室町時代	
10	12B11	Ⅲ b	底板	板目	ヒノキ科	室町時代	直径5.6cm
11	9C20	Ⅲ	定規	板目	スギ	室町時代	
12	13C13	Ⅲ	刷毛	板目	サワラ	室町時代	
13	9C20	Ⅲ	浮子	芯持材	スギ	室町時代	直径7mmの円孔
14	13C8	Ⅲ b	荘厳具	板目	ヒノキ	室町時代	黒漆+金箔
15	15C16	Ⅲ b	装飾品	板目	スギ	室町時代	菱形
16	18B9	Ⅲ	部材	板目	スギ	室町時代	
17	14B8	Ⅲ b	装飾品	板目	スギ	室町時代	孔2箇所
18	17C22	Ⅲ?	部材(支脚か)	板目	スギ	室町時代	
19	16C11	Ⅲ b	柿板	板目	ヒノキ属	室町時代	両側欠損
20	15C14	Ⅲ b	垂木	板目	イヌガヤ	室町時代	下方欠損
21	15B14	Ⅲ b	内壁	板目	スギ	室町時代	
22	15B14	Ⅲ b	棧	板目	スギ	室町時代	一部焼失
23	18C20	Ⅲ	鈎	芯持材	アカマツ	室町時代	
24	12C8	Ⅱ	下駄	板目	ヒノキ	江戸時代	連歯下駄
25	14C9	Ⅲ a	木筒	板目	モミ属	室町時代	「ひうち」
26	13B21	Ⅱ	木筒	板目	サワラ	江戸時代	「□□納七斗入向山孫左衛門」

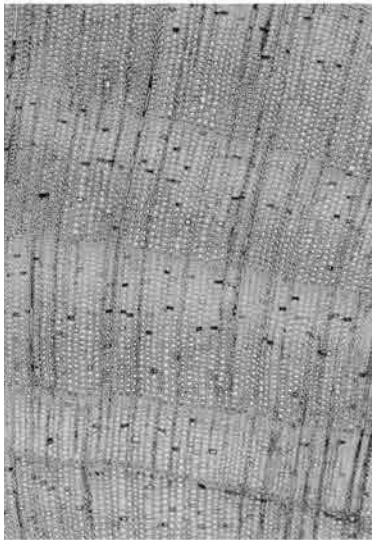
第4表 寺地遺跡出土木製品の樹種同定結果

埋没林 通し番号	グリット	樹種	備考
1	8B	スギ	
2	8C	スギ	節部
3	8C	ヒノキ	
4	8C	ヒノキ属	節部
5	8C	ヒノキ属	根張り?
6	8C	スギorヒノキ属	根?
7	9B	スギ	
8	9C	スギ	根張り?
9	10B	スギ	
10	10C	スギ	
11	10C	スギ	根張り?
12	11C	スギ	
13	11C	スギ	
14	12B	スギ	
15	12C	スギ	
16	12C	スギ	
17	12C	スギ	
18	13B	スギ	
19	13C	スギ	
20	13C	スギ	
21	14B	スギ	
22	14C	トネリコ属	
23	14C	スギ	
24	14C	スギ	
25	14C	スギ	
26	14C	スギ	φ16cm
27	15B	ヒノキ属	根張り
28	15C	スギ	φ8cm
29	15C	スギ	φ8cm
30	15C	スギ	
31	15C	スギ	根?
32	16B	ヒノキ	根?
33	16C	スギ	
34	18C	スギ	根

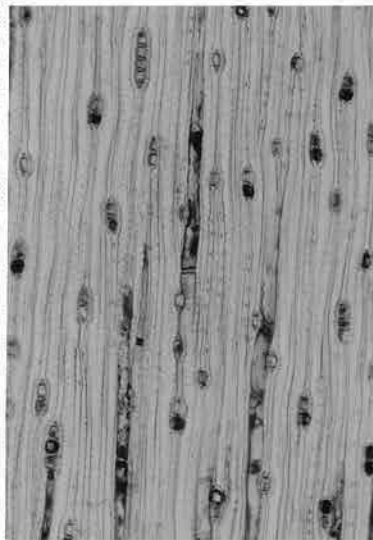
埋没林 通し番号	グリット	層位	遺構	樹種	備考
35	8C	1層	SD160	スギ	
36	8C	1層	SD160	ヒノキ属	根?
37	8C	2層	SD160	ヒノキ属	根?
38	8C	2層	SD160	ヒノキ属	根?
39	8C	3層	SD160	ヒノキ	アテ材
40	8C	4層	SD160	スギ	髓ありφ1.2cm
41	8C	4層	SD160	ヒノキ	
42	8C	4層	SD160	スギ	髓ありφ1.2cm
43	8B	地山	SK161	ヤナギ属	
44	8B	2層	SK161	スギorヒノキ属	
45	8B	2層	SK161	ヒノキ属	
46	8B	4層	SK161	クスノキ科	
47	8B	4層	SK161	クスノキ科	
48	8B	4層	SK165	スギ	髓ありφ2cm
49	8B	1層	SK165	ヒノキ属	根?
50	8B	2層	SK165	スギ	根
51	8B	2層	SK165	スギ	
52	8B	3層	SK165	ヒノキ	アテ材
53	8B	4層	SK165	ヒノキ属	根?
54	8B	5層	SK165	スギ	
55	8B	5層	SK165	スギ	髓ありφ1.5cm
56	8B	1層	SK165	スギ	
57	8C	1層	SD173	スギ	
58	8C	1層	SD173	スギ	
59	8B	2層	SD173	スギ	
60	8C	2層	SD173	スギ	根
61	8C	3層	SK173	スギ	根
62	8C	4層	SD173	ヒノキ科	
63	8C	4層	SD173	スギ	根
64	8C	5層	SD173	ヒノキ属	根φ2cm
65	8C	5層	SD173	ヒノキ	アテ材
66	14C	1層	SX251	イヌガヤ	
67	14C	1層	SX251	スギ	
68	14B	2層	SX251	スギ	
69	8C	1層	SK407	スギ	根
70	8C	2層	SK407	ヒノキ属	
71	8C	2層	SK407	スギ	髓ありφ4.5cm
72	8C	3層	SK407	ヒノキ	アテ材φ3cm
73	8C	3層	SK407	スギ	髓ありφ3cm
74	8C	4層	SK407	サワラ	
75	8C	4層	SK407	ヒノキ属	

第5表 寺地遺跡出土埋没林の樹種同定結果

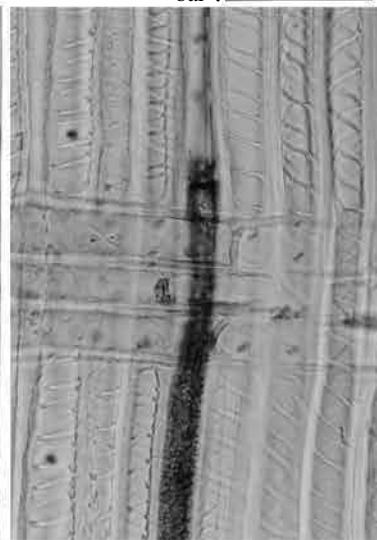
bar : 



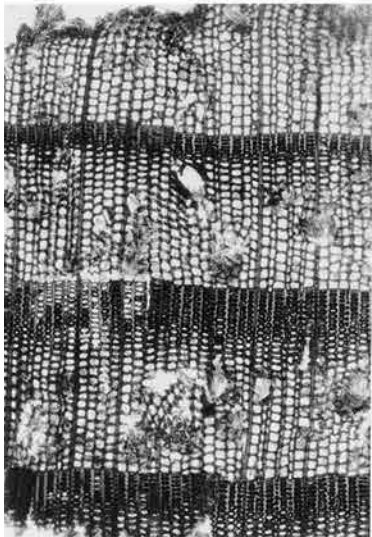
1a イヌガヤ(横断面)  
埋没林通し番号66 bar:0.5mm



1b イヌガヤ(接線断面)  
埋没林通し番号66 bar:0.2mm



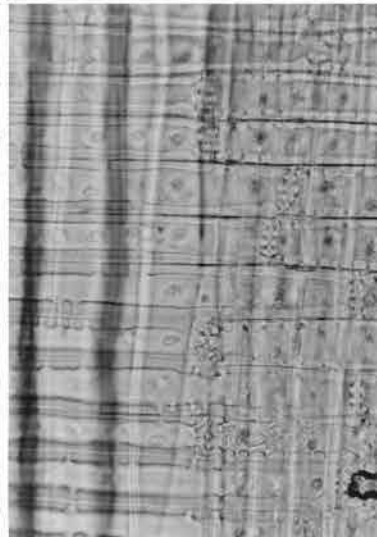
1c イヌガヤ(放射断面)  
埋没林通し番号66 bar:0.05mm



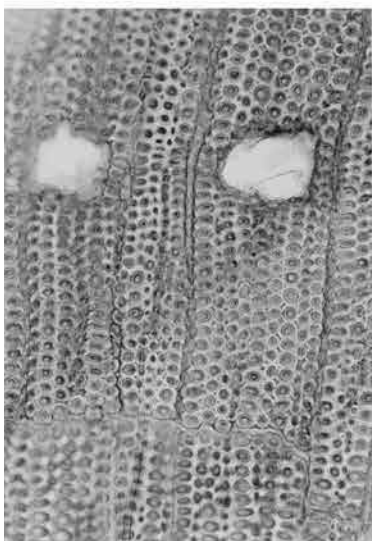
2a モミ属(横断面)  
木製品樹種No.25 bar:0.5mm



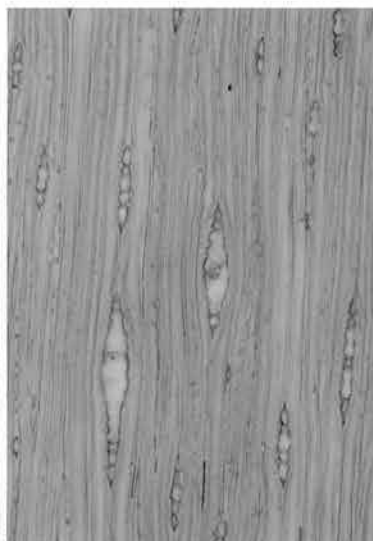
2b モミ属(接線断面)  
木製品樹種No.25 bar:0.2mm



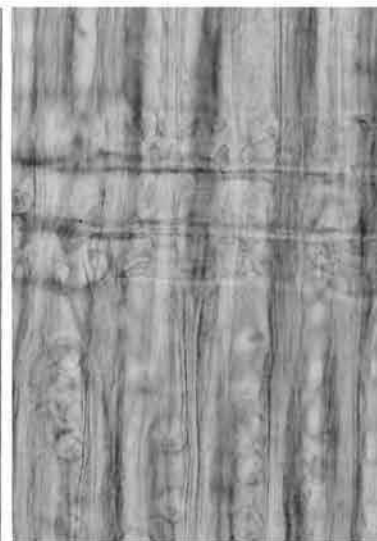
2c モミ属(放射断面)  
木製品樹種No.25 bar:0.05mm



3a アカマツ(横断面)  
木製品樹種No.23 bar:0.2mm



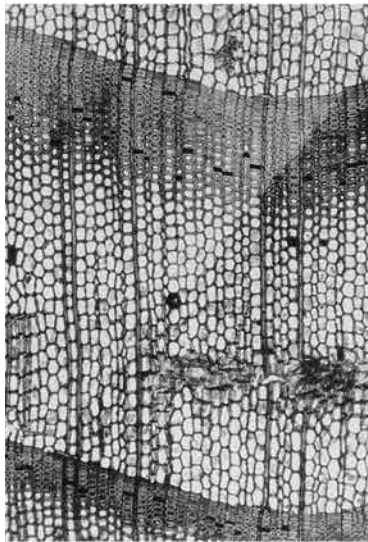
3b アカマツ(接線断面)  
木製品樹種No.23 bar:0.2mm



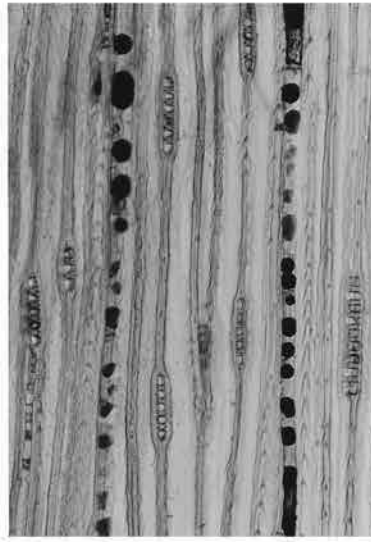
3c アカマツ(放射断面)  
木製品樹種No.23 bar:0.05mm

第9図 寺地遺跡出土木製品・埋没林樹種(1)

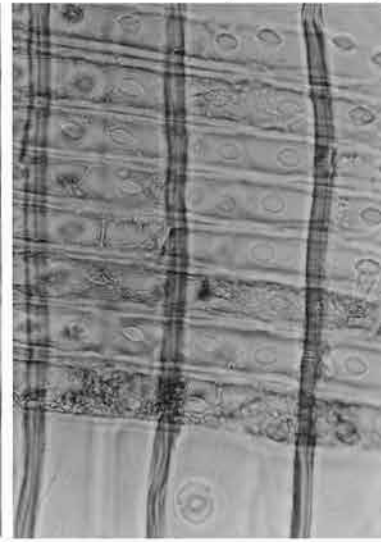
bar : 



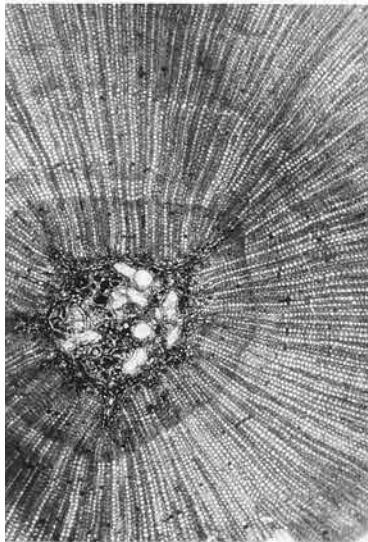
4a スギ(横断面)  
木製品樹種No.5 bar:0.5mm



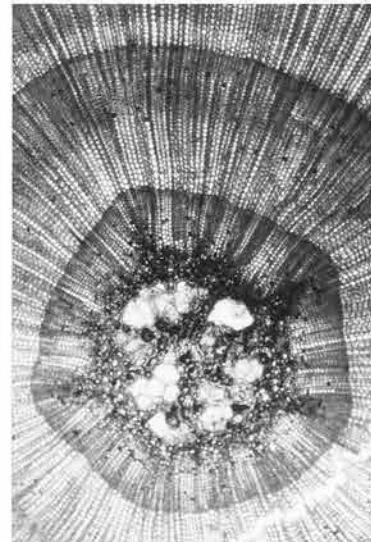
4b スギ(接線断面)  
木製品樹種No.5 bar:0.2mm



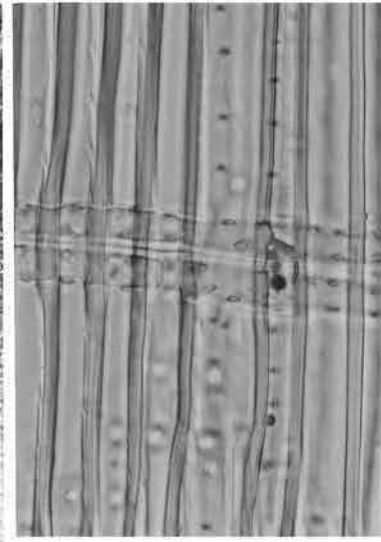
4c スギ(放射断面)  
木製品樹種No.5 bar:0.05mm



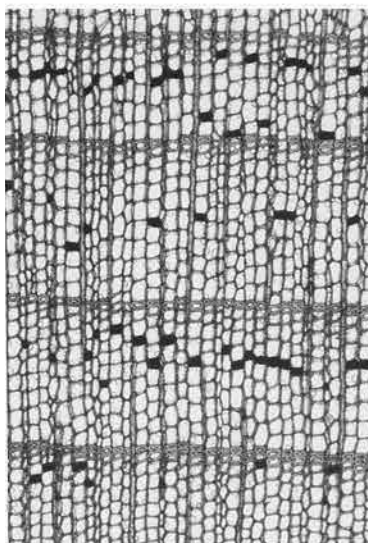
5a スギ(横断面 髓)  
埋没林通し番号40 bar:0.5mm



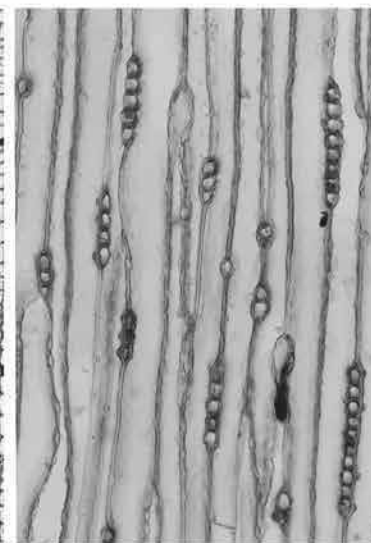
6a スギ(横断面 髓)  
埋没林通し番号55 bar:0.5mm



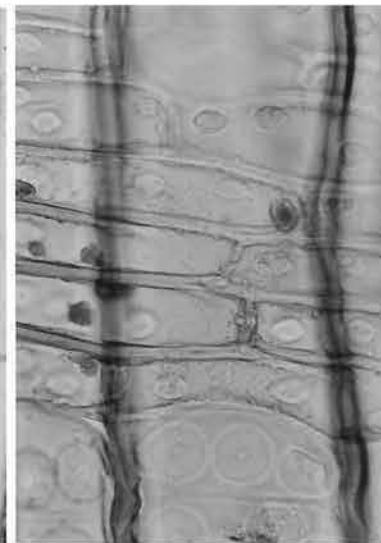
6b スギ(放射断面)  
埋没林通し番号55 bar:0.05mm



7a スギ根(横断面)  
埋没林通し番号31 bar:0.5mm

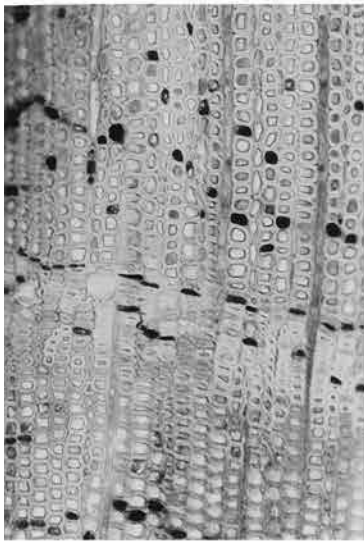


7b スギ根(接線断面)  
埋没林通し番号31 bar:0.2mm

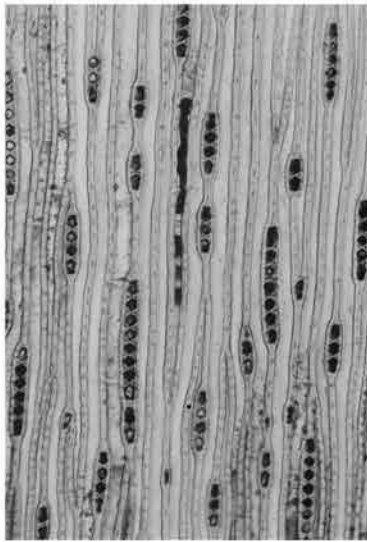


7c スギ根(放射断面)  
埋没林通し番号31 bar:0.05mm

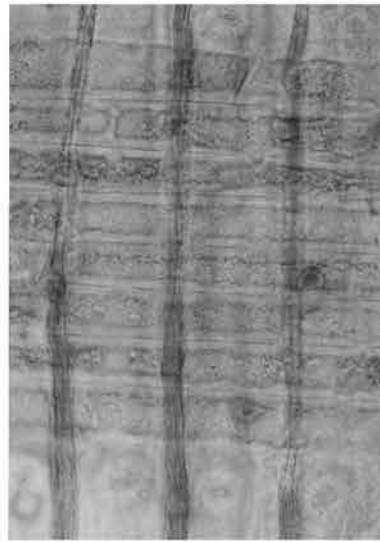
第10図 寺地遺跡出土木製品・埋没林樹種(2)



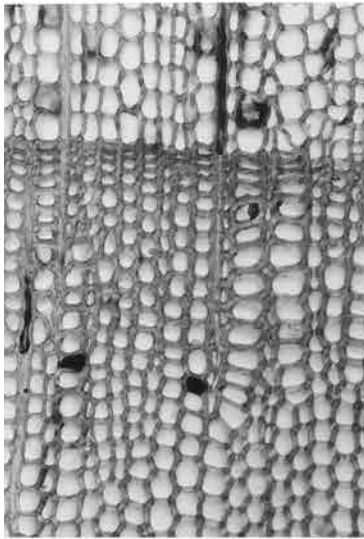
8a ネズコ(横断面)  
木製品樹種No.1 bar:0.2mm



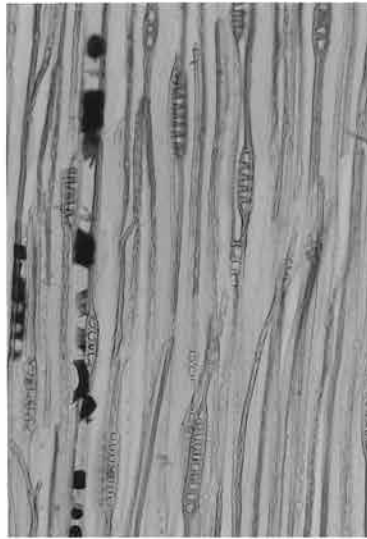
8b ネズコ(接線断面)  
木製品樹種No.1 bar:0.2mm



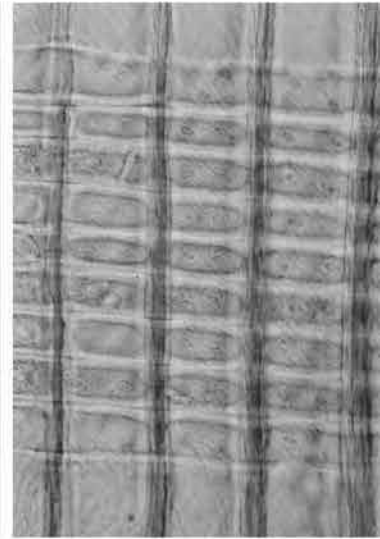
8c ネズコ(放射断面)  
木製品樹種No.1 bar:0.05mm



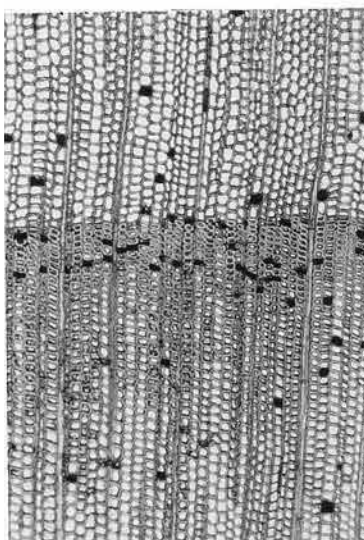
9a ヒノキ(横断面)  
木製品樹種No.14 bar:0.2mm



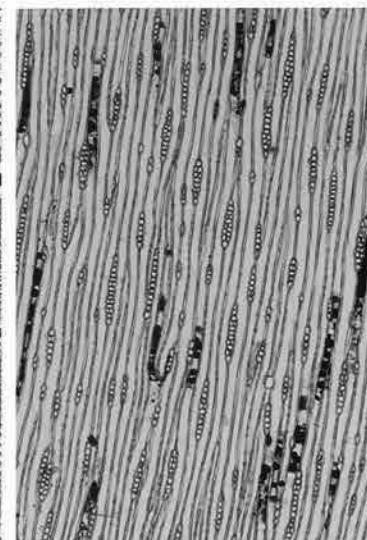
9b ヒノキ(接線断面)  
木製品樹種No.14 bar:0.2mm



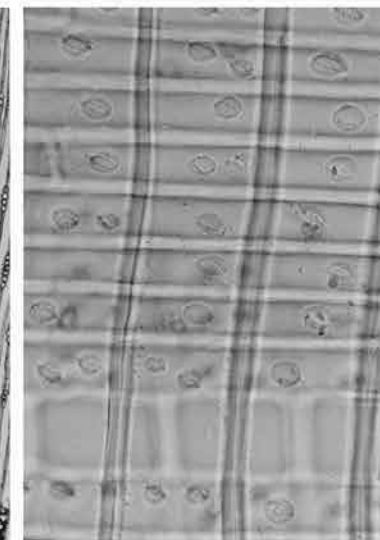
9c ヒノキ(放射断面)  
木製品樹種No.14 bar:0.05mm



10a ヒノキ属 根張り(横断面)  
埋没林通し番号27 bar:0.5mm



10b ヒノキ属 根張り(接線断面)  
埋没林通し番号27 bar:0.5mm



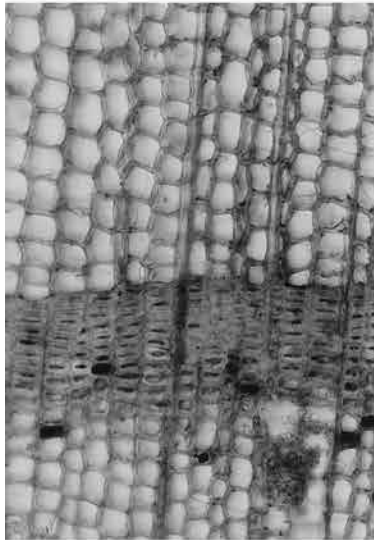
10c ヒノキ属 根張り(放射断面)  
埋没林通し番号27 bar:0.05mm

第11図 寺地遺跡出土木製品・埋没林樹種(3)



2 木製品および埋没林の樹種同定

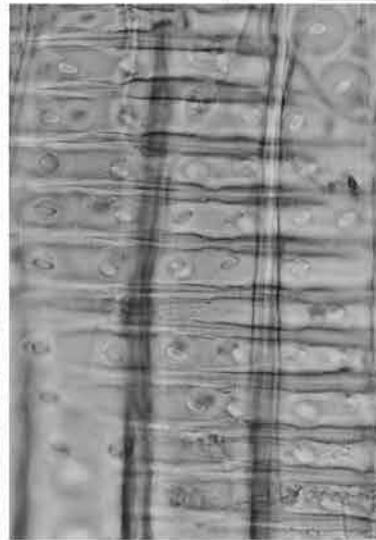
bar : 



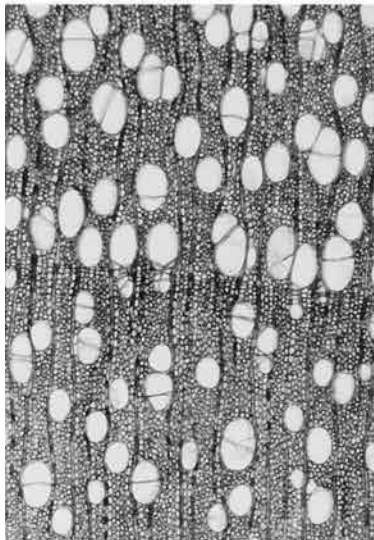
11a サワラ(横断面)  
木製品樹種No.12 bar:0.2mm



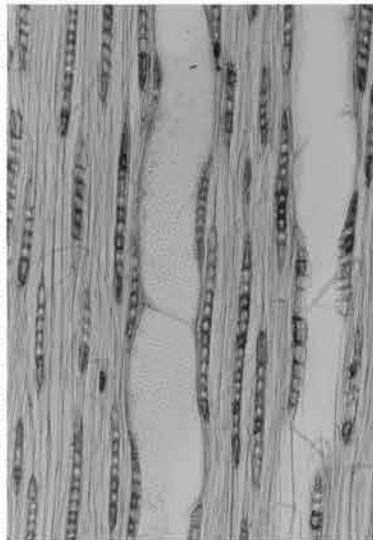
11b サワラ(接線断面)  
木製品樹種No.12 bar:0.2mm



11c サワラ(放射断面)  
木製品樹種No.12 bar:0.05mm



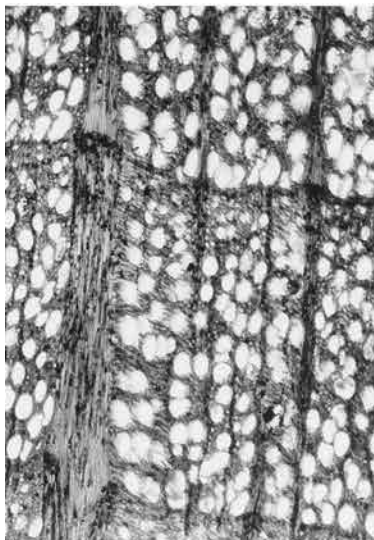
12a ヤナギ属(横断面)  
埋没林通し番号43 bar:0.5mm



12b ヤナギ属(接線断面)  
埋没林通し番号43 bar:0.2mm



12c ヤナギ属(放射断面)  
埋没林通し番号43 bar:0.2mm



13a ブナ属(横断面)  
木製品樹種No.4 bar:0.5mm



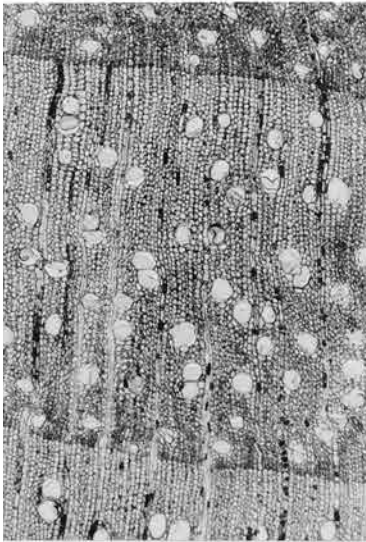
13b ブナ属(接線断面)  
木製品樹種No.4 bar:0.5mm



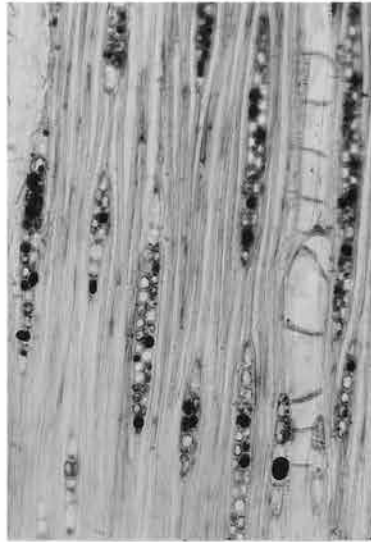
13c ブナ属(放射断面)  
木製品樹種No.4 bar:0.1mm

第12図 寺地遺跡出土木製品・埋没林樹種(4)

bar : 



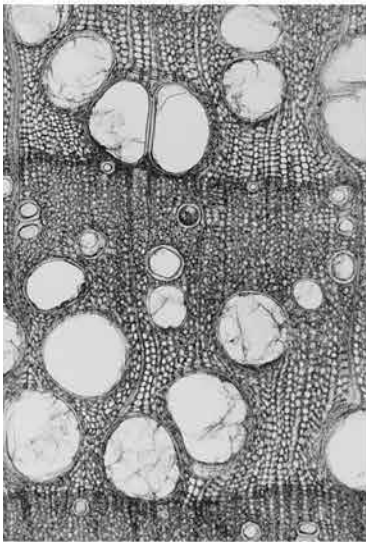
14a クスノキ科(横断面)  
埋没林通し番号47 bar:0.5mm



14b クスノキ科(接線断面)  
埋没林通し番号47 bar:0.2mm



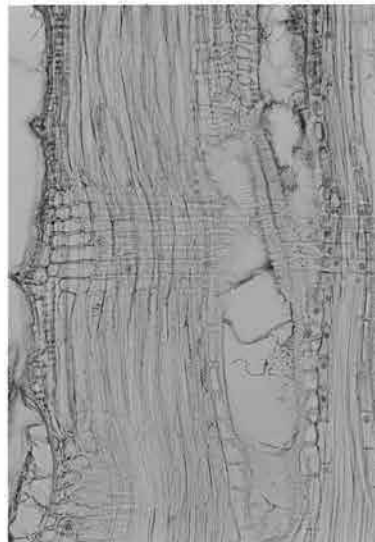
14c クスノキ科(放射断面)  
埋没林通し番号47 bar:0.1mm



15a トネリコ属(横断面)  
埋没林通し番号22 bar:0.5mm



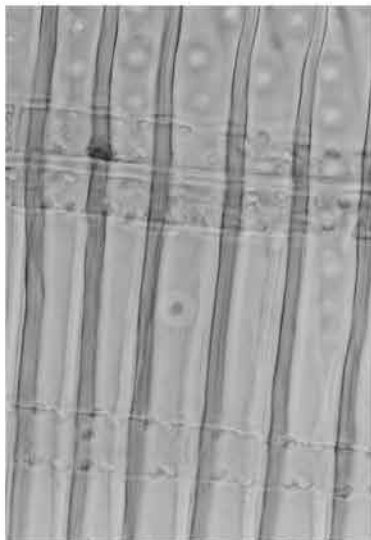
15b トネリコ属(接線断面)  
埋没林通し番号22 bar:0.2mm



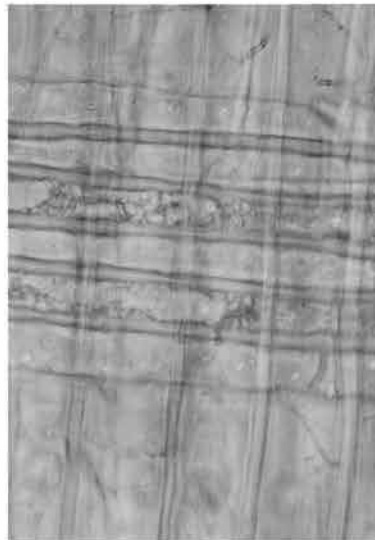
15c トネリコ属(放射断面)  
埋没林通し番号22 bar:0.2mm



16a タケ亜科(横断面)  
木製品樹種No.9の木釘 bar:0.5mm



17 ヒノキ属(放射断面)  
埋没林通し番号45 bar:0.05mm



18 ヒノキ属(放射断面)  
埋没林通し番号75 bar:0.05mm

第13図 寺地遺跡出土木製品・埋没林樹種(5)

## 3 放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

### A はじめに

寺地遺跡より検出された木片の加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を実施した。

### B 試料と方法

試料は、SK9、SD5、SK8、自然流路等から出土した木片 15 点であり、それぞれ年輪の外側部分を採取した。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定された  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した  $^{14}\text{C}$  濃度を用いて  $^{14}\text{C}$  年代を算出した。

### C 結果

第 6 表に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した  $^{14}\text{C}$  年代、 $^{14}\text{C}$  年代を暦年代に較正した年代を示す。

$^{14}\text{C}$  年代値 (yrBP) の算出は、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1 \sigma$ ) は、計数値の標準偏差  $\sigma$  に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の  $^{14}\text{C}$  年代が、その  $^{14}\text{C}$  年代誤差範囲内に入る確率が 68% であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

#### 暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された  $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、および半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期  $5,730 \pm 40$  年) を較正し、より正確な年代を求めるために、 $^{14}\text{C}$  年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と  $^{14}\text{C}$  年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて  $^{14}\text{C}$  年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代を算出する。

$^{14}\text{C}$  年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0 のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正值は  $^{14}\text{C}$  年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 $1 \sigma$  暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された  $^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその  $1 \sigma$  暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 $1 \sigma$  暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

### D 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した  $1 \sigma$  暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{CPDB}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代	
				暦年代較正值	1 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-1239 (AMS)	木片 No.4 (ヒノキ属) 8C	-24.1	1945 $\pm$ 50	calAD65	calAD15-90 (74.3%) calAD95-125 (25.7%)
PLD-1240 (AMS)	木片 No.7 (スギ) 9B	-25.1	1860 $\pm$ 50	calAD130	calAD90-100 (14.9%) calAD120-225 (85.1%)
PLD-1241 (AMS)	木片 No.9 (スギ) 10B	-24.0	2120 $\pm$ 60	calBC165 calBC125	calBC200-50 (92.1%)
PLD-1242 (AMS)	木片 No.13 (スギ) 11C	-23.9	1640 $\pm$ 50	calAD420	calAD345-370 (17.5%) calAD380-440 (52.7%)
PLD-1243 (AMS)	木片 No.17 (スギ) 12C	-23.4	1680 $\pm$ 50	calAD390	calAD260-280 (14.0%) calAD325-425 (84.2%)
PLD-1244 (AMS)	木片 No.20 (スギ) 13C	-22.6	2150 $\pm$ 50	calBC195 calBC190 calBC180	calBC350-295 (32.7%) calBC210-105 (60.8%)
PLD-1245 (AMS)	木片 No.24 (スギ) 14C	-24.4	1630 $\pm$ 50	calAD420	calAD380-440 (52.8%) calAD450-465 (11.5%)
PLD-1246 (AMS)	木片 No.29 (スギ) 15C	-24.2	2600 $\pm$ 60	calBC795	calBC830-760 (69.8%) calBC615-590 (11.0%)
PLD-1247 (AMS)	木片 No.34 (スギ) 18C	-24.6	2310 $\pm$ 60	calBC395	calBC410-350 (55.7%) calBC300-230 (39.8%)
PLD-1248 (AMS)	木片 No.49 (ヒノキ属) SK1658B1層	-23.2	1675 $\pm$ 50	calAD395	calAD260-280 (12.0%) calAD335-425 (85.0%)
PLD-1249 (AMS)	木片 No.54 (スギ) SK1658B5層	-23.1	1960 $\pm$ 50	calAD30 calAD35 calAD55	calAD0-85 (82.4%) calAD105-120 (12.8%)
PLD-1250 (AMS)	木片 No.58 (スギ) SD1738C1層	-25.4	1910 $\pm$ 50	calAD85 calAD105 calAD115	calAD50-135 (76.5%)
PLD-1251 (AMS)	木片 No.64 (ヒノキ) SK1738C5層	-25.2	1175 $\pm$ 50	calAD885	calAD780-895 (88.3%) calAD925-940 (11.7%)
PLD-1252 (AMS)	木片 No.67 (スギ) SX25114C1層	-24.1	1240 $\pm$ 45	calAD775	calAD715-750 (29.9%) calAD760-785 (17.8%) calAD790-830 (29.5%) calAD840-865 (17.8%)
PLD-1253 (AMS)	木片 No.74 (サワラ) SK4078C4層	-25.0	1675 $\pm$ 50	calAD390	calAD260-280 (13.2%) calAD335-425 (82.4%)

第6表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

引用文献

植田弥生・辻 誠一郎 (1994) 若狭湾沿岸,敦賀市中池見の埋没林とその放射性炭素年代、29-30、植生史研究 第2巻第1号

植田弥生・辻 誠一郎 (1995) 三方低地帯北部,中山のスギ埋没株とその放射性炭素年代、33-35、植生史研究 第3巻第1号

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の14C年代、p.3-20.

藤 則雄 (1987) 新潟県縄文時代寺地硬玉遺跡の古環境解析、1-22、日本海域研究所報告 第19号

藤井昭二 (1990) 黒部川扇状地の形成と富山湾周辺部の埋没林について、11-20、地球科学 第78号

三方町教育委員会 (1991) 「角谷遺跡 仏浦遺跡 江端遺跡 牛屋遺跡」

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

# 第Ⅶ章 ま と め

## 1 縄文時代

1区の裾野部分の基本層序では中期と晩期の遺物包含層を確認することができ、その層から出土した土器はいずれも小破片のものがほとんどであったが、町道側の山裾部分の12トレンチ付近では晩期の土器が集中して出土した。また、独立丘中腹部の基本層序の一部に中期・晩期層を確認することができ、ピットも一基検出しているが、土器の集中やそれ以外の遺構は検出できなかった。東側及び西側の斜面下の際には中世の層序から磨製石斧が出土しているが、そこには縄文の層序がないことから、何らかの理由で中腹部から流れてきたものと考えられる。

2区では、Ⅱ層の近世遺物包含層からも縄文土器や磨製石斧などが出土していることから、近世以降の開墾等によりもともと縄文層にあった遺物が上部に掘り上がってきたものと考えられる。西側には縄文晩期後葉の土器が集中して確認できた。また、調査区東側グリッド8B・C付近を小川（SD4）が南から北に向かって貫流し、流路内に7m間隔で直径3mほどの土坑を3基検出した。同様な遺構の調査例は、縄文時代後期中葉の集落遺跡である長野県中野市栗林遺跡にみられる。栗林遺跡では湧水を貯水し、堅果類などの水さらしを行うための竖穴が小川を横断するように設けられていた〔斎藤1994〕。寺地遺跡では木組や石組などの人工構築物は確認されず、覆土内から堅果類の出土をみていないという相違点があるものの、遺構の立地に類似点が認められることから、その用途は「水さらし」に限定しない、広義の「水場」遺構として理解できる。

## 2 中世・近世

### A 陶磁器について

寺地遺跡では中世に至ると、遺物量が増大する。珠洲焼の貯蔵具に古手の製品がみられるものの、供膳具や土師皿は15世紀後半以降にまとまりがみられる。県内の中世土師皿は、坂井秀弥により4分類されている〔坂井1988〕。寺地遺跡の1類は坂井B類に、2類は坂井A類に該当する。坂井の分類を概ね踏襲し、その変遷と地域的特性を明らかにし、背景となる政治的動向を論じた品田高志氏〔品田1999〕によれば、1類は関東系の技法であり、15世紀に生産・流通するとし、2類は京都系の技法であり、16世紀初頭に大量に流入（「京都系土師器第2波の流入」）し、16世紀代を通じ、生産・流通するという。

以後、17世紀代まで供膳具を中心に一定量みられる。18世紀代にはいと、出土量は減少し始める。調査区内から遺構は検出されなかったことから、周辺に該期の集落跡等の存在が窺える。中世では、青磁の香炉・蓋置などの奢侈品や、灯明に使用された土師皿、天目碗などの出土量比から、ある程度の富裕層が想定できよう。また、羽釜、石鍋の出土は西日本の影響が指摘できる。近世にはいと、肥前系陶磁器が大半を占めるようになり、日本海沿岸の一般的な集落と同様な陶磁器構成を呈する。その中で、越中瀬戸が一定量を占める様相は産地との距離の近さを反映しており、本県の中・下越地方との様相とは異なる。

次に2区から出土した陶磁器について、層位別に陶磁器組成をみていく（第7表）。計測値は破片数を

示している。Ⅲ層は前述のように明確に分層が可能な地点のみⅢa層とⅢb層に区分している。そのため、本表ではⅢa層とⅢb層を含めた計測値を「Ⅲ層」として提示した。

Ⅲ層は中国陶磁、瀬戸美濃、珠洲、越前、信楽<sup>1)</sup>、瓷器系陶器、土師皿などの中世陶磁が主体を為し、須恵器、近世陶磁が少量混じる。近世陶磁は越中瀬戸と肥前系陶器が大半を占める。前者は17世紀を主体に流通していたことが知られている [宮田1997]。また、後者は大橋Ⅰ～Ⅱ期の製品、および、Ⅲ層を主体とする京焼風唐津の碗がみられる。以上のことから、Ⅲ層は15世紀後半～17世紀代を主体とする年代が与えられよう。尚、Ⅲb層では珠洲や土師皿の占有率が高いのに対し、Ⅲa層では近世陶磁の比率が高くなってきており、Ⅱ層への移行期として捉えることが可能である。

Ⅱ層は近世陶磁が主体をなすようになる。近世陶磁は肥前系のが大半を占め、中でも、磁器の割合が高くなる。磁器は大橋Ⅳ期～Ⅴ期に該当する。肥前系陶器では、京焼風唐津、内野山系の銅緑釉をかけた製品、刷毛目唐津、陶胎染付などが主体的にみられるようになる。また、近代の遺物を含まないことから、層の年代は18世紀～19世紀前半と考えられる。

層位	須恵器	土器(古代)	中国陶磁				瀬戸美濃	珠洲	越前	信楽	瓷器系	褐軸(不明)	土師皿	瓦器・羽釜	計
			白磁	青磁	染付	天目									
Ⅰ				1								2		3	
Ⅱ	11	3	4	8	4	1	31	67	23	2		2	76	3	235
Ⅲ	41	2	3	35	1		34	207	12	3	4	2	168	18	530
Ⅲa	4	1	1	14			5	18	2			1	8	1	(55)
Ⅲb	11	1	1	7			14	69	1	2	2		32	10	(150)
その他	4		2		2		6	3	15	1	1		16	3	53
計	56	5	9	44	7	1	71	277	50	6	5	4	262	24	821

層位	肥前系陶器							肥前系磁器	越中瀬戸	越中瀬戸系	京・信楽系	関西系	土製品	不明	計
	Ⅰ・Ⅱ期	京焼風	内野山系	刷毛目	陶胎染付	壺・甕・瓶	挿鉢								
Ⅰ		1						3	1					1	6
Ⅱ	47	31	23	19	4	14	2	99	53	3	3	1	7	18	324
Ⅲ	34	14	4	2	1	7	5	49	49	1	7	5	1	26	205
Ⅲa	10	7		1		3	1	23	29		1	2		5	(82)
Ⅲb	11	2	2	1	1	1		13	9		1	2		12	(55)
その他	3	1	4		1	3	2	13	3				2	2	34
計	84	47	31	21	6	24	9	164	106	4	10	6	10	47	569

第7表 層位別陶磁器組成表

## B 木簡について

2区で出土した2点の木簡については第V章で述べたが、ここでは272・273についての若干の考察を行う。

### 1) 一号木簡

「納～斗入」という用例は福井城跡出土木簡や佐渡奉行所跡出土木簡など2遺跡6例が見られる。これらが年貢米に関するものとされており、同様の記載様式である本木簡も年貢に関する可能性が高い。「七斗入」という具体的な斗量記載が見られることから、年貢に付された木札でも中札よりもむしろ外札の可能性がこの木簡の性格として想定できる。また、「納～斗入」という記載方法が現段階では北陸にしか見出せず、北陸地方の地域的な特色を反映している可能性もある。

ただし、他の年貢関係木簡では四斗が多く、児玉幸多氏が指摘するように年貢俵の斗量は四斗か四斗五升が一般的である [児玉1967]。こうした通例と比較すると本木簡の七斗は量的に非常に多い。類例と

1) 緻密で堅く焼き締まった白色の均質な胎土を持ち、器表に長石の吹き出しが顕著にみられる一群を信楽とした。しかし、越前と信楽は類似した胎土を持つものがあり [秋田1998]、見誤った可能性があることお断りをしたい。

して「米七斗」の木簡が上越市春日山城跡の井戸跡からも出土している。詳細は不明だが、短冊形で上端に両側から切込みを入れる典型的な付札なので、上越地方では七斗を一俵とした可能性も考えられる。しかし、実際の年貢俵実態は標記された斗量よりも多くの米が詰められていることを考慮に含め、持ち運べる重量の観点からは、これらの木簡が一俵の俵に付けられたとは考えにくい。むしろ、何俵かにまとめて付けられた木簡ではないかと推測される。木簡は一荷に一札という使い方が一般的だが、数個の荷物にまとめて付けられる木簡もあったと思われる。例えば、東京都汐留遺跡脇坂家上屋敷遺構出土木簡などがその例として見出せる。こうした木簡は水藤真氏が指摘するように中世の荷札木簡にも見られるので、あながち無理な想定ではない〔水藤1995〕。ただし、一俵四斗が規定とされている糸魚川藩領において何故に「七斗」という中途半端な斗量が記されたのかその理由は判明できなかった。後考に期したい。

向山孫左衛門はこれを負担した本百姓と解釈するのが自然であろう。一般に近世では本百姓は姓をもたず、名だけで呼称され、地名（村名など）＋人名（家号など）で区別・記載されていた。この観点から向山は地名、孫左衛門は人名（家号）と想定され、現在の青海町大字歌字向山に「向山孫左衛門」の家号が現存する。当家には代々の「孫左衛門」に関する文書や旧歌村関係の文書が大量に保管されている。それらによれば、確実に寛政年間には「孫左衛門」と称していたことが分かる。これらの事実から当家の祖先が納入した年貢に付されたと考えられよう。ただし一つ問題となるのは、青木重孝氏が指摘するように旧歌村は田畑が非常に少なく皆金納とされていることであり、一つの可能性に止めたい。

## 2) 二 号 木 簡

二号木簡は形状に特徴があり、裏が中途まで割られて間にもものが挟めるようになっている。木簡全体が粗雑な製作状況なので製作中に偶然割られた可能性もあるが、下端まで割り切れず途中で止めているのも意図的と考え得るので、付札的な使い方と関係する可能性もある。

文字は平仮名三文字が一行で記された木簡であるが、この解釈には二つの解釈が想定される。

一つは近郊に所在する火打山の可能性だが、管見の限りでは山の名称を記した木簡はなく考えがたい。

もう一つは『天和三年閏九月 越後国頸城郡寺地村御検地水帳』に見られる「火打町」の可能性である。この地名は検地帳の冒頭に近い「寺地村田方」の中に見られる。この地名は現存していないが、「町」とされていることから、極めて狭い地域で田畑に近い山側の旧寺地村の周縁部にあったと考えられる。明治の土地更正図によれば、調査地点が旧村内からは周縁部に近くそれを示すような「沖ノ田」という小字名も残っているので、本遺跡近辺に「ひうち」という地名があった可能性も考えられる。いずれにしろ検地帳から、旧寺地村内に所在した地名（町名）とするのが妥当であろう。

## C 旧寺地村について

中・近世では、前述したように陶磁器類・木製品・金属製品といった質・量と共に予想以上の遺物が出土した。このことは中・近世にかけてこの付近においてはムラをつくる等、人々が活発に活動していたことを物語る証である。そして、出土した建築部材の一部に焼け跡や破壊された痕跡が認められることや調度品の一部にも破壊された痕跡が見られることは、1578（天正6）年の御館の乱で当遺跡の西側山頂部分に位置する松山城が落城した時に、調査区近くに所在したといわれる旧寺地村も焼失したという伝承を裏づけるものである〔青木1966〕。旧寺地村の位置については今回の発掘調査では確証が得られなかった。しかし、1区の独立丘中腹部平坦地から現松尾神社に隣接しその内部から鰐口が出土したことで旧松

尾神社の可能性が高いと考えられる建物跡の存在が確認されたことやその建物跡の南側長軸線上に参道と思われる遺構が検出されたことから、旧寺地村はその建物跡の南方低地に所在していた可能性がうかがえる。

また、2区のほぼ全面にわたって認められた埋没林の中には、根や幹に人の手によって切断された痕跡がある。これらの痕跡は、同時に出土した遺物からみて室町時代～江戸時代にかけて付けられた可能性が高い。その要因としては、農地の開発等に際して妨げとなった埋没林に対して、切断・抜き取りを行いながら耕地を広げていったという行為が考えられる。ここにおいても当時の人々の活発な活動痕跡をうかがうことができる。そして、その行為の主は旧寺地村の人々であったことは想像にかたくない。

### 3 埋 没 林

調査の結果、寺地遺跡から出土した埋没林は2区全体に広がっていることがわかった。自然科学分析結果によると、その樹種のほとんどが北陸地方の特徴とされるスギであることが確認され、埋没林の放射性炭素年代測定値は、古いもので縄文時代晩期を示した。この事実から、縄文時代晩期にはすでにスギが生育しており、埋没林が分布している2区一帯はスギを中心とした森林地帯であったことが予想される。

一方、史跡寺地遺跡の報告書〔寺村ほか1987〕によると、史跡範囲部分からはスギの木柱が多く出土した。縄文時代晩期の土器が今回の調査区からも集中的に出土していることから、今回の調査区においては史跡範囲部分と同時期に人々が活動していたと考えられ、調査区の森林地帯は史跡寺地遺跡部分で使用された木柱の供給源とも考えられる。

また花粉分析の結果、室町時代には遺跡周辺において水田稲作が営まれていたり、江戸時代にはソバの栽培も行われたりといったような土地利用が明らかになったこのことから、前述のような埋没林の根や幹に付けられた切断痕は、旧寺地村の人々が土地を耕すときに障害となった埋没林を切断し、抜き取った結果、できたものであることが科学分析からも裏付けられたといえる。



## 要 約

- 1 寺地遺跡は、新潟県西頸城郡青海町大字寺地字大門1021-1ほかに所在する。調査区は田海川左岸の独立丘（1区）及び沖積地（2区）で、現況は荒蕪地であった。標高は1区14m、2区は8mを測る。
- 2 発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い平成13年4月9日から同年11月2日にかけて実施した。調査面積は、3,200㎡である。
- 3 調査の結果、縄文時代晩期の土坑3基、室町時代～江戸時代の掘立柱建物1軒、土坑2基、溝1条を検出した。
- 4 1区の独立丘中腹部から、室町時代～江戸時代の掘立柱建物・土坑・参道と考えられる溝状遺構が検出されたことは、北側に隣接する松尾神社の沿革や旧寺地村にかかわる貴重な資料を提供したといえる。
- 5 2区の沖積地では、埋没林が全面に広がっていることがわかり、東側には自然流路を利用した縄文時代の水場遺構と考えられる個所が発見され、西側には縄文時代晩期の遺物集中区が検出された。
- 6 2区の埋没林には、切断痕などの人為的な痕跡がみられるが、この痕跡は出土遺物からみて室町時代～江戸時代の人々が農地の開墾などに際し、障害となる埋没林を抜き取る時に付けたものと考えられる。
- 7 自然科学分析の結果、2区は縄文晩期にはスギを中心とした森林地帯と考えられる。そして、そこは史跡寺地遺跡部分で使用された木柱の供給源とも考えられ、今後の解明が待たれる。
- 8 花粉分析の結果、遺跡周辺においては室町時代には水田が、江戸時代にはソバが栽培されていた可能性が指摘されている。

## 引用文献

- 青木重孝 1966 『青海—その生活と発展—』 青海町役場
- 秋田裕毅 1988 「信楽焼に関する一考察」『榑崎彰一先生古稀記念論文集』 真陽社
- 石川考古学研究会 1997 『祭祀具Ⅱ』 石川県考古資料調査・集成事業報告書
- 石川日出志 1987 「第4章 縄文土器の考察 Ⅱ 縄文時代晩期の土器」『史跡 寺地遺跡』 新潟県西頸城郡青海町教育委員会
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
- 大角地遺跡発掘調査団 1988 『大角地遺跡』 青海町教育委員会
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』 第27巻1号 信濃史学会
- 金子裕之 1988 『律令期祭祀遺物集成』 律令期祭祀遺物研究会
- 児玉幸多 1967 『近世農民生活史』 吉川弘文館
- 斎藤久美 1994 「(3) 水さらし状遺構」『栗林遺跡』 (財) 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19 長野県中野建設事務書・長野県道路公社・(財) 長野県埋蔵文化財センター
- 斎藤 忠・向坂綱二・川江秀孝・辰巳 均 1978 『伊場遺跡発掘調査報告書 第3冊 伊場遺跡遺物編1』 浜松市教育委員会
- 坂井秀弥 1988 「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟県考古学談話会会報』 第1号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1999 「越後における中世後期の土師器皿—京都系土師器第2波の流入と展開—」『中近世土器の基礎研究』 XIV 日本中世土器研究会
- 菅野三郎・天野和孝 1990 『新潟県地質ガイド(上)』 地質ガイドシリーズ20 コロナ社
- 須沢角地A遺跡発掘調査団 1988 『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』 青海町教育委員会
- 寺村光晴・青木重孝・関 雅之 1987 『史跡 寺地遺跡』 新潟県西頸城郡青海町教育委員会
- 巽 淳一郎 1996 『まじないの世界Ⅱ(歴史時代)』 至文堂
- 平野団三・渡辺秀雄 1968 「西頸城郡」『日本歴史地名大系15 新潟県の地名』 平凡社
- 藤田亮策・清水潤三 1964 『長者ヶ原』 新潟県糸魚川市教育委員会
- 水野正好 1985 「招福・除災—その考古学—」『国立歴史民俗博物館研究紀要』 第7集 国立歴史民俗博物館
- 水藤 真 1995 『木札・木簡の語る中世』 東京堂出版
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸」・「越中瀬戸の変遷と分布」『中世の北陸』 桂書房
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』 No.2 日本貿易陶磁研究会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 四柳嘉章 1987 『西川島』 穴水町教育委員会

陶磁器観察表(1)

No.	種類	器種	産地/年代	出土位置	層位	口径	底径	器高	絵付/軸葉	胎土		成形(外/内)	備考
										色調(密粗)	混入物		
1	陶器	小壺	越中瀬戸	P1		9.6	11.0	11.0	鉄釉	灰褐色	長石(多)	底部系切り	2B21、2C5・14・15、3C1と接合
2	縄文土器		前期	2B25	III					にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石・雲母(僅)		補修孔有り
3	縄文土器		中期	2C4	III					浅黄褐色(10YR8/4)	雲母・長石(多) 赤色粒(少)		
4	縄文土器		中期							にぶい黄褐色(10YR5/3)	チャート(多) 雲母・赤色粒(少)		一次調査 5T LR
5	縄文土器		晩期	3C1	II					にぶい黄褐色(10YR6/4)	長石・石英・雲母(少)	条痕文/条痕文	
6	珠洲	壺	珠洲/吉岡V期	2C8・9・10	II	12.2	9.0	16.9		紫灰色～灰色	白色粒(やや多) ス(やや多)	轆轤 底部ヘラケズリ	
7	土器	土師		2C14	II b	9.4	4.6	2.0		明黄褐色(10YR7/6)		2類	
8	土器	土師		2C9	II	10.2	2.8	2.4		浅黄褐色(10YR8/4)		2類	
9	土器	土師		3C20	III	9.8	3.9	1.9		にぶい黄褐色(10YR7/3)		2類	
10	土器	土師		2C9	II	9.0	6.5	1.9		浅黄色(2.5Y7/3)		1類	
11	陶器	碗	肥前系(京焼風)/大橋IV期	3B16・21	II	9.4	5.0	7.0	灰釉	灰褐色(やや粗)		轆轤	
12	陶器	碗	肥前系(京焼風唐津)/大橋III・IV期	3C11・12	II	12.4			透明釉	灰黄白色(粗、軟)	黒色粒(多)	轆轤	
13	陶器	小壺	越中瀬戸	2C15・3C6・7	II	11.8			錆釉	橙褐色(粗)	長石(多) ス(多)	轆轤	
14	陶器	小壺	越中瀬戸	3B21・23・3C2・6・7	II		10.4		錆釉	黄白色(粗)	長石(少)	轆轤 底部系切り	
15	縄文土器	深鉢	縄文中期	1B25	IV		7.0			にぶい黄色(2.5YR6/4)	長石・雲母(少)	底部網代圧痕	LR 外: にぶい橙色(5YR6/4)
16	縄文土器		縄文晩期	5C					赤彩	オリブ黒色(10Y3/1)	石英・雲母・長石(多)		
17	縄文土器	深鉢	縄文晩期	4C2	III	44.0				にぶい黄褐色(10YR5/4)	長石・雲母(少)	波状口縁/沈線	
18	縄文土器	深鉢	縄文晩期							にぶい黄褐色(10YR7/4)	雲母・長石(少)	波状口縁	一次調査 12T
19	縄文土器		縄文晩期	1C4	I b					にぶい黄褐色(10YR6/4)	雲母・長石(多) チャート(少)		
20	陶器	皿	瀬戸美濃	2B7	I		4.6		灰釉	灰白色(精良)	白色粒(僅)		
21	珠洲	甕		2B12	I・II	23.8				灰色	雲母(僅) 白・黒色粒(少) 砂礫(多)	タタキ	
22	須恵器	甕								灰白色	白色粒・石英(僅)	タタキ	
23	陶器	皿	肥前系	3A23	I		4.4			灰黄白色(密)	ス(少)	削り高台	
24	珠洲焼	播鉢		1区		31.6				灰白色(やや粗)	雲母(僅) 砂礫(多)		
25	陶器	播鉢	肥前系/17世紀中～後半	2B12	III	37.4			鉄釉	暗灰色	赤・白色粒(少) ス(僅)		
26	珠洲焼	捏鉢		2A19	I	29.2			自然釉	灰白色(精良)	雲母・長石(僅) 黒色粒(多)		
27	瓦器	深鉢		2B9	I	35.2				黄白色			
28	縄文土器	深鉢	縄文晩期(佐野II式)	16C4・9	IV C	32.0				灰黄褐色(10YR4/2)	石英(多) 小礫(少)	口縁に沈線1条	口縁端部、内外面にス、LR縄文帯
29	縄文土器	壺	縄文晩期	16C9	IV b					オリブ褐色(2.5Y4/4)	石英(多) 雲母・砂粒(少)	眼鏡状文	外面赤褐色(5YR4/6)
30	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16C5	IV C					灰黄褐色(10YR4/2)	石英(多) 小礫(少)	LR縄文帯/口縁に沈線1条	
31	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17B16	IV b	33.0				にぶい黄褐色(10YR5/4)	雲母・長石(少)	口縁内外面に沈線1条	外面にス
32	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16C9	IV					灰黄褐色(10YR4/2)	長石(多)	条痕文	
33	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17B21	IV C	21.7				にぶい黄色(2.5YR6/3)	雲母・石英(少) 石英(多) 雲母・長石・砂粒(少)	沈線2条 波状口縁	
34	縄文土器	壺	縄文晩期	16C5	IV b	10.4			赤彩	にぶい黄褐色(10YR6/3)	長石・雲母(少)	沈線4条	
35	縄文土器	壺	縄文晩期	16C5	IV b	6.6			赤彩	黒色(5Y2/1)	石英(多)	沈線4条	
36	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16C4・9	IV C					灰黄褐色(10YR5/2)	石英(多) 雲母(少)	口縁に沈線1条	外面にス
37	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16C4	IV b	23.2				にぶい黄褐色(10YR6/4)	長石・雲母(少)	条痕文 波状口縁	
38	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16C9	IV C					にぶい黄褐色(10YR5/3)	長石(多) 雲母・赤色粒(少)	網目状擦糸文 波状口縁	
39	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16C5	IV b					橙色(7.5YR6/6)～黒褐色(2.5YR3/1)	長石(多) 雲母・石英(少)	条痕/	
40	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17B17	IV b					にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・小礫(多) 長石(少)	ミガキ(横位)/ミガキ	外面にス
41	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17B21	IV					浅黄色(2.5Y7/4)	長石・石英・砂礫(多)		内面にス
42	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16C9	IV c					灰黄褐色(10YR5/2)	砂粒(多) 雲母(少)	網目状擦糸文	左(L) 擦り
43	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16C4	IV					黒色(5Y2/1)	雲母・長石(多) 石英(少)	網目状擦糸文	左(L) 擦り
44	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16B20	IV b		8.2			にぶい黄褐色(10YR6/3)	雲母・長石・砂粒(多)	網目状擦糸文	左(L) 擦り 内面にス

観察表内の胎土色調は報告者の観察により決定した。尚、土器類については『新版 標準土色帖 1994年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局 監修)を基にマンセル記号を付記した。

陶磁器観察表(2)

No.	種類	器種	産地/年代	出土位置	層位	口径	底径	器高	絵付/軸葉	胎土		成形(外/内)	備考
										色調(密粗)	混入物		
45	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16C5-16C9	IV C	30.2				にぶい褐色(7.5YR 5/4)	雲母・長石(少)	ケズリ/ケズリ	外面にスス
46	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16C9	IV C		10.8			にぶい褐色(7.5YR 5/4)	雲母・長石・石英(多)	底部網代圧痕 /	内面にスス(環状)
47	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17B16-17B17	IV b	34.5				にぶい黄褐色(10YR 4/3)	雲母(少) 砂粒(多)	ケズリ	産廃物付着
48	縄文土器	甕	縄文晩期(長竹式前半)	17C11-12-17	IV b	35.6				にぶい黄褐色(10YR 6/4)	石英・赤色粒・白色粒(少)	眼鏡状文	
49	縄文土器	深鉢	縄文晩期	16B20	IV b					にぶい黄褐色(10YR 5/4)	長石(多) 石英(少)	網目状撚糸文	内面にスス
50	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17C1	IV C					にぶい黄褐色(10YR 7/4)	長石(多) 石英(少)	平行沈線3条	口径10.8mm前後
51	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17C1	IV b					にぶい橙色(7.5YR 5/4)	石英(多)	口縁内面に沈線1条	
52	縄文土器	甕	縄文晩期(長竹式)	17C8-10-12	IV b	33.0	8.4	28.9		明黄褐色(10YR6/6)	長石(多) 雲母(少)		
53	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17B12	IV b		11.2			明褐色(7.5YR5/8)	石英・雲母・長石(少)	底部網代圧痕	
54	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17C11	IV b	32.0				にぶい黄褐色(10YR 6/4)	石英(多)	条痕文	
55	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17C1	IV b		10.8			にぶい黄褐色(10YR 5/3)	長石(多) 雲母・石英(少)	底部網代圧痕	内面にスス(環状)
56	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17C1	IV b		10.8			にぶい黄褐色(10YR 7/4)	長石・石英(多)	底部網代圧痕	
57	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17C1-17C6	IV b		9.6			浅黄褐色(7.5YR8/4)	長石(多)	条痕文	
58	縄文土器	深鉢	縄文晩期	17C1	IV b		10.0			浅黄褐色(10YR8/4)	長石・雲母(少)		
59	縄文土器		中期	7B9	III					橙色(7.5YR7/6)	長石・雲母(少)		
60	縄文土器	深鉢	縄文晩期	15C5	III b	19.4				にぶい黄褐色(10YR 7/3)	長石・砂礫(多) 雲母(少)	平行沈線4条	
61	縄文土器	深鉢	縄文晩期	15C5	III b					にぶい黄褐色(10YR 4/3)	長石(多) 雲母(少)	口縁端部圧痕 平行沈線4条 条痕文	外面にスス
62	縄文土器	深鉢	縄文晩期	8B20	IV a					灰黄色(2.5Y7/2)	長石(多) 雲母(少)	平行沈線4条 /	△押文
63	縄文土器		縄文晩期(上野原式)	16C2	II				赤彩	にぶい黄色(2.5Y 6/3)	長石(多) 雲母・石英・赤色粒(少)		
64	縄文土器		縄文晩期	8C11	II					暗灰黄(2.5Y5/2)	雲母・砂礫・長石(少)		
65	縄文土器		縄文晩期(大洞C2併行)	10C12	II					にぶい黄褐色(10YR 6/3)	長石(多) 雲母(少)	列点文	LR
66	須恵器	有台坏	春日V2期(9C前葉~中葉)	13C17	III b		6.0			灰色	白色粒(僅) 黒色粒(僅) 白色砂礫(僅) 灰白色粘土がマーブル状に横位に混じる		
67	須恵器	無台坏		15C8	III b		9.8			灰色	白色粒(少)		
68	須恵器	环蓋		14C1	III b		11.4			灰黄褐色(10YR5/2)	白・黒色粒(少)		
69	須恵器	环蓋		12B9	III			2.0		灰白色	白色粒(僅)		宝珠つまみ
70	須恵器	甕		13C1-12C18	III					青灰色	白色粒(少) 白色粘土がマーブル状に混じる		
71	須恵器	甕		12C18	III					灰白色	黒色炭化粒(多) 白色粒(少)		
72	須恵器	横瓶		16C11	III b				自然釉	灰白色	ス(多)		外面に平行沈線3条
73	土器	製塩土器	古代	16B10	III b			4.3		浅黄褐色(10YR8/4)	長石(少) 赤色粒(僅)	指おさえ /	
74	土器	製塩土器	古代	7C7	II			3.9		橙色(2.5YR7/6)	少礫・長石(多)	/ハケメ	
75	陶器	土鍾	古代か	11C11	II		7.3(長)	4.35(幅)	4.4(厚)	橙色~橙白色	長石・小礫(少)		一部自然釉
76	土器	土鍾	古代か	16C8	III a		4.7(長)	3.35(幅)	3.25(厚)	黄白色(粗)	長石・小礫(僅)		
77	白磁	皿	中国/15C	12B14	II					黄白色			
78	白磁	皿	中国/15C	12B22	攪乱		9.2			黄白色			
79	白磁	坏	中国/15C	12B17	攪乱			4.9		黄白色			削り高台
80	白磁	坏	中国/15C	16B7	III a				緑掛かった透明釉 光沢(有) 貫入(少)	白色(やや粗)	ス(多)		
81	白磁	坏	中国	18C11	III	8.0				白色(密)			
82	青磁	碗	竜泉窯系	9B12	III	14.5				灰白色(緻密)			蓮弁文
83	青磁	碗	竜泉窯系	12B11	III	15.4				灰白色	ス(多)		蓮弁文
84	青磁	碗	竜泉窯系	7C5	III	11.6				灰白色(やや粗)	ス(少)		蓮弁文 漆継ぎ
85	青磁	碗	竜泉窯系	12C4	II	13.4				灰色(やや粗)			内外面無文
86	青磁	碗・鉢	竜泉窯系	9C7	III		7.4			灰白色	白色粒(少)		
87	青磁	蓋置	竜泉窯系	13B11	III	6.8				灰白色			上面端部被熱?
88	陶器	天目碗	中国	11C8	II	14.0			鉄釉	淡黄灰色	ス(少) 白色微粒(少)		
89	染付	碗	中国	8C6	II		5.4			白色	ス(少)		蓮子碗
90	染付	皿	中国	8C2	II		6.2			灰白色(緻密)			十字花文 漆継ぎ
91	染付	皿	中国	8C6	攪乱		4.4			黄白色(粗)			十字花文 被熱
92	陶器	平碗	瀬戸美濃/古瀬戸後期IV期	11C8-9-14	II・III		6.0		灰釉	灰黄白色(やや粗)	ス(多)		

陶磁器観察表 (3)

No.	種類	器種	産地/年代	出土位置	層位	口径	底径	器高	絵付/釉薬	胎土		成形(外/内)	備考
										色調(密粗)	混入物		
93	陶器	平碗	瀬戸美濃/古瀬戸後期IV期	15B15	III b		5.0		灰釉(淡オリブ色)	灰白色(やや粗)		轆轤	外面胴部下半に熔着物あり
94	陶器	丸碗	瀬戸美濃/大窯I期	17C13	II	13.8			蓮弁文/灰釉	灰白色(やや粗)			
95	陶器	天目碗	瀬戸美濃/	7B10-9C18	II	11.5	5.8	4.4	鉄釉	橙黄色(軟)	長石(少)		
96	陶器	天目碗	瀬戸美濃/大窯IV期後半	12C20	II	12.5			鉄釉	灰白色(精良)	ス(多)		
97	陶器	天目碗	瀬戸美濃/大窯IV期	11C5-14C13	II・b III	9.8			鉄釉	黄灰色(精良)	白色粒(少)		
98	陶器	皿	瀬戸美濃/大窯I期	13C12	III	10.4	5.8	2.1	灰釉	くすんだ黄白色			底部糸切り
99	陶器	皿	瀬戸美濃/	12B7	攪乱	10.2	5.0	2.3	灰釉	黄白色(精良,やや軟)	ス(少)		口縁部打ち欠ス
100	陶器	皿	瀬戸美濃/大窯I期	13C17	III	11.0			灰釉	黄白色(やや粗)	ス(多)		
101	陶器	皿	瀬戸美濃	16C8	III a	10.5	5.0	2.3	灰釉	淡赤橙色(密)	ス(少) 白色・黒色微粒(多) 石英・赤色微粒(少)		
102	陶器	蓋	瀬戸美濃/古瀬戸様式	9B3	II			1.4	灰釉	灰白色(やや粗)	ス(多)		最大幅4.8cm破断面及び露胎部にス?付着
103	陶器	天目碗	瀬戸美濃/	11B18			4.4		鉄釉	黄灰色	黒色粒(少)	底部糸切り+削り出し	表面に擦痕
104	陶器	天目碗	瀬戸美濃/	18B24	III		4.4		鉄釉	黄灰色			
105	陶器	天目碗	瀬戸美濃/	14C5	II		10.2		鉄釉	黄白色			畳付けに熔着痕
106	珠洲	甕	吉岡IV 2期	12B18	攪乱					灰色	白・赤色粒・雲母(僅)		
107	珠洲	甕	吉岡V期	16C2	III b					灰白色	雲母・長石・白・黒色粒(少)		
108	珠洲	甕		7B15	III					灰色	雲母・白・黒色粒(多)		外面に印刻
109	珠洲	壺	吉岡III~V期	13B22	III	10.4				紫灰色(やや粗)	白・赤色粒・雲母(多)		内面にス
110	珠洲	壺	吉岡II期	11B25	II	22.0			自然釉	灰色(精良)	砂礫(少) 黒色粒(多)		
111	珠洲	壺	吉岡III期	16C12-13B11	III a		8.6			灰色	砂礫(少) 雲母・赤・白色粒(多)	底面ヘラケズリ	外面にス 内面にタール状付着物
112	珠洲	壺		9C17	III					灰色(精良)	石英・長石・砂礫(僅)		内面にス
113	珠洲	鉢	吉岡III期	10C3	II	29.2				灰白色	雲母・白色粒(少) 黒色粒・砂礫(多)		
114	珠洲	鉢	吉岡IV 2~V期	9C11-14	III	36.8				灰白色(やや粗)	白色粒・雲母(僅) 砂礫(少)		口縁端部に波状文 卸目: 9条1単位(幅3.0cm)
115	珠洲	鉢(片口)	吉岡IV期	13B14	III					灰色(精良)	白色粒(少) 雲母(多)		外面にス
116	珠洲	鉢	吉岡VI期	8C5	II	35.6				灰色	雲母・砂礫(少) ス(多)		
117	珠洲	鉢	吉岡IV 2期	14B22	III b					灰色	雲母・白色粒(少) 砂礫(多)		
118	珠洲	鉢	吉岡VI期	7C19	III	46.2				黄灰色(粗)	白・赤色粒(少) 砂礫(多)		口縁端部に波状文
119	珠洲	鉢	吉岡VI期	16B9	III b	33.8				灰白色(やや粗)	白色粒(僅) 雲母(少)		口縁外面に波状文 卸目: 9条1単位(幅2.3cm)
120	越前	甕								にぶい褐色(7.5YR 6/3)			
121	越前	播鉢		11C6	II	30.2				淡黄色(2.5Y8/3)			
122	土器	土師皿		7C9	III		8.6			浅黄橙色(10YR8/3)		1類	
123	土器	土師皿		7C13	III		7.0	3.1		にぶい黄橙色(10YR 7/4)		1類	
124	土器	土師皿		10B16	II	10.4	6.6	2.2		にぶい黄橙色(10YR 6/4)		1類	
125	土器	土師皿		8C5	II	6.6	4.7	2.1		にぶい黄橙色(10YR 6/4)		1類	
126	土器	土師皿		8C11	III	7.5	5.6	1.9		浅黄色(2.5Y7/4)		1類	
127	土器	土師皿		17B11	III a	14.0				灰黄色(2.5Y6/2)		2類	
128	土器	土師皿		9B11		17.0				浅黄色(2.5Y7/3)		2類	外: 橙色(5YR6/6)
129	土器	土師皿		10B21	II	14.5	6.8	2.2		灰黄色(2.5Y7/2)		2類	
130	土器	土師皿		12C20	III	15.0	8.4	2.4		浅黄色(2.5Y7/3)		2類	
131	土器	土師皿		16B21	III b	14.4				にぶい黄橙色(10YR 7/3)		2類	
132	土器	土師皿		15C2	II	10.9				にぶい黄色(2.5Y6/4)		2類	
133	土器	土師皿		10B20	II	9.6				にぶい黄橙色(10YR 7/3)			
134	土器	土師皿		8C11	II	8.4				浅黄色(2.5Y7/3)			
135	瓦器	風炉		15B10	III b	32.4				黒色	白色粒(多) 雲母(少)		
136	土器	羽釜		15C4	III a					浅黄色(2.5Y8/3)	長石・白色粒・雲母(少)		最大幅22.6cm

陶磁器観察表 (4)

No.	種類	器種	産地/年代	出土位置	層位	口径	底径	器高	絵付/釉薬	胎土		成形(外/内)	備考
										色調(密粗)	混入物		
137	瓦器	浅鉢型		17B21	Ⅲ	43.0				浅黄色(10YR8/3)	長石・白色粒(多) 雲母(少)		
138	陶器		産地不明	16B8	Ⅲb	16.2				にぶい黄橙色(10YR6/3)	長石・雲母・石英・白色粒(少)		
139	瓦器	風炉		12B15	攪乱	43.2				にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石・雲母・石英・白色粒(少)		
140	陶器	碗	肥前系/大橋1-2期	7C5-9-24-16B13	Ⅱ、Ⅲb	11.8	4.1	6.0	灰釉	灰白色	黒色粒	轆轤 削り出し高台	見込み胴部境に沈線状二重罫線 青唐津
141	陶器	碗	肥前系/大橋1-2期	9C13	Ⅱ		4.6		灰釉(暗オリーブ)	黄灰色	ス(少) 白色微粒(僅)		見込みと畳付外りに胎土目
142	陶器	皿	肥前系/大橋1-2期	15C7-19	Ⅱ、Ⅲa	11.8	4.0	3.7	灰釉(暗オリーブ)	赤褐色(粗)	白色粒(少) 黒色炭化粒(僅)	轆轤 削り出し高台(兜巾状)	見込み胎土目4箇所
143	陶器	ひだ皿	肥前系/大橋1-2期	12B12-16	攪乱	11.0	4.0	3.3	灰釉	赤褐色(粗)	ス(少) 白色粒(僅)	削り高台	
144	陶器	丸皿	肥前系/大橋1-2期	16B18	Ⅲb	10.6			灰釉(オリーブ色)	灰白色(粗、堅)	ス(多) 黒色炭化粒		
145	陶器	皿	肥前系/大橋1-2期	13B10	Ⅲb	13.6			透明釉(内面と外面の口縁部にかかると)	黄灰白色(堅緻)	白色粒(僅)		見込みに胎土目
146	陶器	皿	肥前系/大橋1-2期	14B6	Ⅱ		5.0		透明釉(内面のみ)	黄灰白色(堅緻)	白色粒(僅)		見込みに胎土目
147	陶器	皿	肥前系/大橋1-2期	12B21	Ⅱ	11.8	4.4	3.4	灰釉	赤褐色(やや軟)	白色粒(少)	轆轤 削り出し高台(兜巾状)	見込み胎土目3箇所
148	陶器	碗	肥前系/大橋Ⅱ期	12B11	Ⅱ	10.2			灰釉(淡オリーブ色)	灰白色(堅)	ス(多) 白色粒(僅)		外面下半はがさつき、光沢がない
149	陶器	碗	肥前系/大橋Ⅱ期	7C10	Ⅲ				灰釉(白濁)	桃黄灰色(精良、軟)			
150	陶器	碗	肥前系/大橋Ⅱ期	14C17	Ⅱ	11.4			灰釉(やや白濁)	黄灰色(精良、軟)			漆継ぎ
151	陶器	皿	肥前系/大橋Ⅱ期	13C18	Ⅱ	13.8	4.1	4.6	灰釉(オリーブ灰色)	灰白色(緻密、やや軟)	白色粒(少)	削り高台	見込み・畳付内側に砂目
152	陶器	皿	唐津/Ⅱ期(1630~40年代)	11C10-11-16-21	Ⅱ・Ⅲ	15.9	6.5	4.0	灰釉	灰褐色(緻密 やや軟)	白色粒(僅) 削り高台	(兜巾状)高台裏砂	見込み砂目7箇所 高台裏砂目3箇所
153	陶器	丸皿	肥前系/大橋Ⅱ期	9B24	Ⅲ	14.6			灰釉(オリーブ色)	灰白色(やや軟)	ス(少)		
154	陶器	溝縁皿	肥前系/大橋Ⅱ期	16C2	Ⅲ	15.0			灰釉(淡オリーブ色)	灰白色(堅緻、精良)			
155	陶器	刷毛目碗	肥前系	14C19	Ⅱ	12.0			白化粧土刷毛塗	暗灰色	黒・白色粒(少) ス(少)		
156	陶器	刷毛目鉢	肥前系/大橋Ⅲ~Ⅳ期	13C15	Ⅱ	32.5			灰釉+白化粧土	赤褐色(やや軟、密)	ス(僅) 白色粒(少)		
157	陶器	呉器手碗	肥前系(京焼風)/大橋Ⅲ期	15	Ⅱ		4.6		透明釉	黄灰白色(やや軟)	ス(僅)		畳付内側に熔着物
158	陶器	呉器手碗	肥前系(京焼風)/大橋Ⅲ期	9B15	Ⅱ		4.9		透明釉	灰白色(堅緻)	ス(僅)		
159	陶器	碗	肥前系(内野山)	8C2	Ⅱ				銅緑釉	黄灰色(緻密、やや軟)			
160	陶器	皿	肥前系(内野山)	16B22	Ⅱ	12.9			透明釉+銅緑釉	黄灰色(粗)	ス(多)		
161	陶器	皿	肥前系(内野山)	16C20	Ⅱ		4.8		透明釉+銅緑釉	黄白色(粗)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ	
162	陶器	播鉢	肥前系	12C9	Ⅱ	38.2			鉄釉(明褐色、口縁部のみ、光沢有)	紫灰色		轆轤成形	鉦目: 11条1単位(幅2.6cm)
163	陶器	播鉢(片口)	肥前系	13B20	Ⅱ・Ⅲ	37.8			鉄釉(口縁部のみ、光沢有)	赤褐色(やや粗)	白色粒(少)	轆轤成形	鉦目: 15条1単位(幅3.8cm)
164	陶胎染付	碗	肥前系	11C17	Ⅱ		5.0		青味を帯びた透明釉	灰色(堅)	黒色粒(多)		
165	磁器	皿	肥前系	15C13	Ⅲa		6.0		透明釉	白色	黒色粒(僅)		高台内に「福」
166	陶器	丸碗	越中瀬戸/16世紀末~17世紀前半	9C11	Ⅱ	10.4			鉄釉(胴部下半は露胎)	灰白色(堅緻)	黒色粒(少)		
167	陶器	丸碗	越中瀬戸/17C初頭	11B17	Ⅱ	9.8			鉄釉	黄灰色(堅、粗)	赤色粒(僅) 長石(多) ス(多)	轆轤	
168	陶器	丸皿	越中瀬戸/17世紀前半	16C1	Ⅲb	14.0		2.9	鉄釉	灰色(堅)	長石(少)		
169	陶器	皿	越中瀬戸/17世紀前半	16C16					灰釉(白~オリーブ色 光沢無)	黄灰色(軟)	長石・黒色粒(少)		見込みに釉止め段有

陶磁器観察表 (5)

No.	種類	器種	産地/年代	出土位置	層位	口径	底径	器高	絵付/釉薬	胎土		成形(外/内)	備考
										色調(密粗)	混入物		
170	陶器	丸皿	越中瀬戸/ 16世紀末~ 17世紀前半	14C15	III b	11.0	2.	5.0	鉄釉	黄白色(軟)	長石(少)		見込みに印花
171	陶器	皿	越中瀬戸	16C14	III a				鉄釉(部分)	淡黄橙色(硬)	長石・礫・炭化粒(多)		削り出し高台 見込みに環状熔着物有
172	陶器	皿	越中瀬戸/ 17世紀前半	7C5	II				鉄釉(赤褐色)	黄灰色(やや硬)	長石・黒色粒(少)		
173	陶器	皿	越中瀬戸	13C14	III		5.6		灰釉	灰白色(堅)	長石・黒色粒・ス(少)		釉止め段
175	陶器	皿	越中瀬戸	15B8	III		5.0		灰釉(光沢無し)	赤褐色(やや粗)	長石(少)		
176	陶器	播鉢	越中瀬戸	13C6	II	26.0			鉄釉(赤褐色)内外面	赤褐色(やや粗、軟)	ス(少) 長石(多)		
177	陶器	播鉢	越中瀬戸	14B24 15C14	II・III a	26.6			鉄釉(赤褐色)	黄灰色(粗、軟)	長石・小礫(多)	口ク口明瞭	鉦目8条一単位以上
178	陶器	(片口)播鉢	越中瀬戸	12B25	II	29.0			鉄釉(赤褐色)	黄灰色(堅)	長石(多) 小礫(少)		
179	陶器	播鉢	越中瀬戸	8B13	II	28.6			鉄釉(黒褐色)	灰白~黄白色(やや硬)	長石(多) 黒・白色粒(少)		口縁部折り返し
180	陶器	陶鉢	越中瀬戸	14C3	III a	4.7(長)	3.8(幅)	3.6(厚)	鉄釉(茶褐色)	黄白色	長石(多)	指押さえ	一部自然釉
181	陶器	陶鉢	越中瀬戸	17B17	III b	4.2(長)	3.9(幅)	3.7(厚)	鉄釉(赤茶褐色)	黄灰色(堅、粗)	赤色粒・長石(少)	指押さえ	
182	陶器	陶鉢	越中瀬戸	7C14	II	3.3(長)	3.1(幅)	3.15(厚)	鉄釉	黄白色(軟)	長石(多)	指押さえ	
183	陶器	平碗	京・信楽系	15C10	III b	12.0	4.4		灰釉	黄白色			高台打ち欠き 墨書
184	陶器	陶製円板	京・信楽系	15C16	III		3.8		灰釉	黄白色			墨書
185	陶器	坏	京・信楽系	7B19	II		2.8		灰釉	黄白色			墨書
186	陶器	碗	関西系	15C8・24	III		4.2		灰釉	黄白色(堅 やや粗)		貼り付け高台	疊付付近に熔着物
187	陶器	小坏		14C3	III b	5.8	2.8	3.3	鉄釉(胴部下半をのぞく)	灰色(堅緻)			底部糸切り

銭貨観察表

No.	銭貨名	出土位置	層位	外径縦(mm)	外径横(mm)	内径縦(mm)	内径横(mm)	銭厚(g)	重量(g)	備考
188	景德元寶	3C11	SK1	24.5	24.5	17.9	17.7	1.0	3.2	
189	景德元寶	3C11	SK1	24.9	24.7	18.7	18.4	1.2	3.4	
190	熙寧元寶	3C12	SK1	23.8	23.8	18.9	19.8	0.6	1.6	銭33
191	元豐通寶	3C12	SK1	24.1	23.7	17.8	17.7	1.0	3.0	
192	元祐通寶	3C12	SK1	23.2	23.5	18.1	19	1.2	3	銭13
193	開禧通寶	3C11	SK1	24.3	24.0	20.0	19.9	1.0	3.2	背二
194	寛永通寶	3C6	P3	24.4	24.4	19.6	19.8	1.1	3.4	銭20
195	寛永通寶	3C12	P5	24.3	24.3	20.1	19.7	0.9	2.8	銭27
196	寛永通寶	3C12	P5	24.1	24	19.2	19.4	1.2	3.9	銭32
197	咸平元寶	14B24	III b	23.7	23.9	18.7	18.7	1.0	2.8	
198	祥符元寶	3C11	II	24.4	24.5	17.2	18.0	0.9	3.4	
199	祥符通寶	-	-	24.5	24.5	19.3	19.2	1.0	3.5	出土位置不明
200	天禧通寶	3C11	II	24.8	24.9	21.0	19.5	0.8	2.7	
201	天聖元寶	14C8	III b	25.1	25.2	22.0	21.7	0.7	2.7	
202	皇宋通寶	3C11	II	24.0	24.1	20.8	20.9	1.1	3.4	
203	皇宋通寶	2C5	II	24.3	24.0	20.6	20.6	0.9	2.4	
204	至和元寶	12C7	III	23.2	23.6	18.7	18.7	0.8	2.3	
205	嘉祐元寶	2C13	II aとII bの間	23.4	23.4	18.4	18.5	1.3	3.3	
206	嘉祐通寶	13C13	III b	24.0	24.0	20.1	19.8	0.7	2.4	
207	熙寧元寶	12C3	II	23.7	23.8	20.2	20.1	1.1	3.1	
208	熙寧元寶	12C9	II	24.0	23.8	18.0	18.0	1.0	2.6	
209	元豐通寶	3C11	II	24.8	24.8	19.2	18.4	1.0	3.0	
210	元祐通寶	3C11	II	23.4	23.4	18.4	18.7	1.0	3.0	
211	元祐通寶	8C12	III	24.5	24.1	20.2	19.8	1.1	3.6	
212	紹聖元寶	-	-	23.4	23.6	18.0	18.5	1.0	2.9	出土位置不明
213	聖宋元寶	3C11	II	23.8	23.9	19.1	19.0	0.6	2.2	
214	政和通寶	14C18	自然流路	24.0	24.0	20.8	20.4	1.1	2.9	
215	嘉泰通寶	7C10	II	23.6	23.3	20.4	19.7	1.0	2.4	背四
216	永樂通寶	15C6	III b	24.5	24.6	20.9	20.9	1.0	3.7	
217	寛永通寶	3C11	II	24.0	24.0	19.5	19.7	1.1	3.2	古寛永
218	寛永通寶	-	-	24.9	24.9	20.1	20.3	1.0	3.2	文銭
219	寛永通寶	2B25	II	23.2	23.1	19.4	19.3	0.7	2.0	
220	寛永通寶	5C1	II	27.7	27.7	20.4	20.5	0.9	4.1	背十一波
222	無文銭	13C14	-	22.3	22.5	-	-	0.4	1.9	内径測量不能

石器観察表

No.	種別	出土位置	層位	法量(mm)			重量(g)	石材	備考
				長さ	幅	厚さ			
223	磨製石斧未製品	S K 7	I	17.4	10.7	5.5	1196.2	蛇紋岩	
224	不定形石器	S K 8	I	8.1	5.3	2.3	68.6	流紋岩	
225	打製石斧	7C9	II	14.4	8.9	2.4	386.7	結晶偏岩	
226	打製石斧	11B21	II	14.1	8.6	1.8	200.3	砂岩	
227	磨製石斧	1区		9.5	5.7	2.4	252.9	蛇紋岩	
228	磨製石斧	4B25	III	8.0	5.9	3.0	193.0	蛇紋岩	
229	磨製石斧	1B25	III	10.3	4.7	1.9	168.4	蛇紋岩	
230	磨製石斧	7B25	II	7.1	5.0	1.6	91.3	蛇紋岩	
231	磨製石斧	2C13	II b	4.9	4.1	1.7	35.5	蛇紋岩	
232	磨製石斧	1B20	I b	7.8	4.0	3.3	121.5	蛇紋岩	
233	礫器	7C4	II	7.5	6.3	2.5	138.8	砂岩	
234	剥片石器	12B21	II	5.4	3.6	1.1	15.6	黒曜石	
235	筋砥石	2B6	I b	12.8	11.2	9.4	1462.9	砂岩	
236	敲石	8C7	III	5.6	5.0	3.8	160.6	硬玉	
237	敲石	17C6	IV b	9.5	8.3	5.2	436.9	安山岩	スタンプ形石器
238	磨石	18B18	III	6.4	6.1	4.1	188.2	安山岩	
239	硯	8C8	III	5.7	5.5	1.5	53.2	粘板岩	
240	硯	18C6	III	4.8	8.4	2.2	121.3	粘板岩	
241	硯	16B24	III b	5.4	5.4	0.8	28.2	粘板岩	
242	暖房具	10 C 8	II	7.6	5.0	3.1	50.7	凝灰岩	
243	石鍋	4 A 17	II				122.3	滑石	最大径：21.0cm
244	石鍋	14 B 22	III b				90.7	滑石	口径20.0m 16世紀
245	石臼	3 B	I				495.9	安山岩	直径15.8m
246	砥石	2C16	II	12.0	5.7	4.5	380.4	砂岩	
247	砥石	18B18	II	12.7	6.0	5.1	575.1	砂岩	

木製品観察表

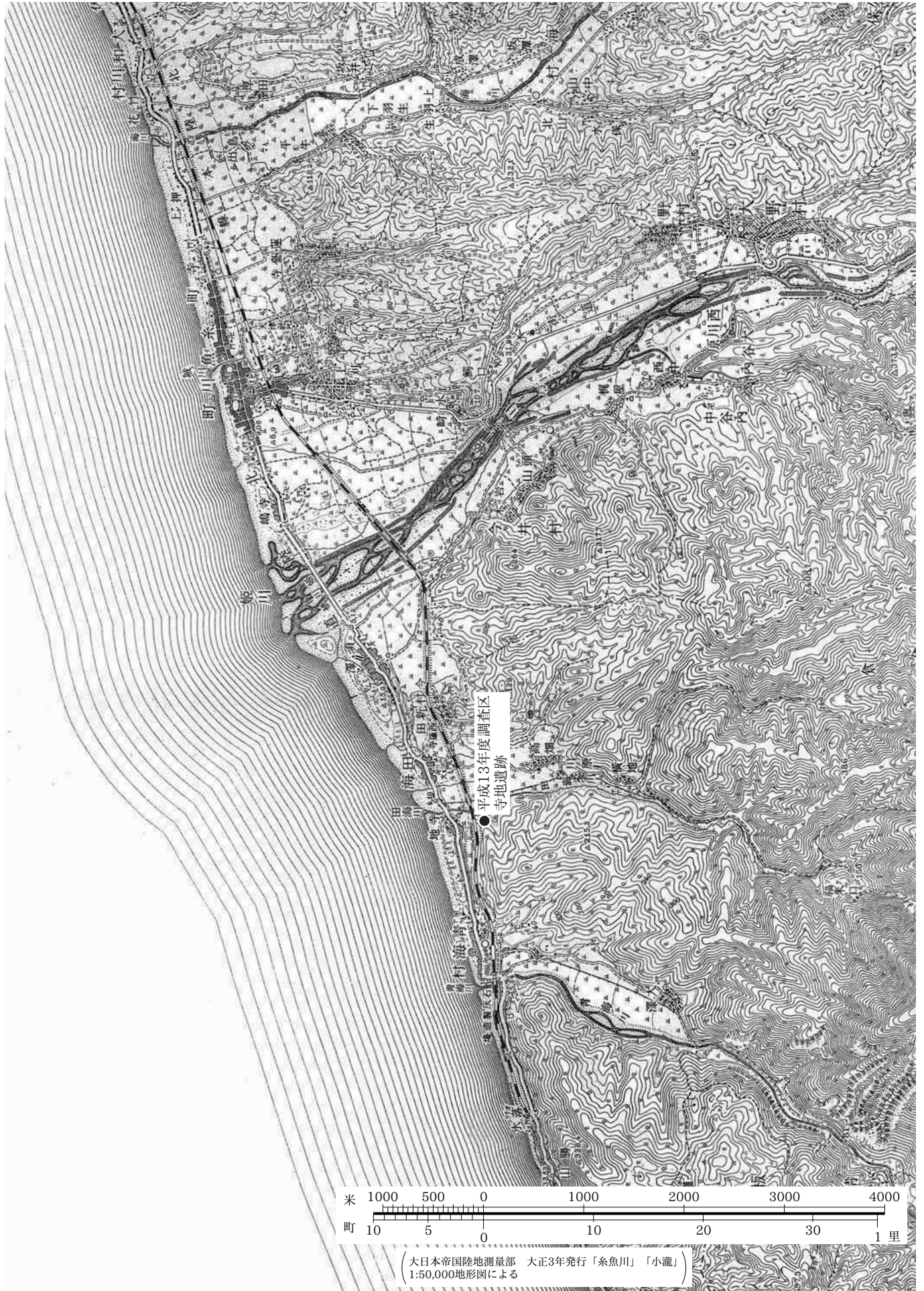
No.	出土位置	層位	分類	長さ	幅	厚さ	レベル	木取り	樹種	備考
248	15C18	III b	舟形木製品	17.2		2.1	7.562	板目		
249	15B13	III	舟形木製品	7.4	1.7	1.0	7.693	割材1/2		
250	14B13	III b	漆器 椀				7.618	横木取り		底径6.8cm
251	11B4	III	漆器 椀				7.574	横木取り		底径7.1cm、内面：黒漆に赤漆で施文
252	15B11	III	箸	20.0	0.6	0.6	7.557	板目		
253	14C13	III	箸	21.6	1.0	1.0	7.510	柃目		
254	SX251	I	箸	19.8	0.9	0.5		柃目		
255	14C13	III	箸状木製品	23.4	1.0	1.0	7.564	柃目		
256	13C17	III	底板	19.2	5.1	1.5		板目		直径23.8cm、側面に木釘
257	12B11	III b	底板	5.8	3.2	0.6		板目		直径5.6cm
258	9C20	III	曲物側板		5.5	0.5	7.608	板目		
259	13C13	III	刷毛	12.1	4.6	1.1		板目		
260	9C20	III	木針	14.0	1.1	1.0	7.608	芯持材		直径7cmの円孔
261	13C8	III b	荘厳具					板目		黒漆+金箔
262	15C16	III b	装飾品	5.6	3.7	0.3	7.499	柃目		菱形
263	18B9	III	部材		2.8	1.9	8.352	板目		
264	14B8	III b	装飾品	7.3	3.8	0.9	7.640	柃目		孔2箇所
265	17C22	III	部材(支脚か)		4.6	1.8	7.722	斜目		
266	16C11	III b	柿板	16.3		1.0	7.649	板目		両側欠損
267	15C14	III b	垂木		4.9	2.8	7.568	芯持材		下方欠損
268	16B21	III b	内壁			1.7	7.715	板目		
269	15B14	III b	棧	14.9	2.9	1.5	7.814	板目		一部焼失
270	18C20	III	鈎				7.565	芯持材		
271	12C8	II	下駄	16.0	1.7			板目		連齒下駄
272	14B21	II	1号木筒	28.0	4.1	0.4		柃目		「□口納七斗入向山孫左衛門」
273	14C9	III a	2号木筒	15.4	2.1	1.0	7.722	板目		「ひうち」

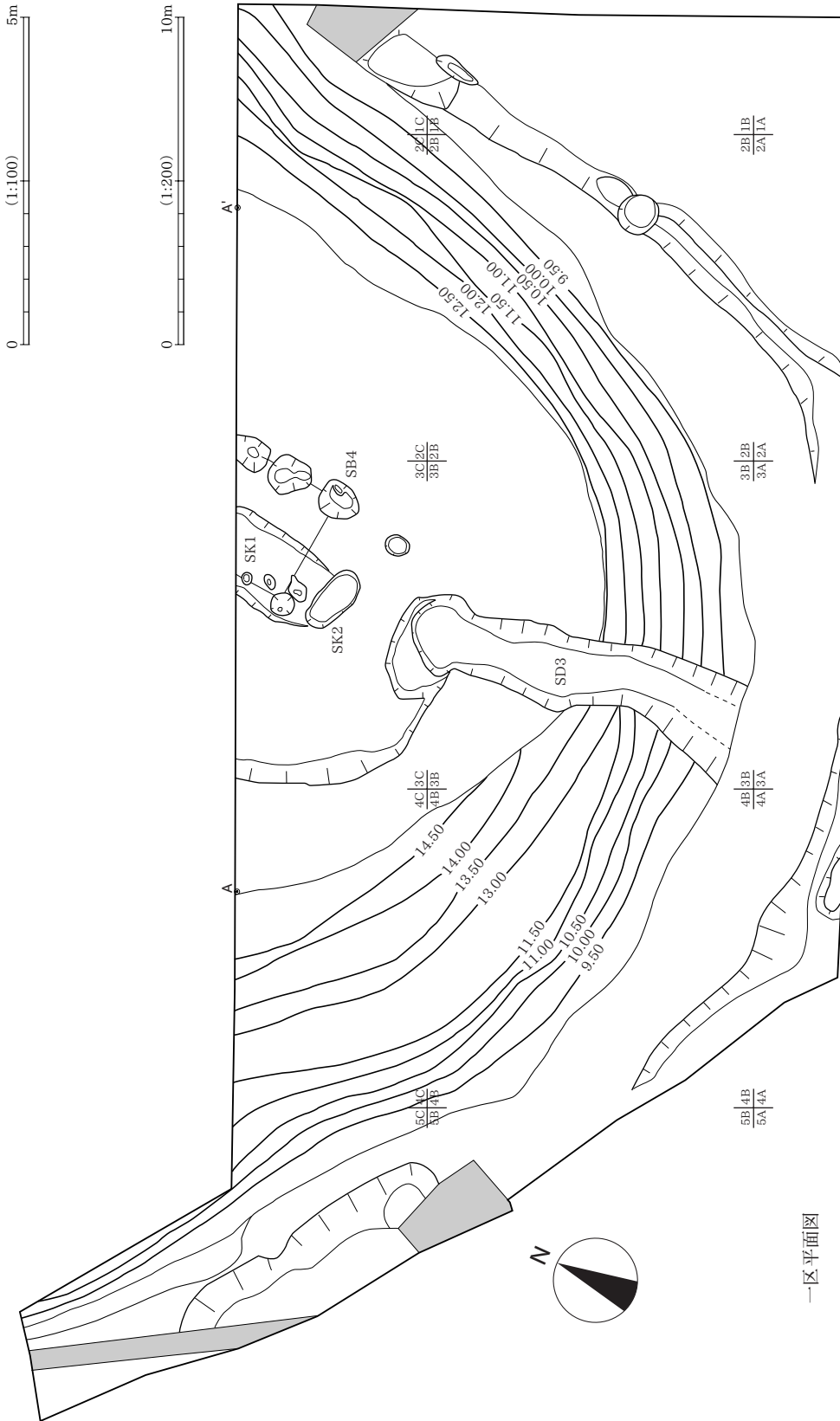
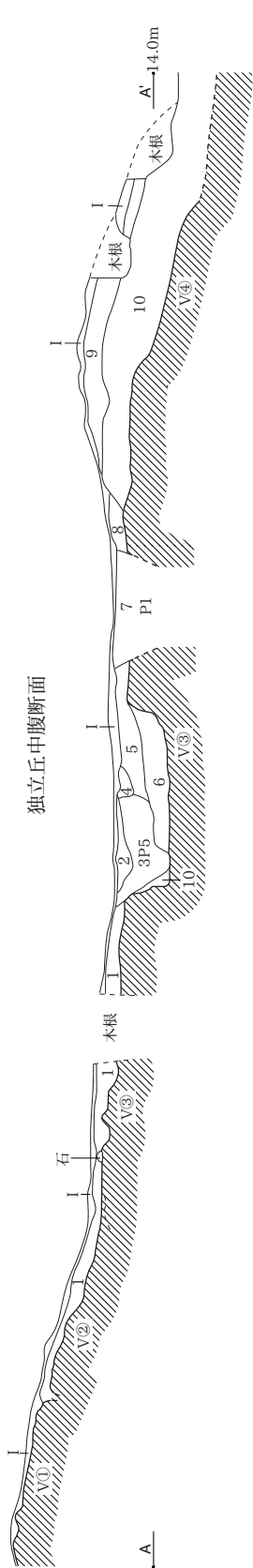


# 図 版

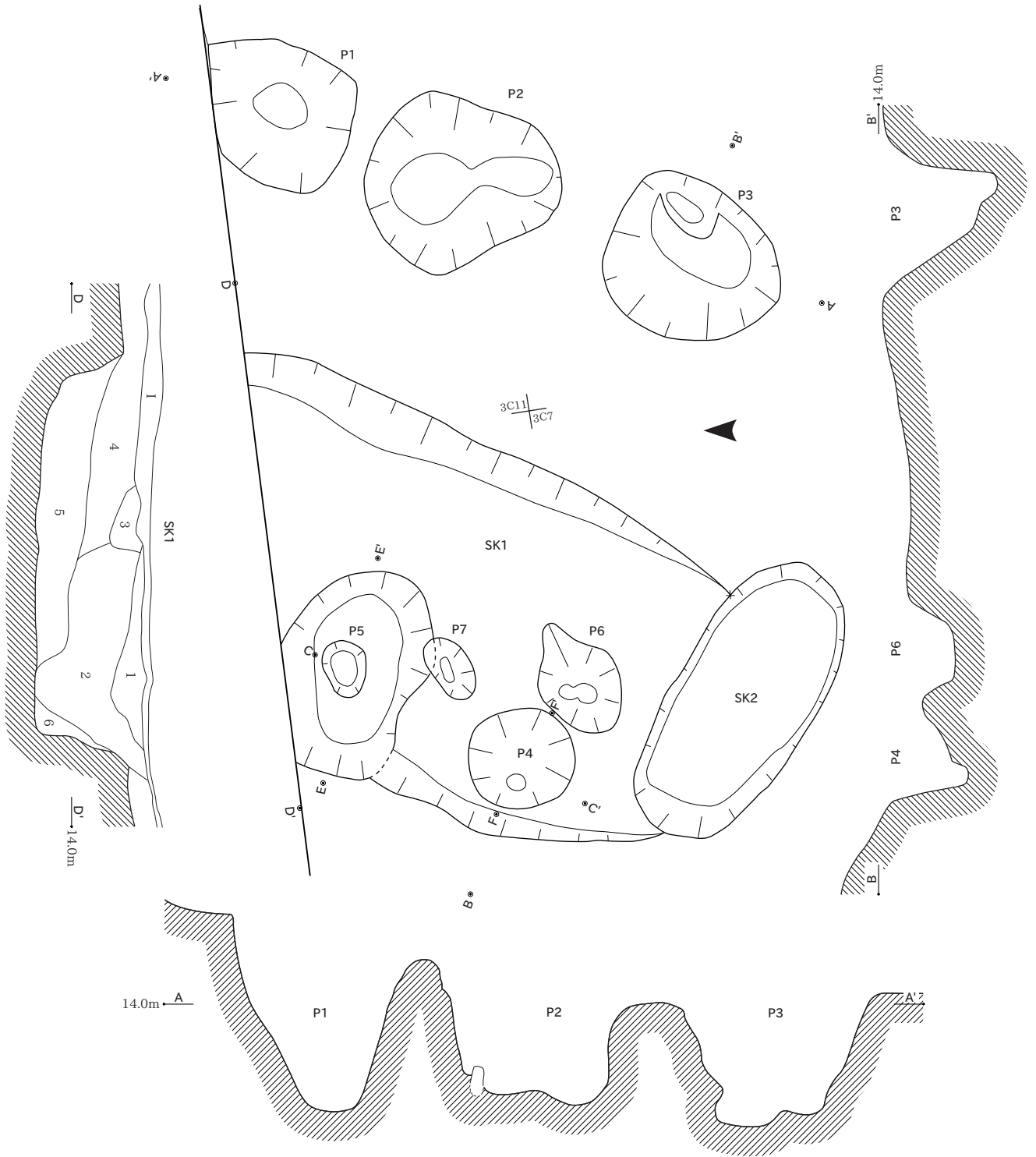
## 凡 例

- 1 遺構・遺物実測図の縮尺は、各図版に示した
- 2 実測図の拓本は  
縄文時代：断面の左方に土器の外表面を、右方に土器の内面を示す。  
古代以降：断面の左方に土器・陶磁器類の内面を、右方に土器・陶磁器類の外表面を示す。





- 独立丘層序
- 1層 表土(黒褐・10YR3/2)シルト。しまりやや弱く、粘性は弱い。ごく少量の炭化物を含む。植物の根を多量に含む。
- V層 地山 場所により色調・しまり・粘性・含有物が以下のように異なる
- ① 明褐(7.5YR5/6)シルト。しまりはやや強く、粘性は弱い。砂利をごく少量含む。
  - ② にぶい黄褐(10YR5/4)シルト。しまりはやや弱く、粘性もほとんどない。ところどころに砂礫を含む。炭化物を少量含む。しまりは弱く、粘性もほとんどない。ところどころに砂礫を含む。
  - ③ 黄褐(10YR5/6)細砂。しまりは弱く、粘性もほとんどない。
  - ④ 黄褐(10YR5/6)細砂。しまりは弱く、粘性もほとんどない。
- 1層 褐(10YR4/6)シルト。しまりはやや弱く、粘性も弱い。砂利と炭化物をごく少量含む。3C9で中世のカワラケが出土。
- 2層 暗褐(7.5YR3/1)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。炭化物を少量含む。
- 3層 黒褐(10YR3/1)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。
- 4層 暗茶褐(10YR3/3)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。
- 5層 種暗褐(7.5YR2/3)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。
- 6層 暗褐(10YR3/4)シルト。しまりは弱く粘性もほとんどない。砂礫をごく少量含む。
- 7層 黒褐(10YR2/2)シルト。しまりはやや弱く、粘性も弱い。植物の根を多量、砂礫・炭化物を少量含む。
- 8層 暗褐(10YR3/3)シルト。しまりはやや弱く、粘性も弱い。ごく少量の砂礫・炭化物を含む。
- 9層 褐(2.5YR4/6)シルト。しまりはやや弱く、粘性も弱い。ごく少量の砂礫・炭化物を含む。近世陶器(越中瀬戸焼)出土。
- 10層 暗褐(10YR5/6)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。ところどころに砂礫を含む。中世のカワラケ出土。



SK1

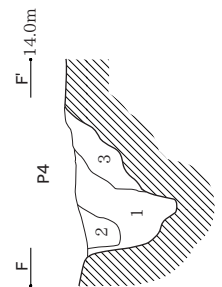
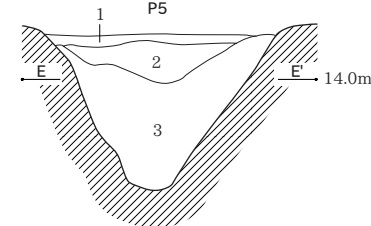
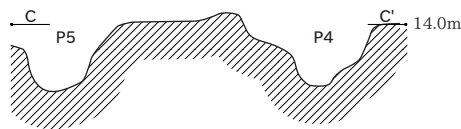
- 1 暗褐(7.5YR3/1)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。炭化物を少量含む。
- 2 黒褐(10YR3/1)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。
- 3 暗茶褐(10YR3/3)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。
- 4 極暗褐(7.5YR2/3)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。
- 5 暗褐(10YR3/4)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。砂礫をごく少量含む。
- 6 暗褐(10YR5/6)シルト。しまりは弱く、粘性もほとんどない。ところどころに砂礫を含む。中世のカワラケ出土。

P5

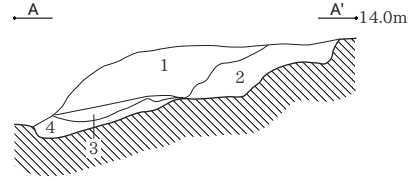
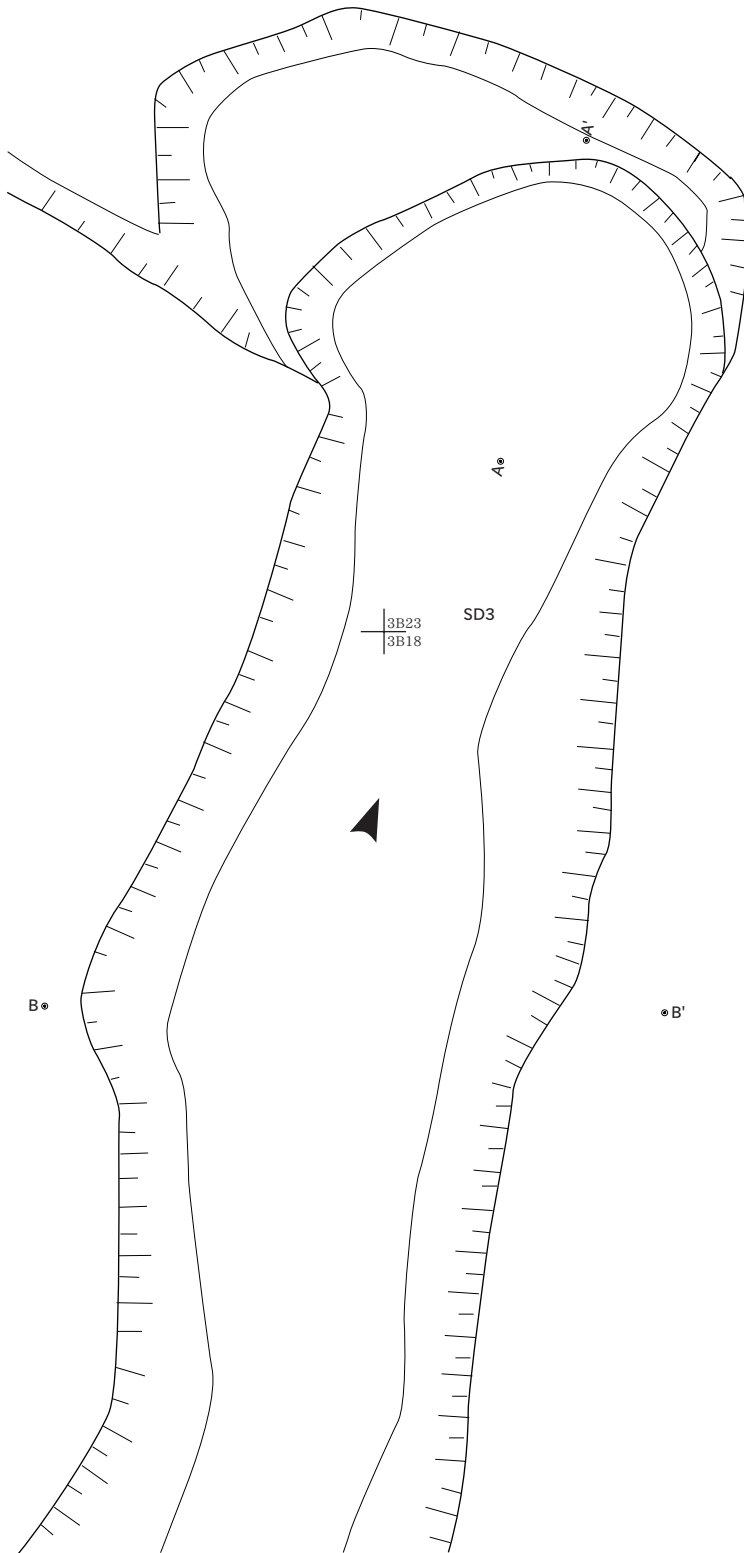
- 1 黒褐(10YR3/2)シルト。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
- 2 暗褐(7.5YR3/5)シルト。炭化物、植物痕を少量含む。しまりは弱く、粘性はない。
- 3 黒褐(10YR3/1)シルト。炭化物を少量含む。しまりは弱く、粘性はない。

P4

- 1 暗褐(10YR4/3)シルト。しまり弱く、粘性はない。
- 2 暗褐(10YR4/3)シルト。炭化物を少量含む。しまり弱く、粘性はない。
- 3 褐色(10YR4/6)シルト。しまり弱く、粘性はない。

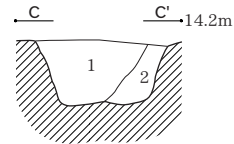
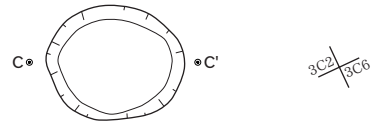


0 (1:40) 2m



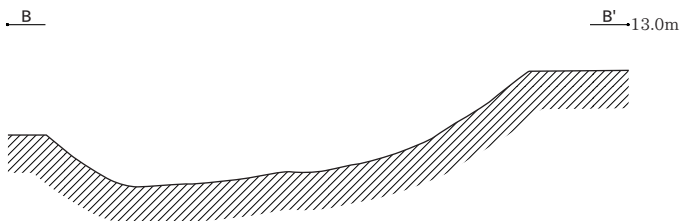
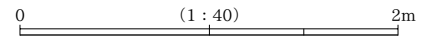
SD3

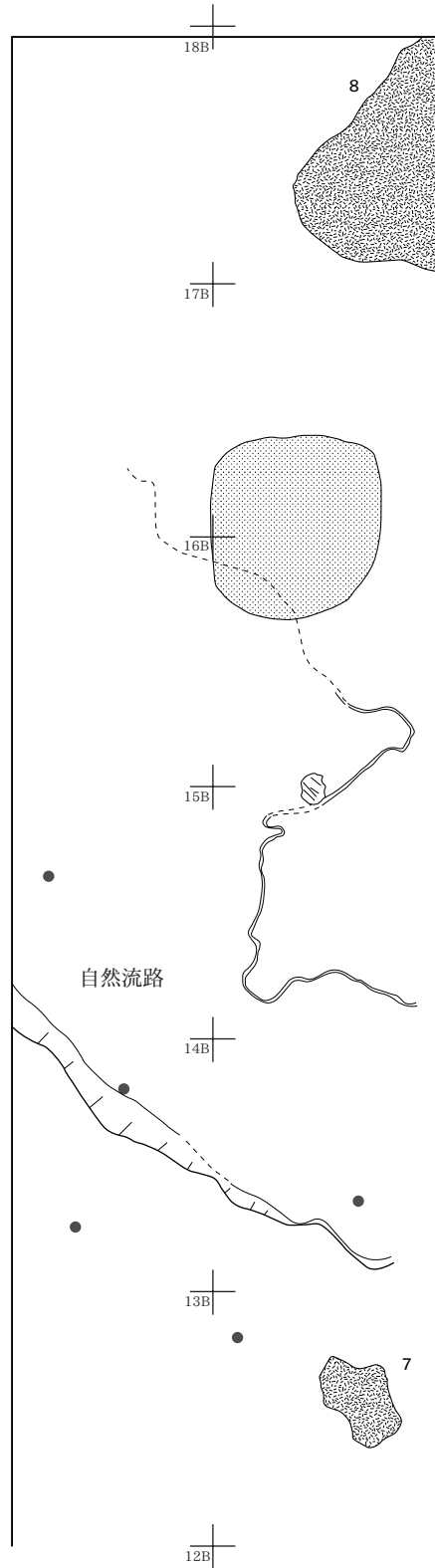
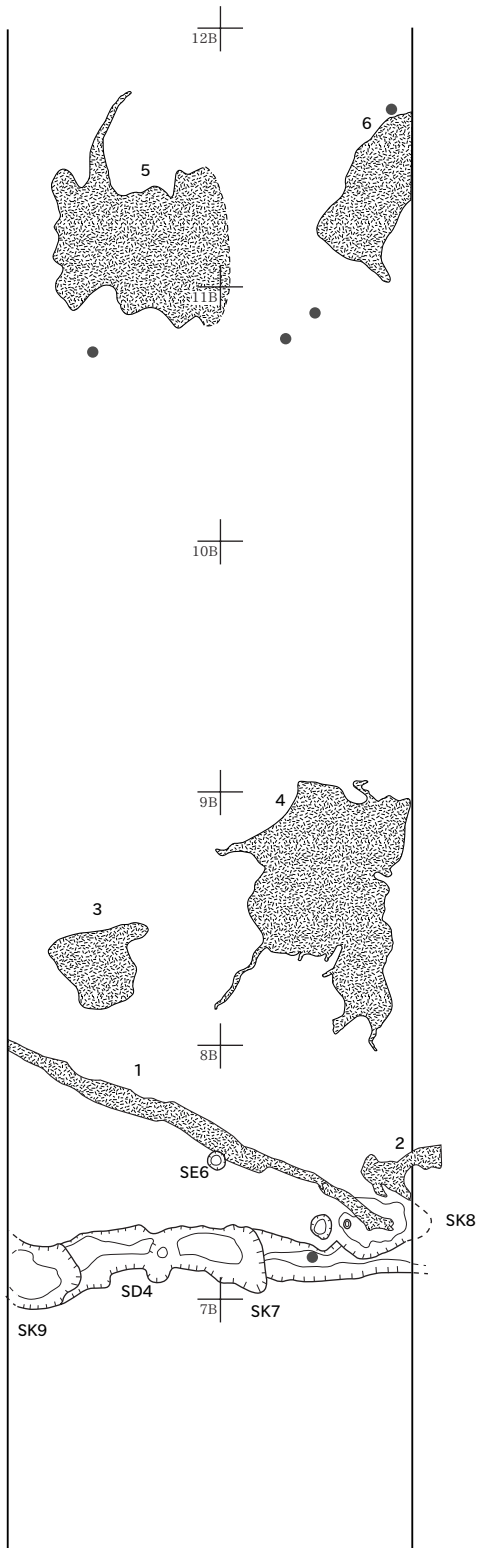
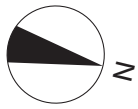
- 1 褐(10YR4/4)シルト。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
- 2 茶褐(10YR4/6)シルト。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
- 3 黄褐(10YR5/6)細砂。しまりは弱く、粘性はない。
- 4 黄褐(2.5YR6/5)礫。しまりは弱く、粘性はない。



P8

- 1 茶褐(10YR4/6)シルト。しまりはやや弱く、粘性は弱い。
- 2 褐(10YR4/4)シルト。しまりはやや弱く、粘性は弱い。

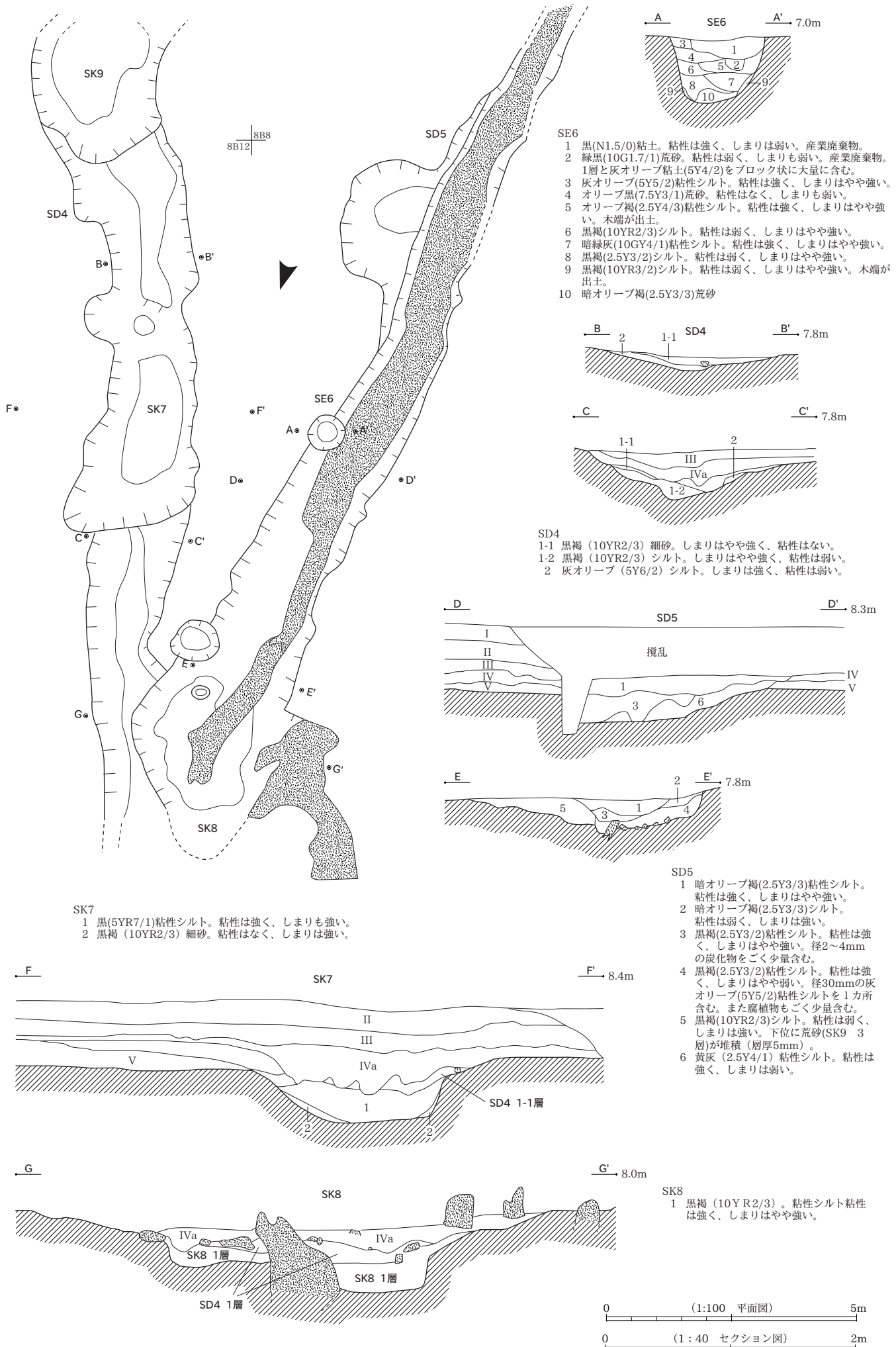


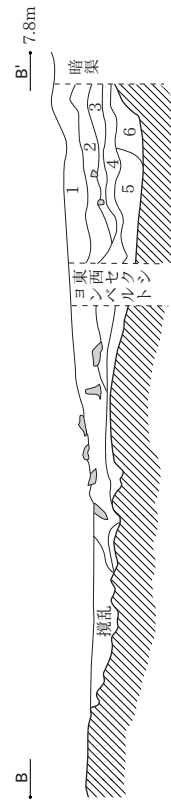
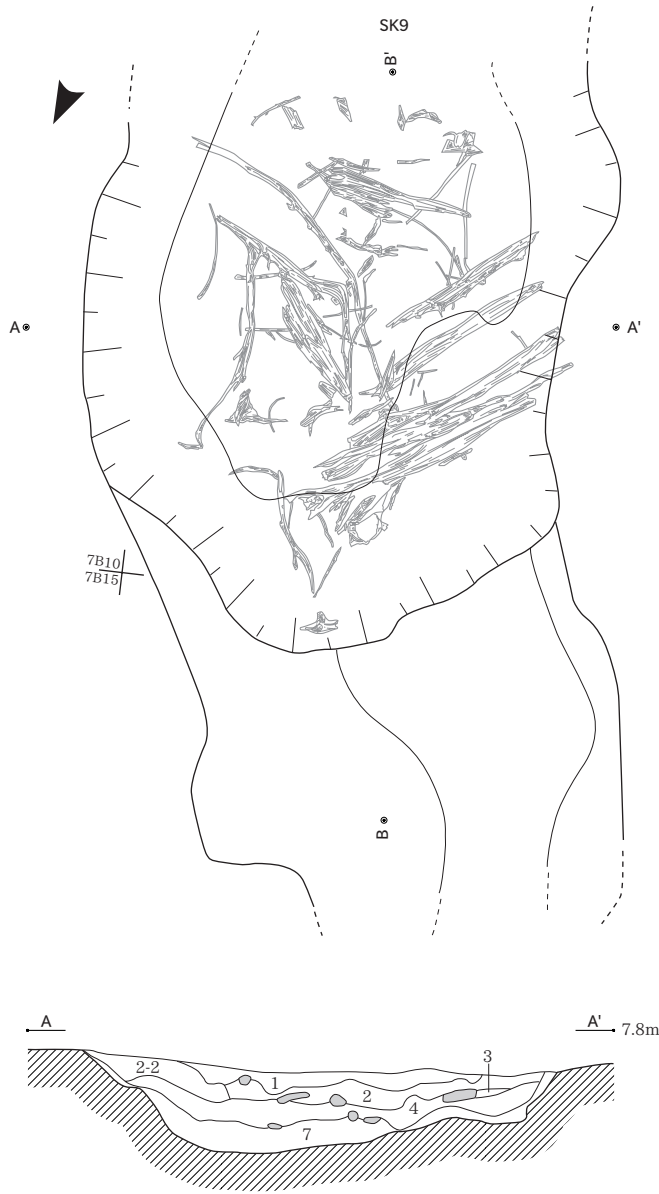


凡例

- 埋没林 (根)
- 埋没林・倒木 (切断痕あり) ●
- 縄文土器集中

0 (1 : 300) 10m



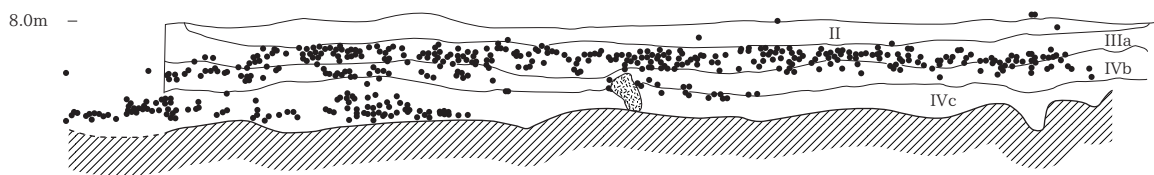
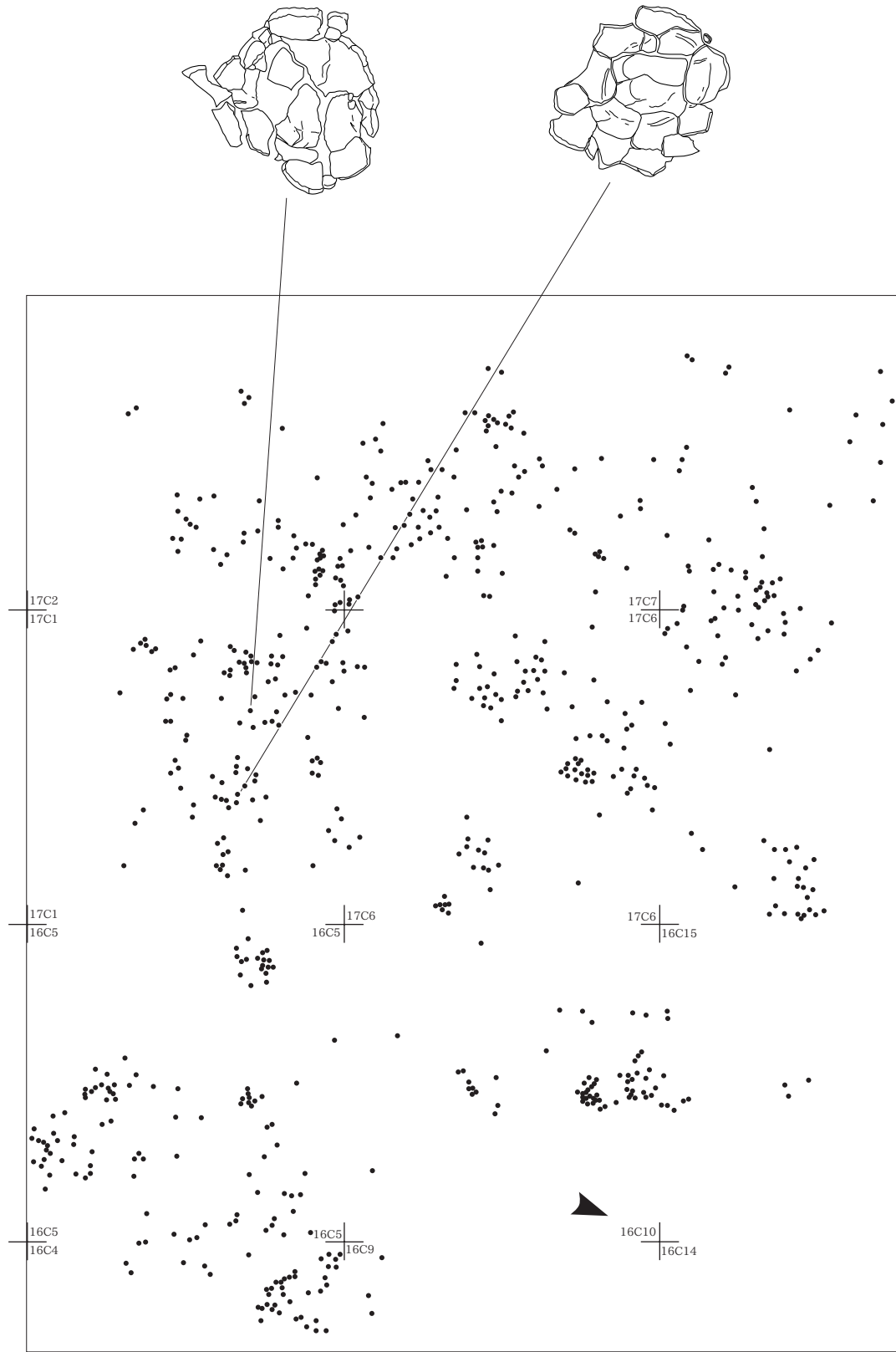


SK9

- 1 黒褐(2.5Y3/2)シルト。しまりは強く、粘性は弱い。径2~3mmの炭化物や腐植物がごく少量混じる。
- 2 黒褐(10YR3/2)シルト。しまりはやや強く、粘性は弱い。腐植物がごく少量混じる。
- 2-2 暗オリーブ褐(2.5Y3/3)シルト。腐植物が少量混じる。しまりはやや弱く、粘性も弱い。
- 3 黒褐(10YR2/3)細砂。しまりは強く、粘性はない。
- 4 黒褐(10YR2/3)シルト。しまりはやや強く、粘性は弱い。有機層。
- 5 暗灰黄(2.5Y5/2)シルト。しまりはやや強く、粘性は弱い。
- 6 黒(10YR2/1)シルト。しまりはやや強く、粘性は弱い。
- 7 黒褐(2.5Y3/2)シルト。しまりはやや強く、粘性は弱い。

0 (1:40) 2m



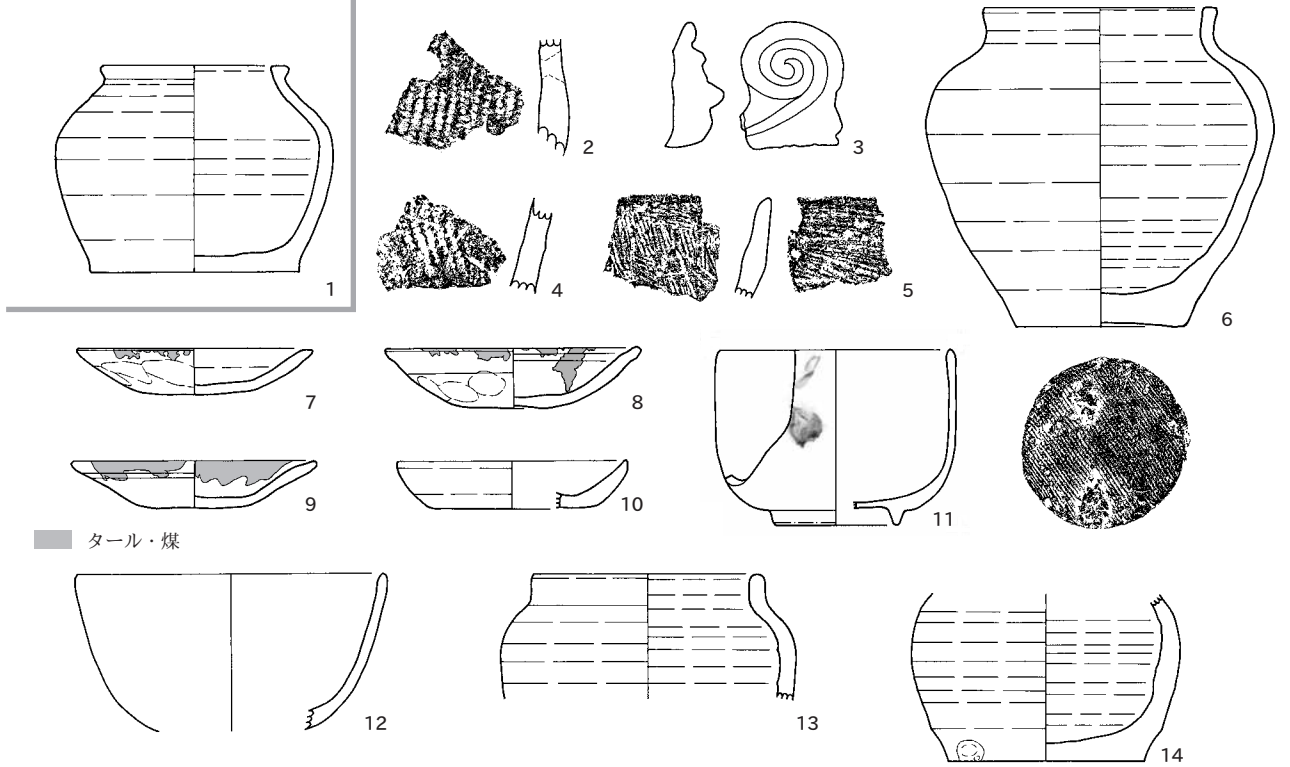


0 (1:10遺物微細図) 40cm

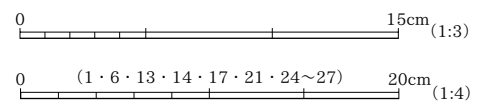
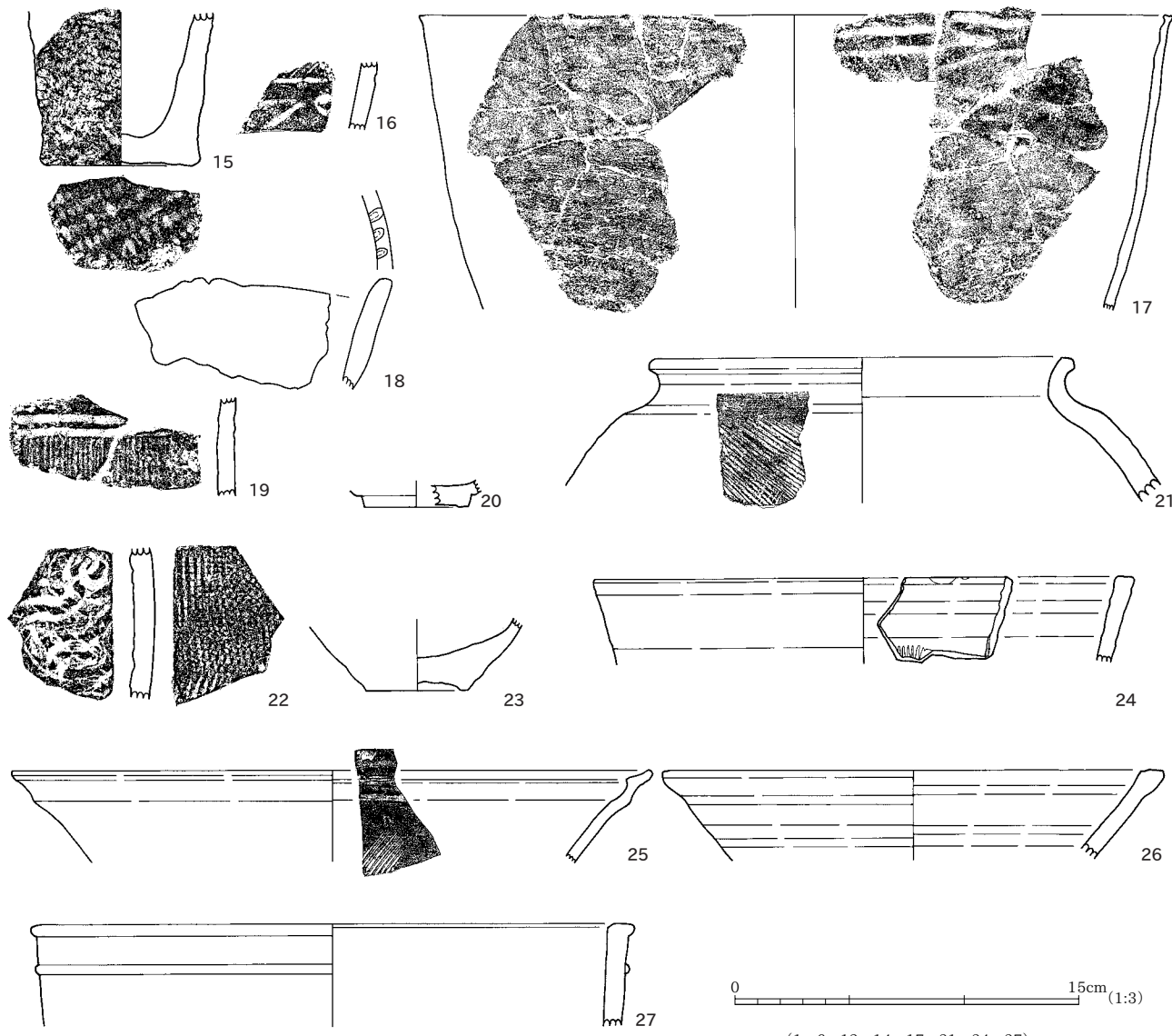
0 (1:40遺物出土分布図) 2m

SB4

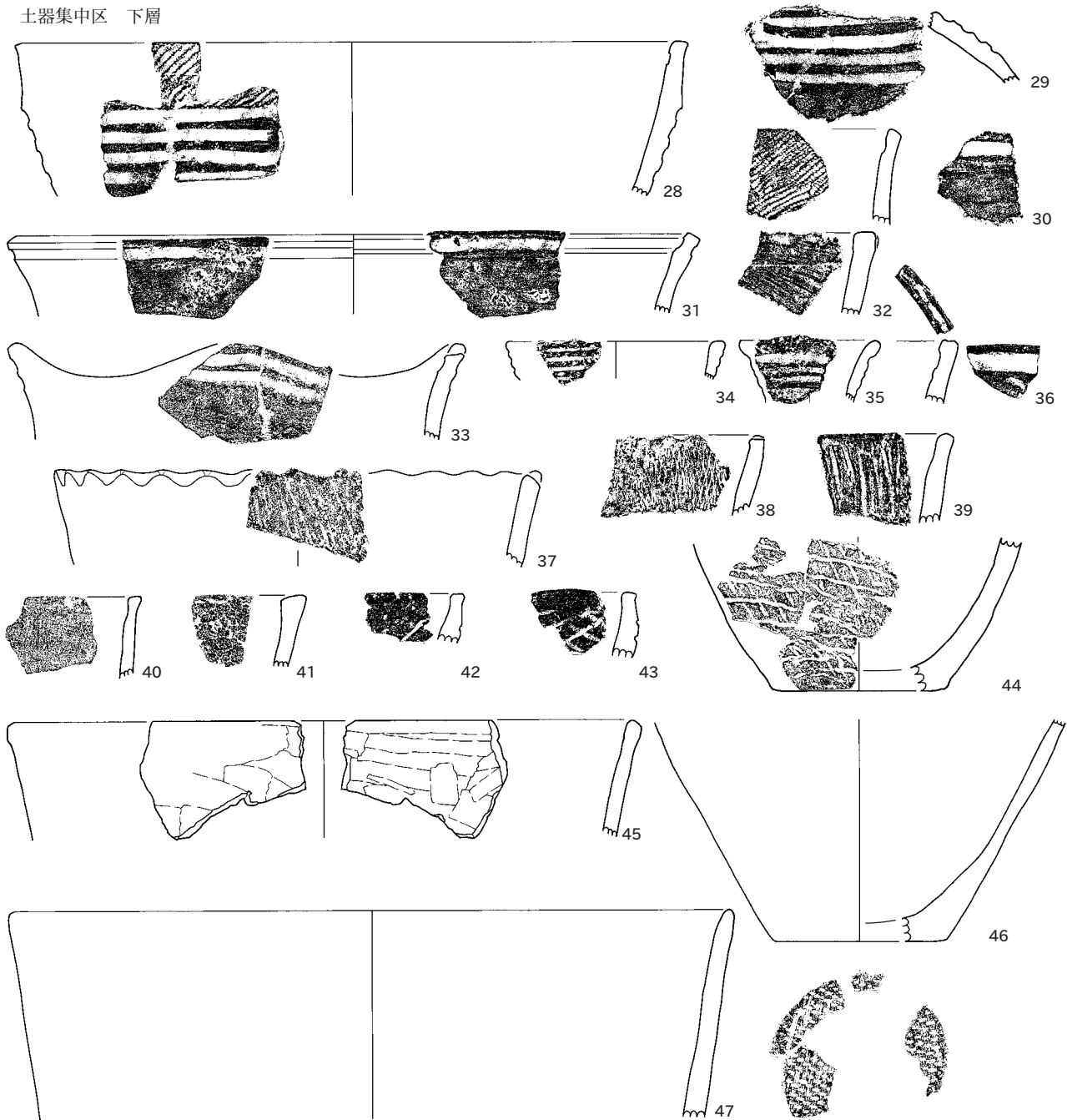
平坦部



裾野

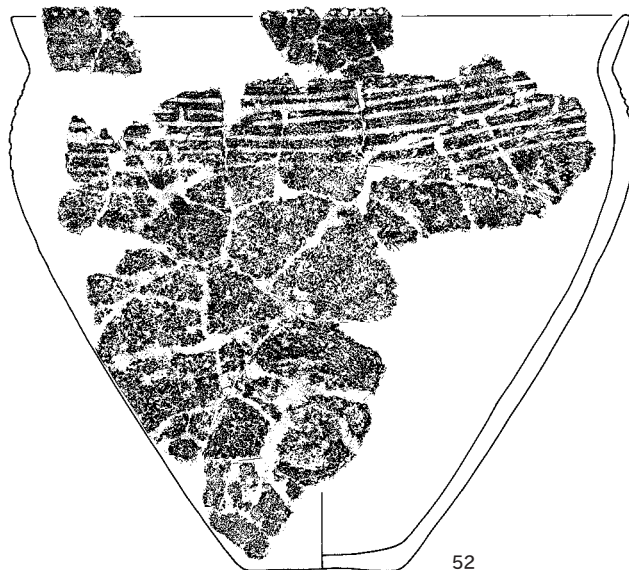


土器集中区 下層

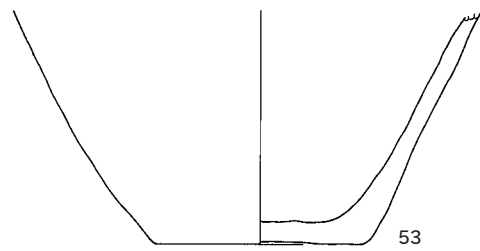


土器集中区 上層

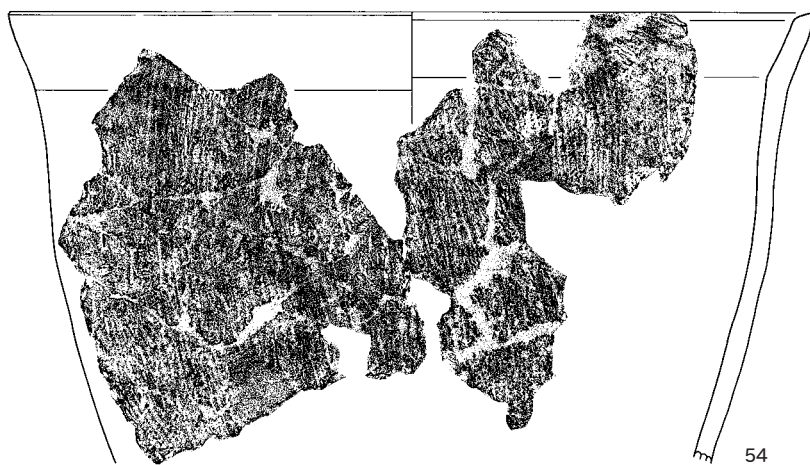
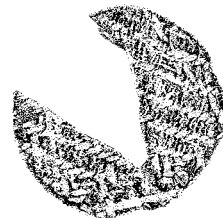




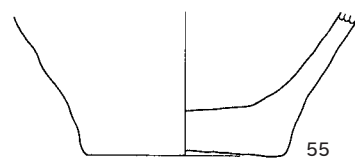
52



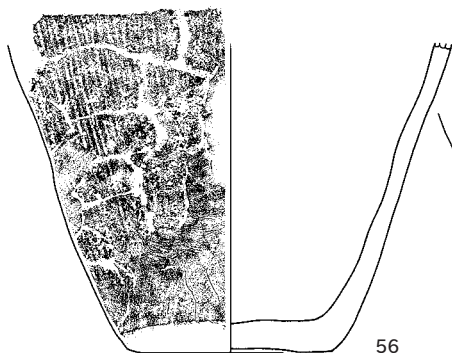
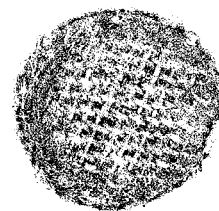
53



54



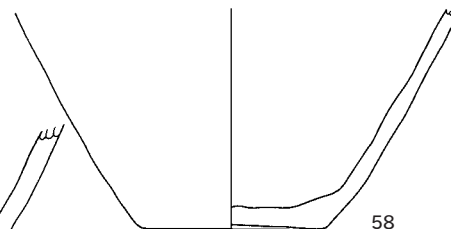
55



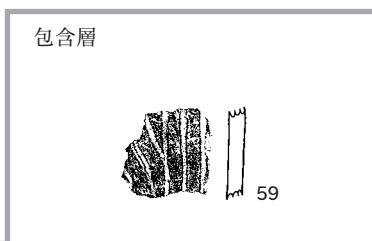
56



57



58



包含層

59



60



61



62



63



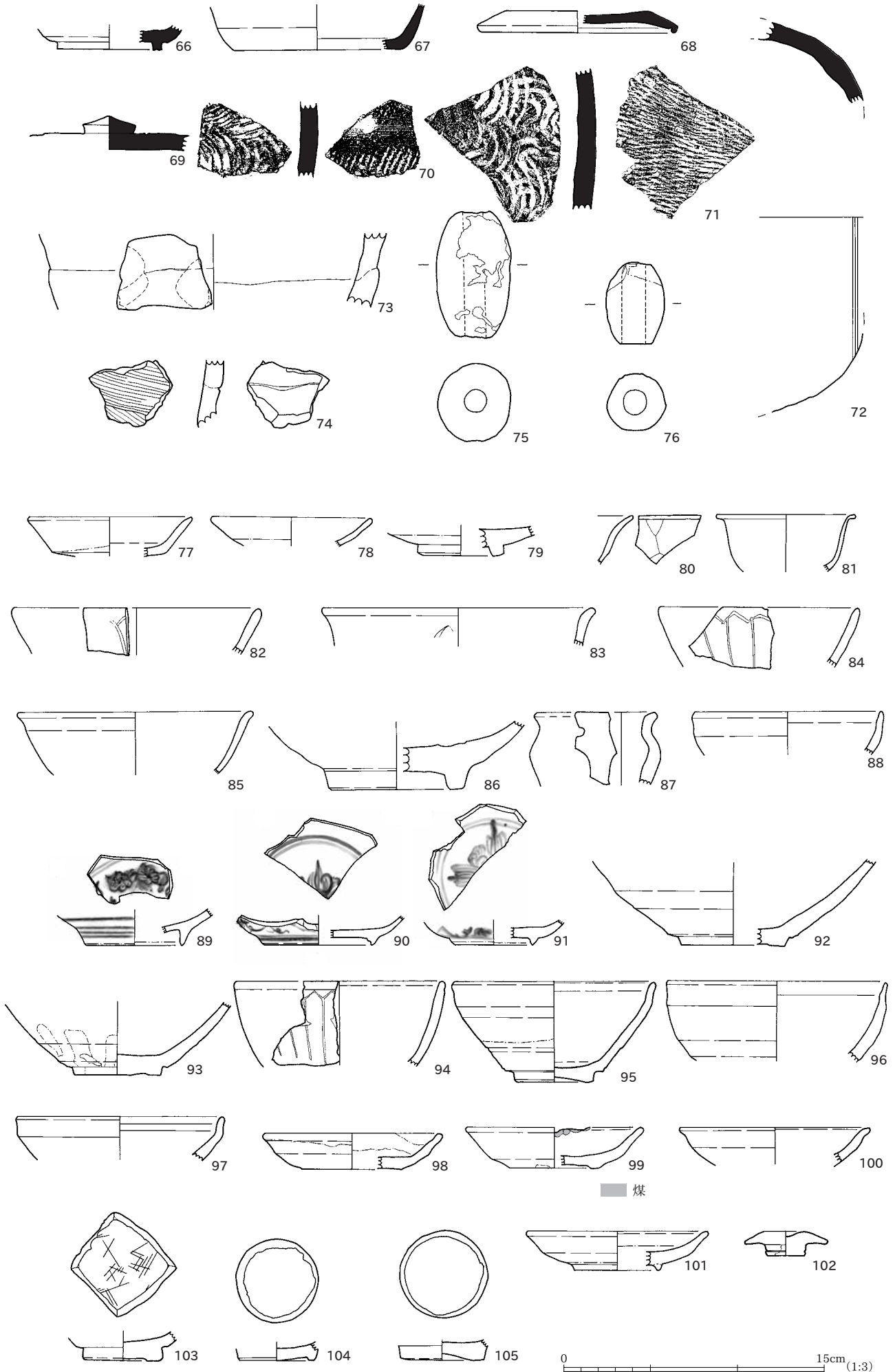
64

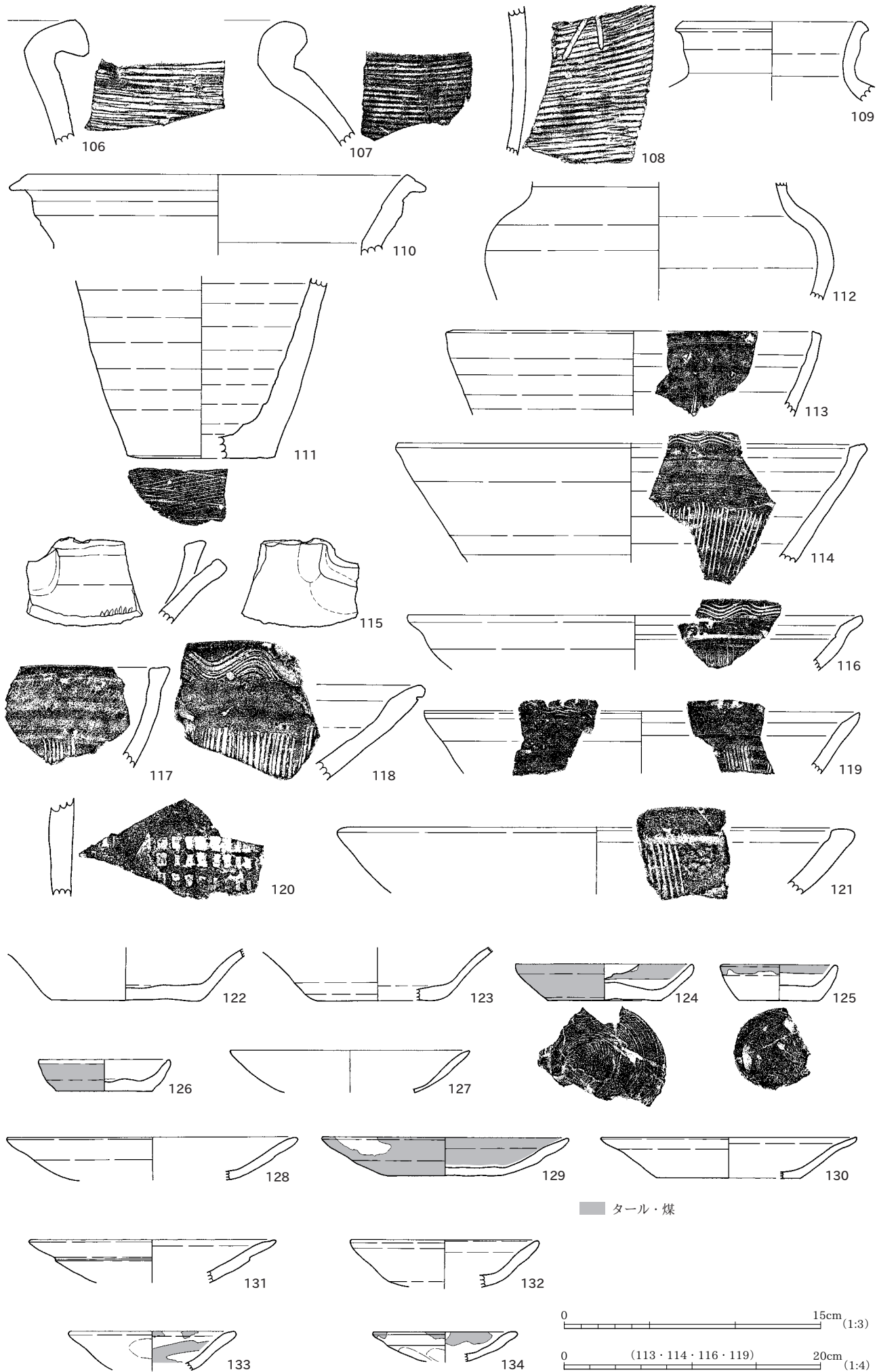


65

0 15cm (1:3)

0 (52 · 53 · 55~58) 20cm (1:4)





106

107

108

109

110

112

111

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

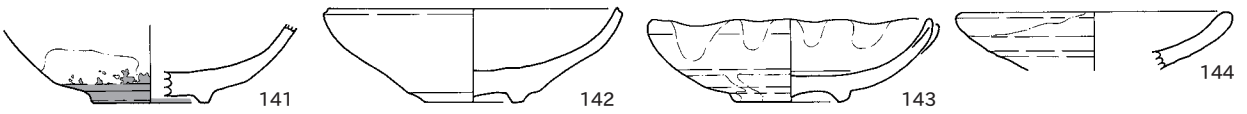
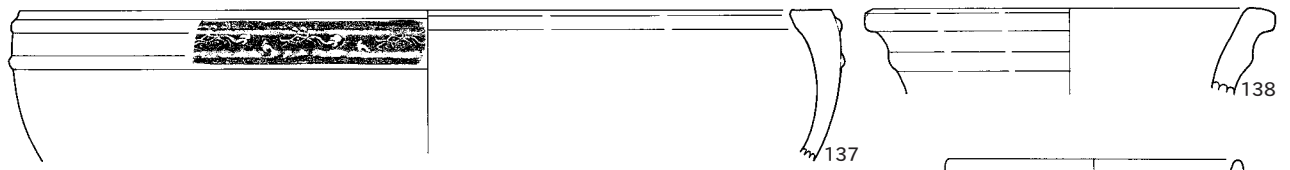
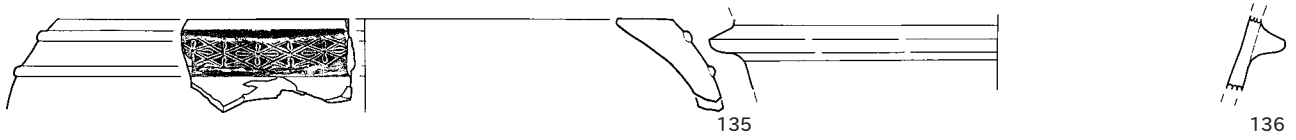
133

134

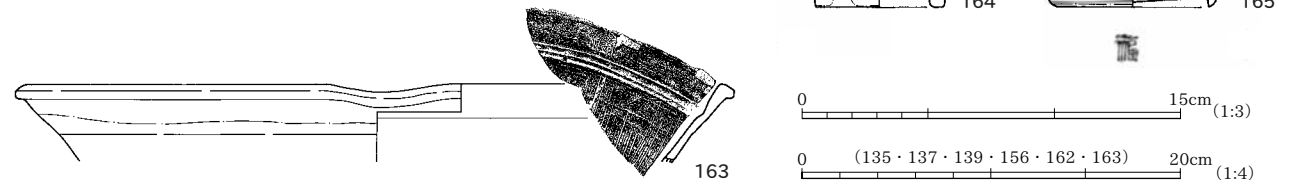
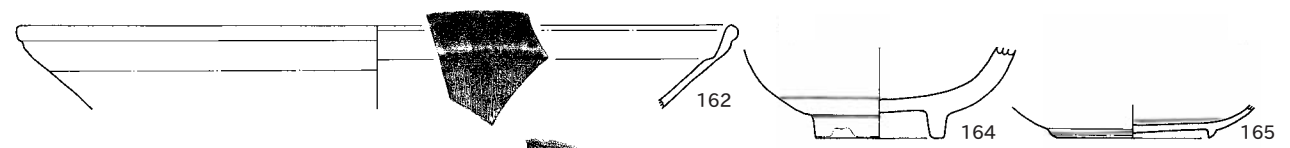
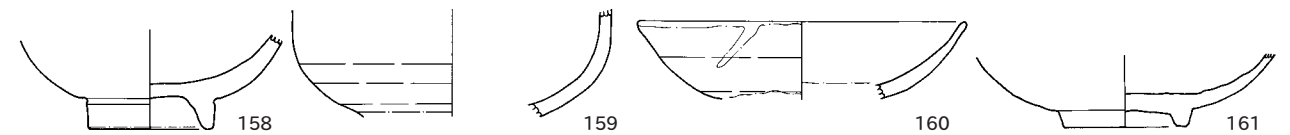
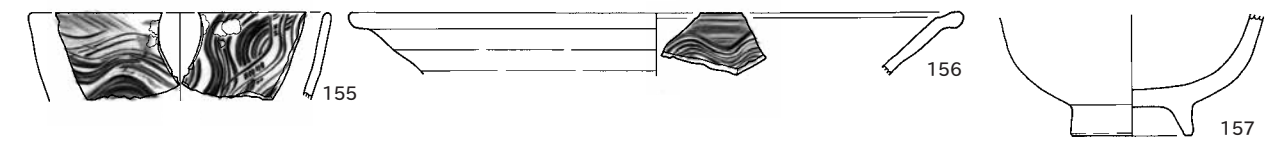
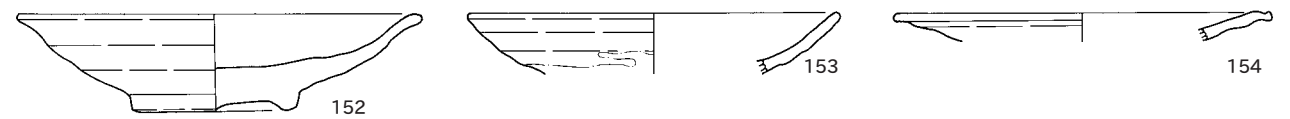
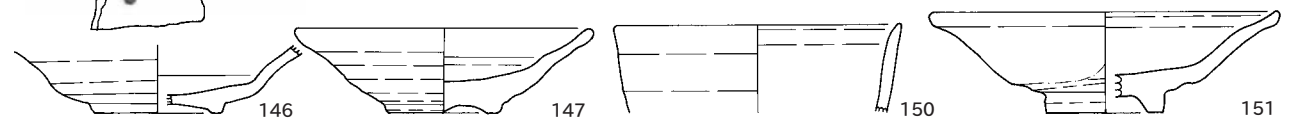
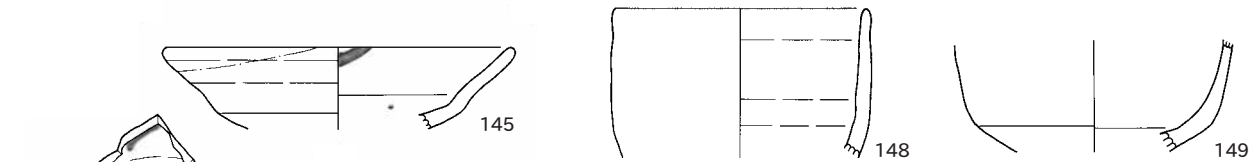
タール・煤

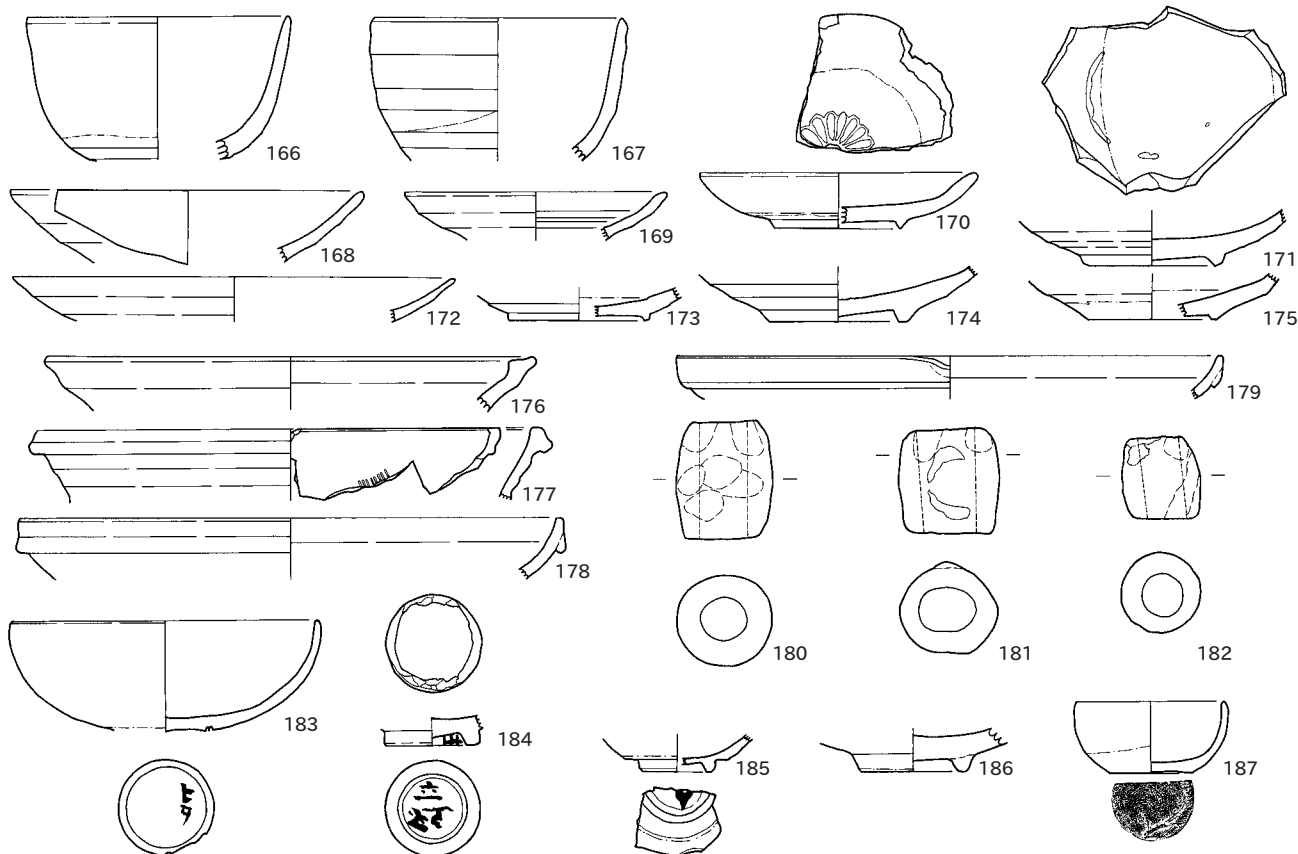
0 15cm (1:3)

0 (113・114・116・119) 20cm (1:4)

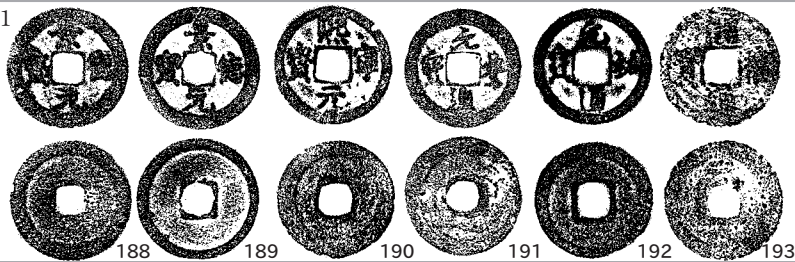


■ 黑色漆

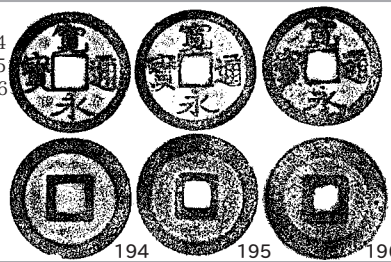




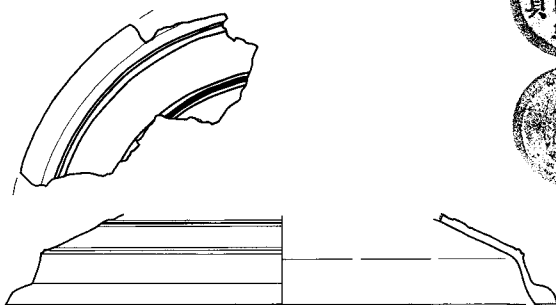
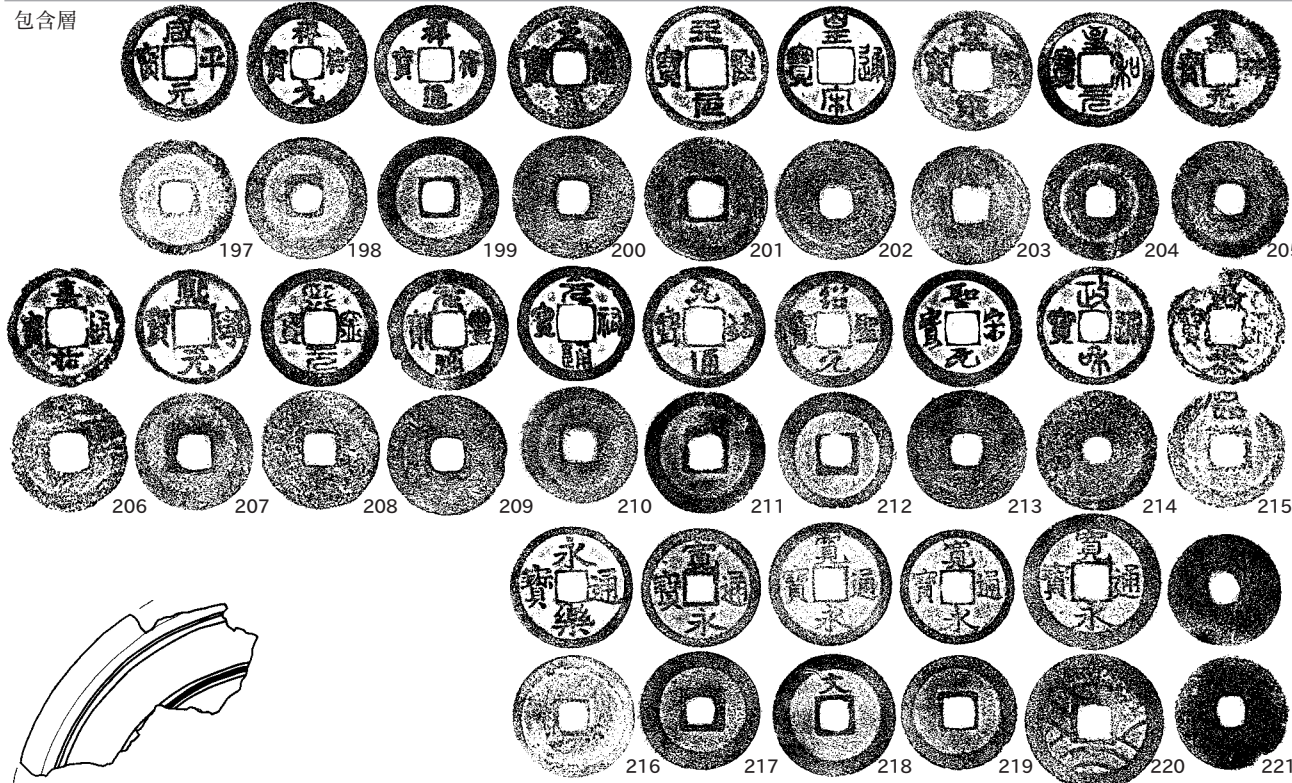
SK1



SB4  
P3:194  
P5:195  
·196

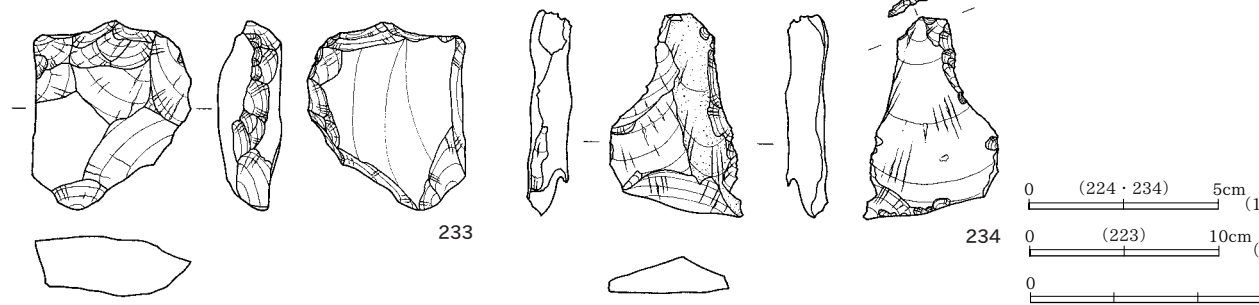
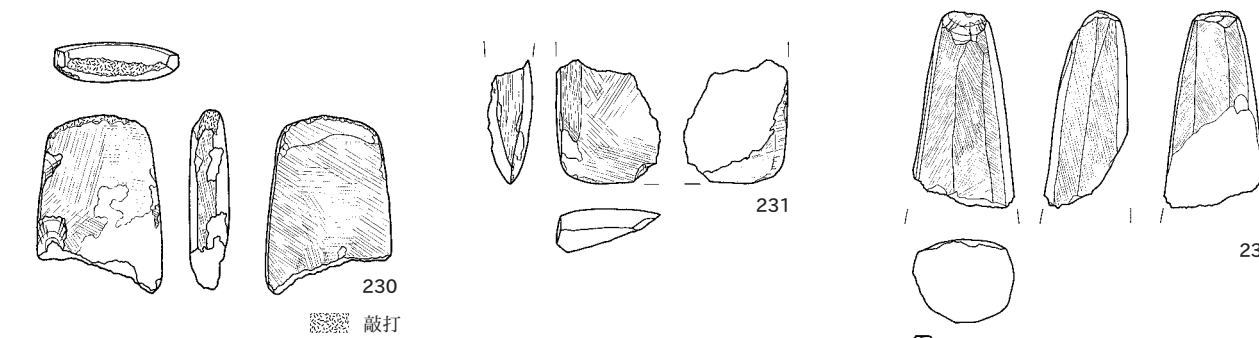
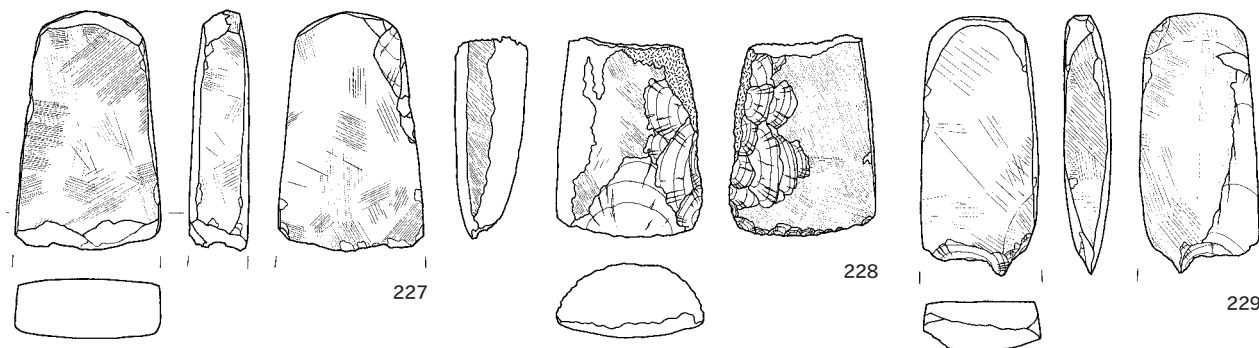
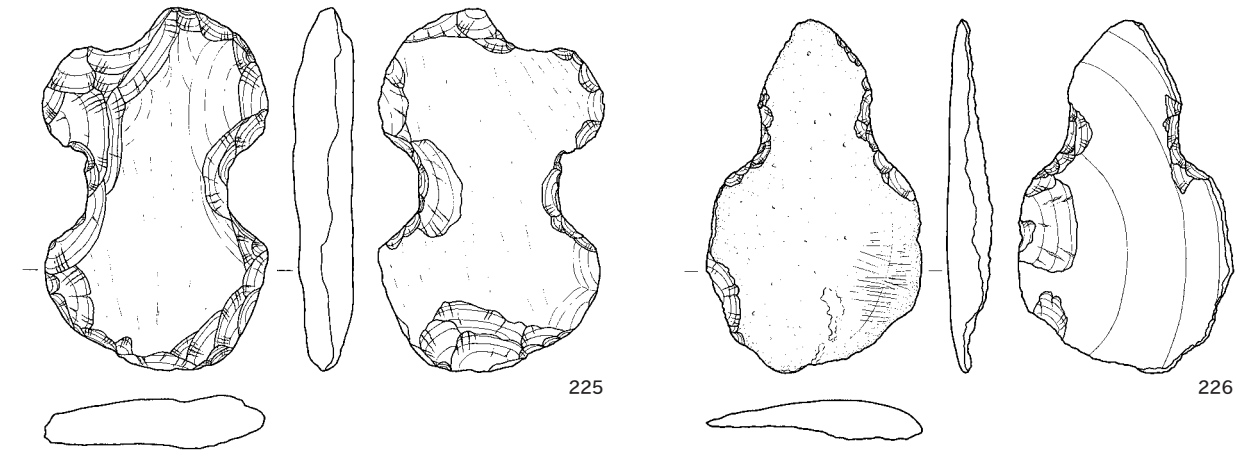
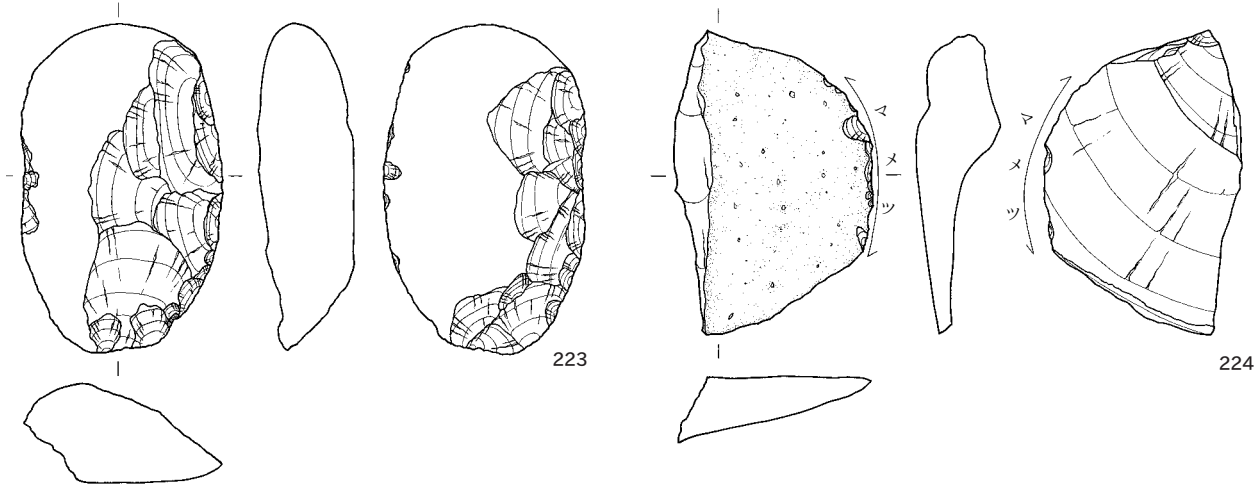


包含層



錢貨 (188~221) 0 15cm (1:3)  
= 2:3  
0 20cm (1:4)  
(176~179)



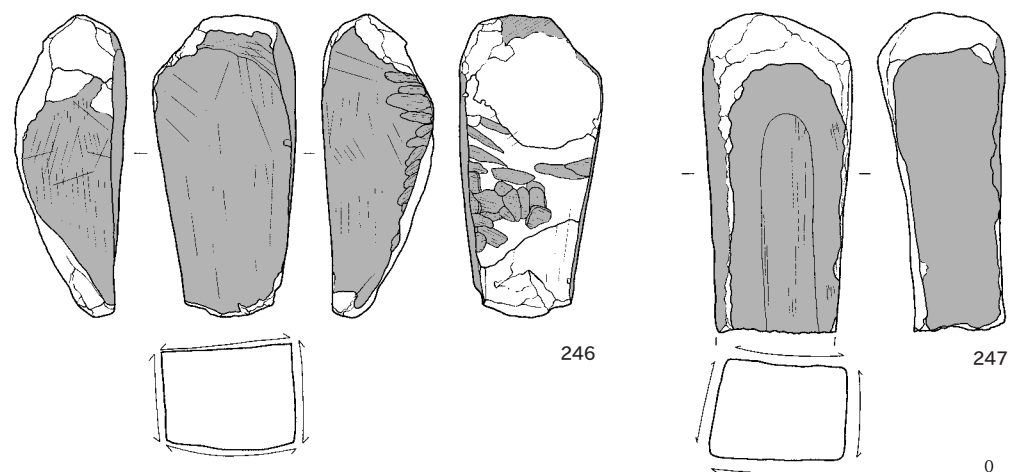
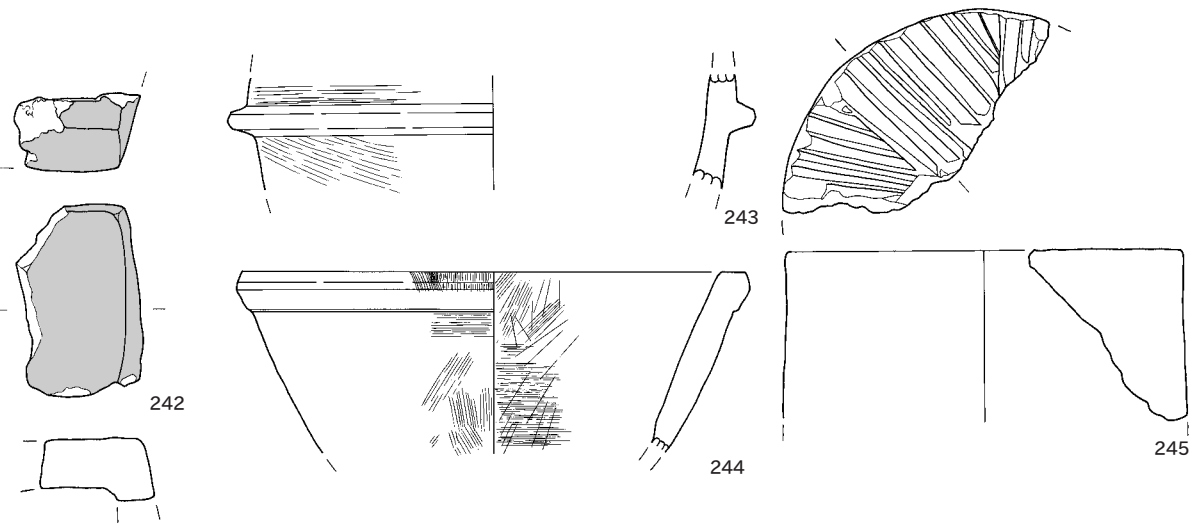
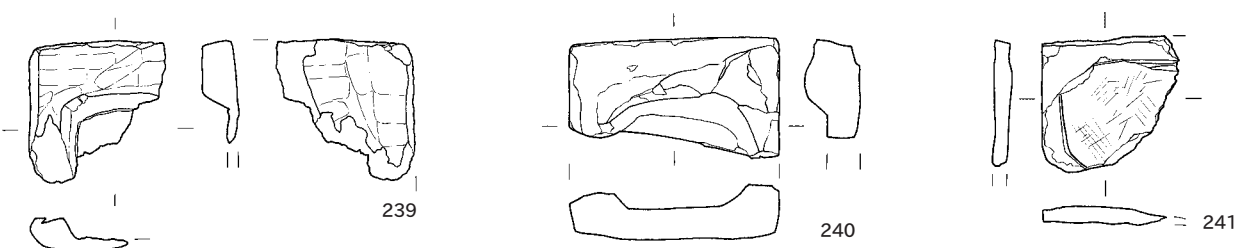
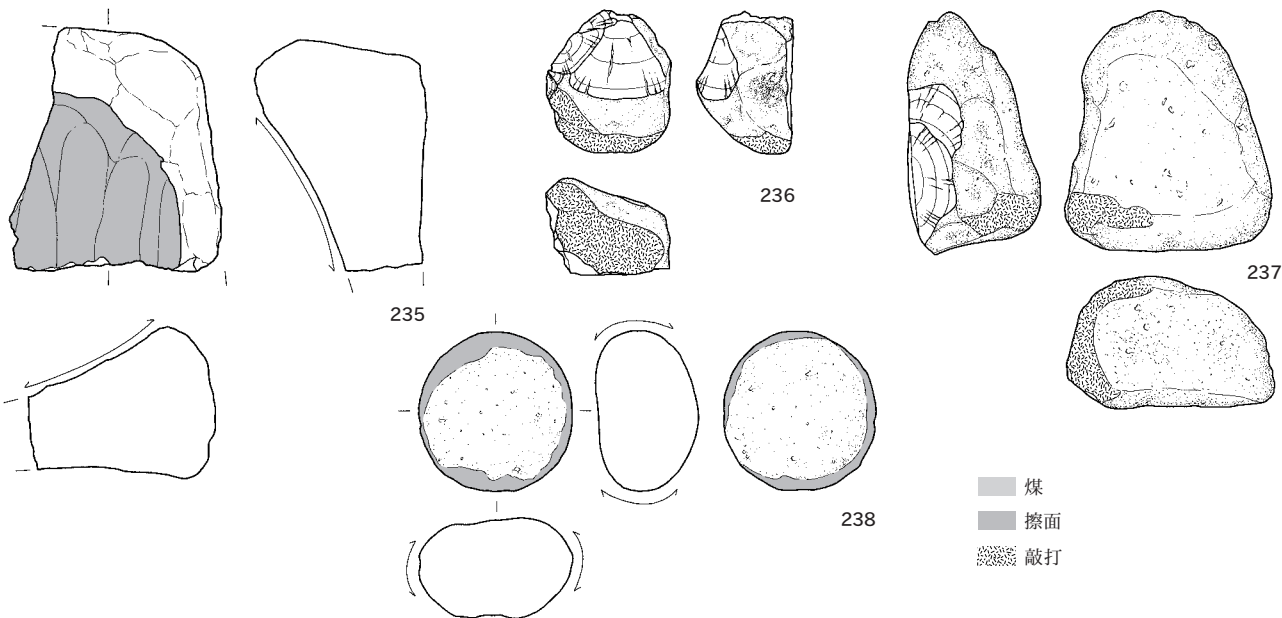


敲打

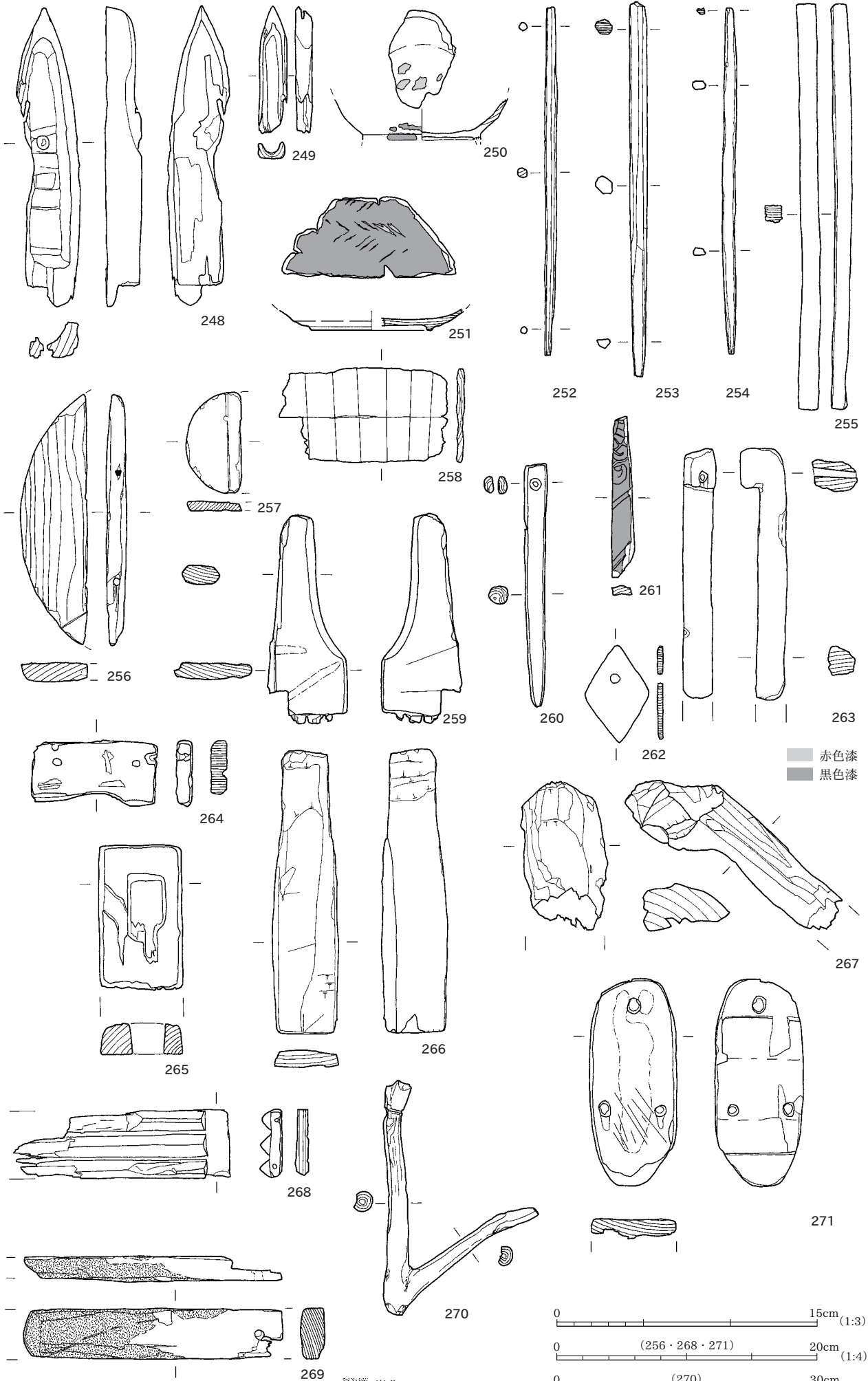
0 (224 · 234) 5cm (1:2)

0 (223) 10cm (1:4)

0 10cm (1:3)



0 (235) 10cm (1:4)  
 0 10cm (1:3)



赤色漆  
 黑色漆

炭化

0 15cm (1:3)  
 0 (256 · 268 · 271) 20cm (1:4)  
 0 (270) 30cm (1:6)



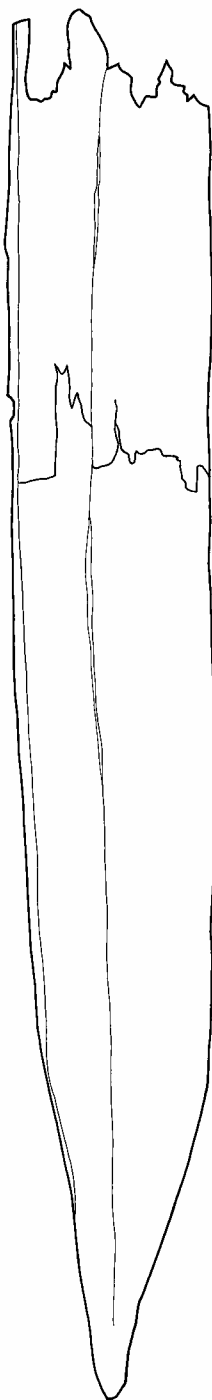
二号木簡



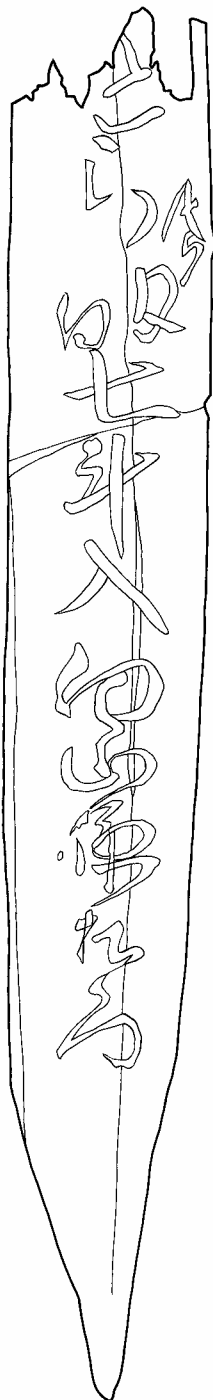
273



(裏)



(表)



272

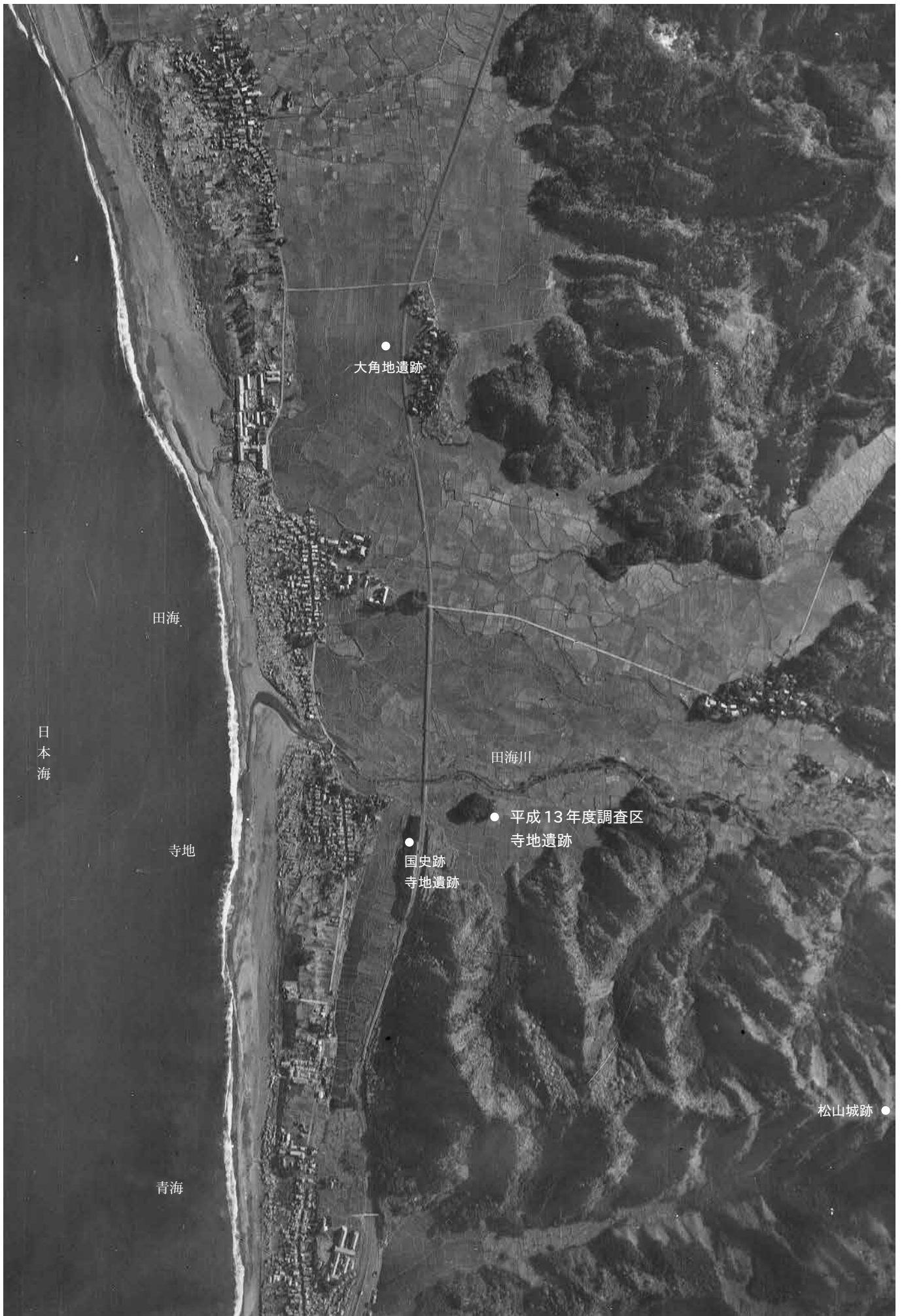
(裏)



(表)



一号木簡



[日本地図センター発行 1947年10月31日 米軍撮影]



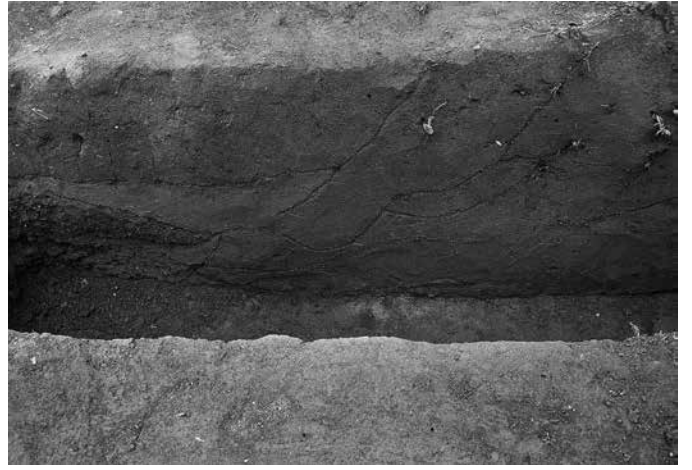
調査区遠景（南東から）



調査区遠景（西から）



基本層序 1 (独立丘中腹部)



基本層序 2 (斜面山裾西側)



基本層序 3 (斜面山裾南側)



SB4 完掘状況



独立丘中腹部完掘状況



SB4 完掘状況



斜面山裾の遺物出土状況



縄文土器出土状況



2区全景（東側から）



水場遺構



SK8 自然木出土状況



SK7 土層断面



自然経路



埋没林（根）

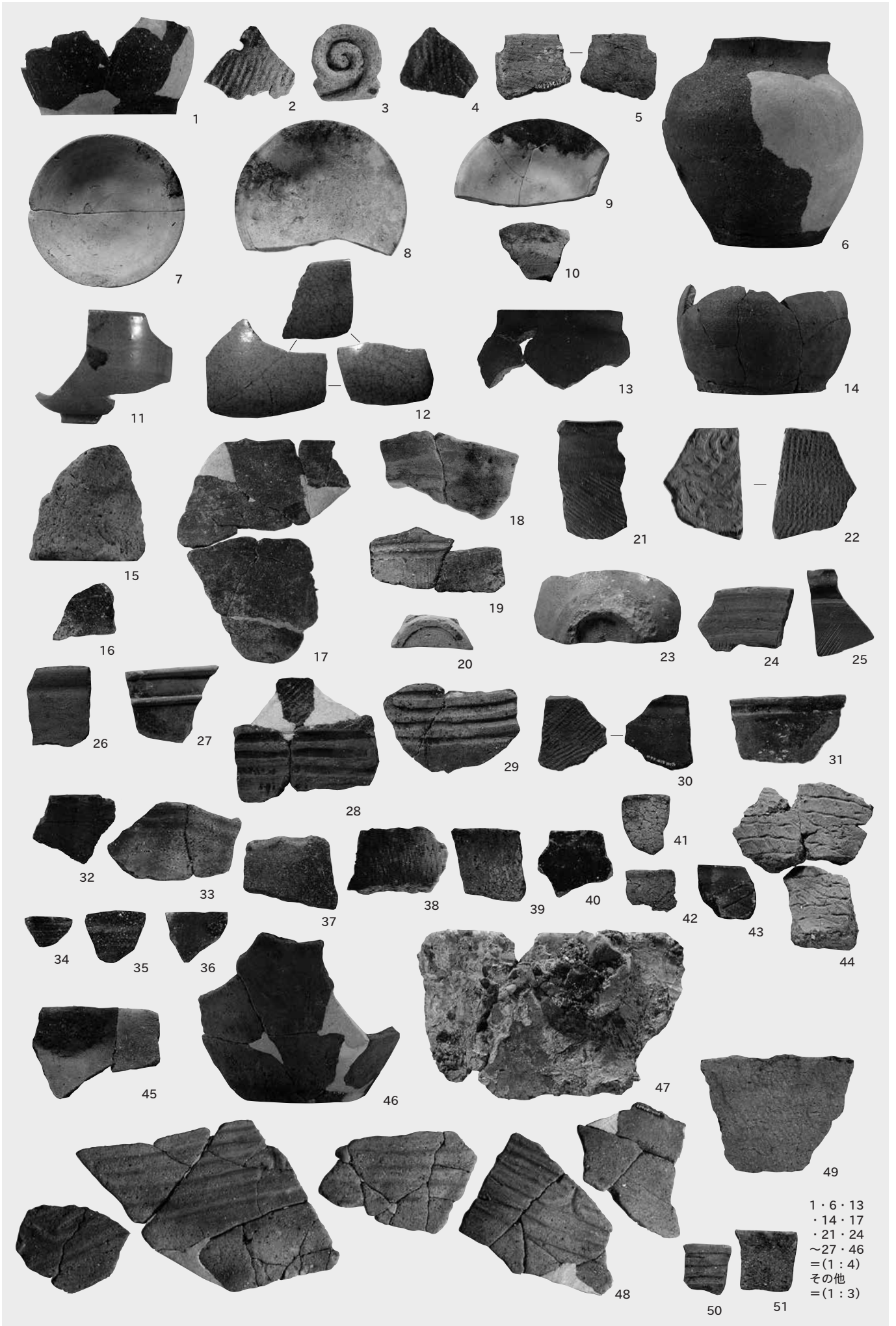


埋没林切断痕

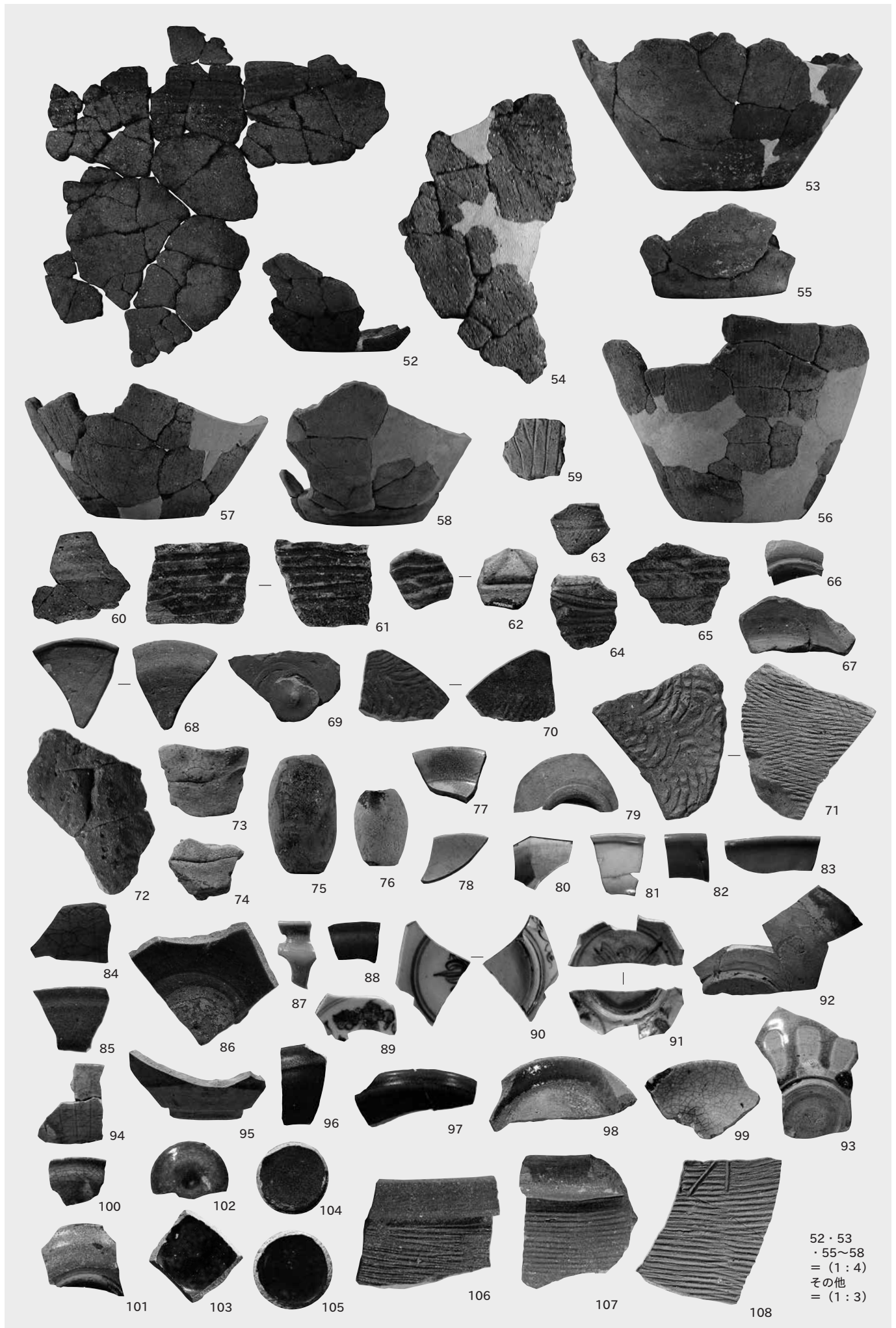


土器集中区





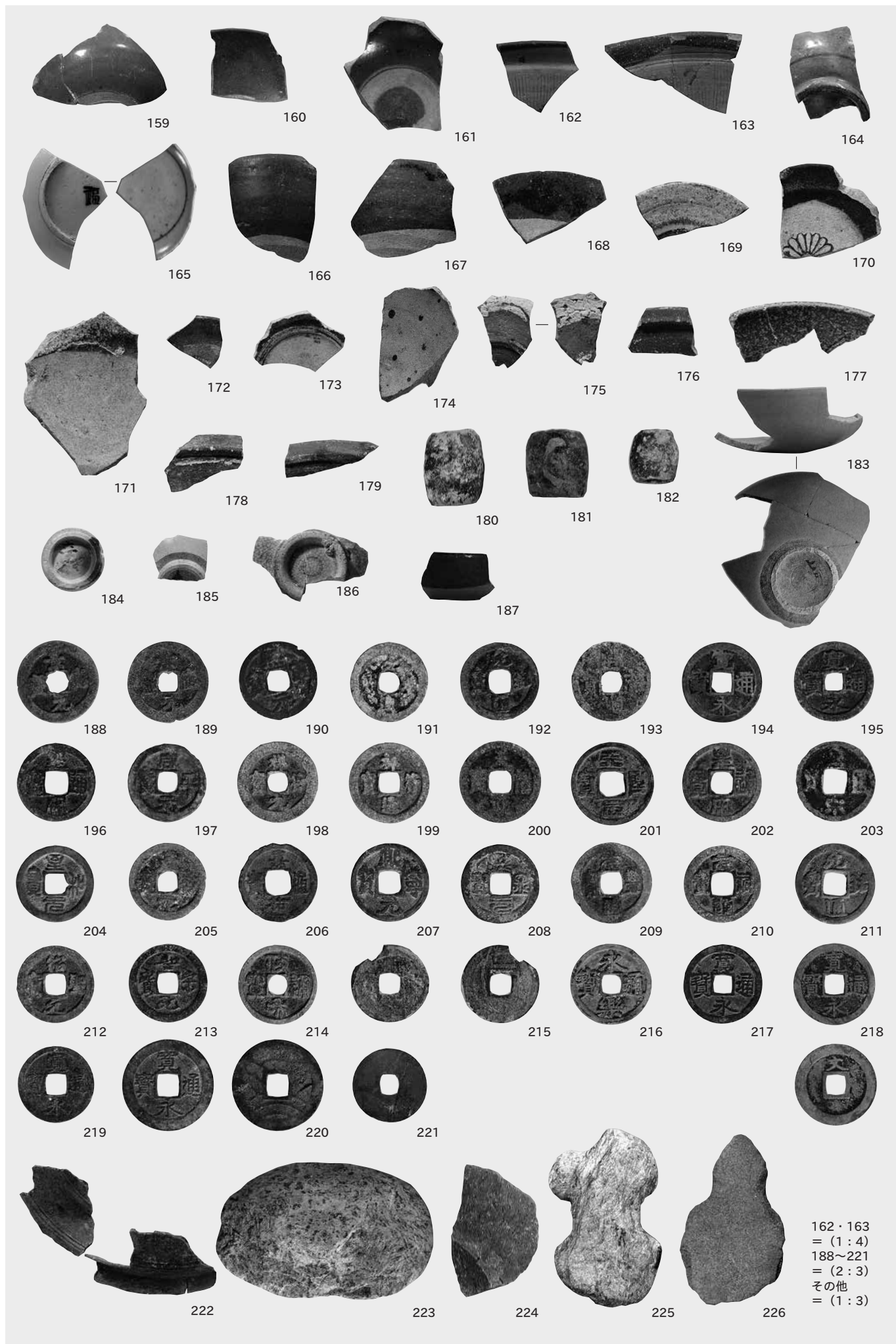
1・6・13  
 ・14・17  
 ・21・24  
 ~27・46  
 =(1:4)  
 その他  
 =(1:3)



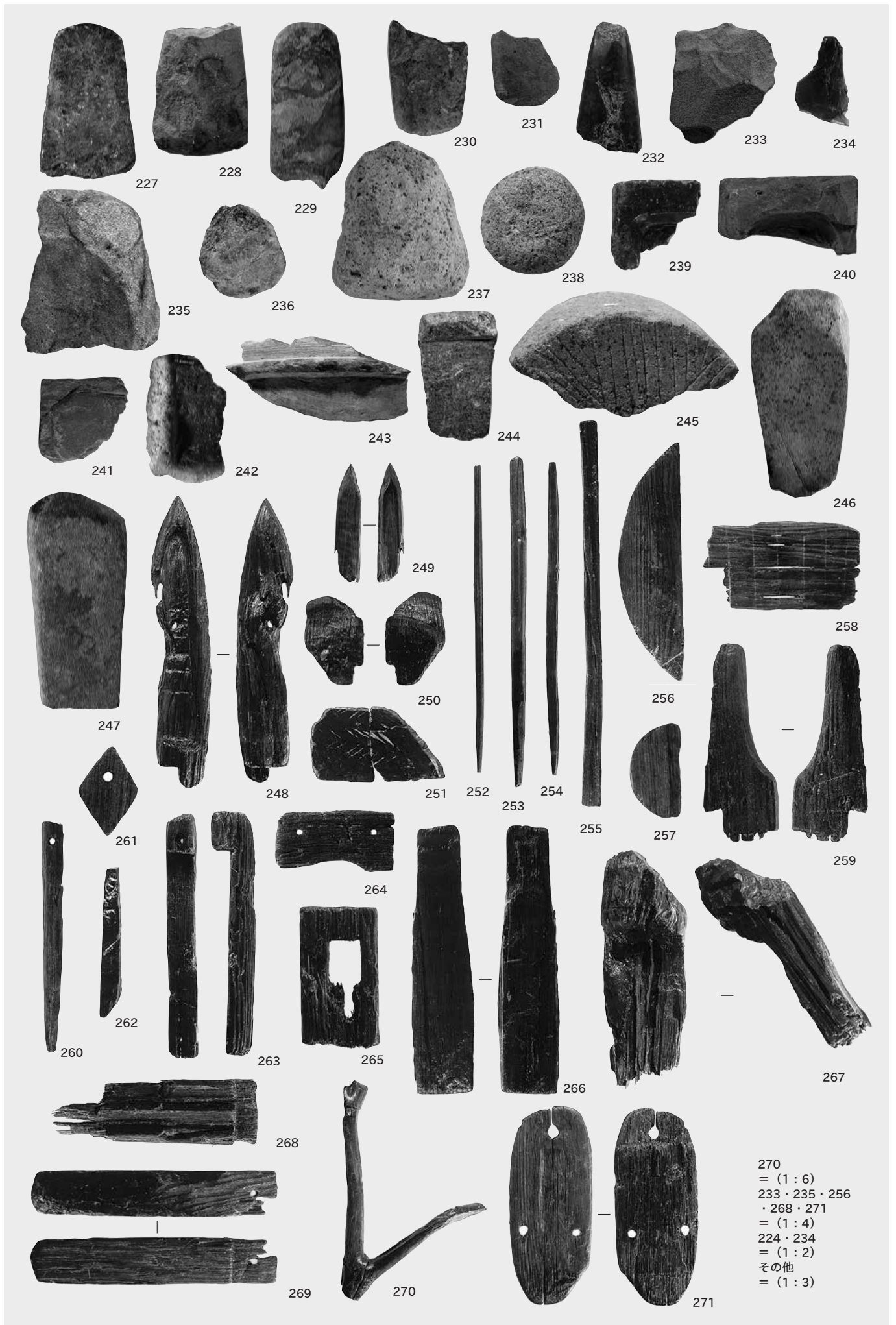
52・53  
 ・55~58  
 = (1:4)  
 その他  
 = (1:3)



113・114  
 ・116・119  
 = (1 : 4)  
 その他  
 = (1 : 3)



162・163  
= (1:4)  
188~221  
= (2:3)  
その他  
= (1:3)



# 報告書抄録

ふりがな	てらじいせき							
書名	寺地遺跡							
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第113集							
編著者名	佐藤敦史・江端高行・相羽重徳・田中一穂							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行機関	新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
発行年月日	西暦2002(平成14)年6月7日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てらじいせき 寺地遺跡	にいがたけにしくひきぎんおうのみまち 新潟県西頸城郡青海町 おおあびてらじいせき 大字寺地字大門 1021-1ほか	15563	2	37度 1分 12秒 (旧座標)	137度 48分 45秒 (旧座標)	20010409 ～20011102	3,200m <sup>2</sup>	鉄道建設 (北陸新幹線)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
寺地遺跡	散布地	縄文時代 中期・晩期	土坑	縄文土器 石器				
	散布地	室町時代	土坑	珠洲 越中瀬戸 白磁 青磁 越前 土師皿 瓦器 羽釜 錢貨など				
	散布地	江戸時代	掘立柱建物	肥前系陶磁器 越中瀬戸 近世陶器 木製品 錢貨など				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第113集 北陸新幹線関係発掘調査報告書 I 寺地遺跡	
平成14年6月6日印刷 平成14年6月7日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市新光町4番地1 電話 025 (285) 5511 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新津市大字金津93番地1 電話 0250 (25) 3981 FAX 0250 (25) 3986 印刷・製本 長谷川印刷 〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号 電話 025 (233) 0321

寺地遺跡正誤表

頁	行	誤	正
13	21	覆土から錢貨	覆土から寛永通宝
14	21	覆土の直上位には	覆土の直上位は
14	22	石核	磨製石斧未製品
14	27	S K 8	S K 7
15	27	S K 7	S K 8
16	4	室町時代の遺構	室町時代の自然流路
20	11	あるいは雷文 (137)	あるいは雷文 (139)

上記表のとおり訂正くださるよう、お願いします。

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団